

の
野 首 第 2 遺 跡

Nokubi No.2 Site

第一分冊：後期旧石器時代～縄文時代早期編

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 51

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

本書に掲載した野首第2遺跡は、平成13～16年度に発掘調査を行い、旧石器時代、縄文時代の先史に始まり、弥生時代、古墳時代、古代、中世へと連綿と続く人々の生活痕跡を確認することができました。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、郷土を誇りに思う心情を育むとともに、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しております。

最後になりましたが、調査にあたってご協力をいただいた関係各機関や地元の人々、ご指導やご助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例　言

1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した高鍋町大字上江字青木に所在する野首第2遺跡の発掘調査報告書である。本書は第一分冊として、後期旧石器時代、縄文時代草創期・早期の考古資料を報告対象とする。縄文時代後期以降については、第二分冊として別書にまとめた。また、今回第一分冊に収録していない遺物観察表および分布に関わるデータについても、第二分冊に掲載する予定である。

2 発掘調査は日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となつたが、本報告書中では日本道路公団として記載する。

3 発掘調査は平成13年5月7日～平成17年3月29日までおこなった。

4 現地における実測図・写真等の記録は、A区は尾園賢二・松本 茂が中心となり、落合賢一・川畑真二・黒木 治・重留康宏・辻 弥生・柳田裕三らがこれを補助した。B・C区は尾園・重留・嶋田史子・松本が担当した。E区は、小宇都あずさが中心となり、重留・嶋田・松本らがこれを補助した。また、空中写真撮影は、A・B・C区を九州航空・スカイサーベイ九州、E区をフジタに業務の委託をした。また、各種自然科学分析については古環境研究所に業務を委託した。

5 整理作業は発掘調査と並行して現地事務所において進めた後、発掘調査終了後は宮崎県埋蔵文化財センターにおいて平成18年12月1日までこれを継続した。

6 遺物実測・写真撮影作業は、埋蔵文化財センター本館において整理作業員の補助を得て、重留・松本がおこなつた。なお、石器実測作業の一部を九州文化財研究所・埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7 本書に使用した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50,000の図をもとに作成した。

8 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北（G. N.）を基本とし、位置図等の一部に磁北（M. N.）を使用した。本地域における真北との偏差は5°5'である。

9 国土座標は、平成13年度に設置された野首第2遺跡発掘調査基準点KBM. 1の国土座標を基に設定している。本文中では設置当時の旧平角直角座標系II（日本測地系）ではなく、世界測地系（WGS84）に変換した数値を用いている。

10 土層の色調については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。

11 石材の同定は、松田清孝氏（県総合博物館）、赤崎広志の協力を得て、松本がおこなつた。

12 本書の執筆・編集は、第I・II章を尾園・松本が、第III章第12・13節を重留が、他を松本が担当した。

13 現地での発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際し、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員として、下記の諸先生方の御指導・御協力を頂いた。

泉 拓良（奈良大学・京都大学）、小畠弘己（熊本大学）、田崎博之（愛媛大学）、廣瀬和雄（奈良女子大学・国立歴史民俗博物館）、本田道輝（鹿児島大学）、柳沢一男（宮崎大学）、岡田康博（文化庁記念物課）

また、下記の方々、諸機関にも御指導・御協力を頂いた。記して感謝したい。

秋成雅博（清武町教育委員会）、阿部 敬（東京大学）、石井 寛（神奈川県横浜市）、今田秀樹（大分県天瀬町教育委員会）、今田しのぶ、大野寅男、小川勝和（千葉県流山市教育委員会）、遠部 慎（長崎県南串山町教育委員会）、白岩 修（木城町教育委員会）、鈴木忠司（京都文化博物館）、金丸武司（田野町教育委員会）、高橋信武（大分県教育委員会）、時津裕子（九州大学）、中園 啓（鹿児島国際大学）、宮田榮二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、八木澤一郎（鹿児島県立埋蔵文化財センター）。

14 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1 遺物・遺構実測図の挿図の基本的な縮尺は次のとおりであり、例外も含め各図のキャプションに示してある。

石器：原寸， $1/2$ ，

土器： $1/3$

遺構： $1/20, 1/40$

2 石器実測図の中の記号・表示は以下のものを見示す。

・石器のレイアウト番号の右に続く表記は器種番号、器種名、石材種、出土調査区の順に記してある。器種番号は無い場合もある。

・石器の節理面は一点鎖線または斜線+ドットで表現する。

・微細剥離が確認された部分は |—| の記号を用いてその範囲を示す。

・「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に || の記号を示す。

3 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査の地層については、次頁の表に示す統一略称を用いる。

※頭に冠するM：宮崎平野を意味する識別記号（M L：ローム層 M B：黒色土層）

4 本書の第一・二分冊を通して本文、図表、図版あるいは整理終了後の保管・収蔵において遺物の種類（土器・石器・陶器・磁器・木器・鉄器・銅

器などの材質による分類）および器種名（壺・甕・深鉢・皿・ナイフ形石器・削器・石鏃・磨石など）には、次のような略号を用いる場合がある。

土器：P, 石器：L, 須恵器：Su, 陶器：Ce, 磁器：Chi, 磁（石器素材）：G1, 磁（その他）：G2, 木器：W, 金属器：M

ナイフ形石器：Kn, 角錐状石器：Tp, 台形・台形様石器：Tr, 尖頭器：Po, 挿器：Es, 削器：Ss, 彫器：Gr, 楔形石器：Pe, 石斧：Ax, 敲石：Hs, 磨石：Gs, 二次加工剥片：Rf, 微細剥離剥片：Mf, 剥片：F, 碎片：Ch, 石刃：Bl, 細石刃：Mb, 石核：Co, 細石刃石核：Mc, 原石：Ma

5 本書の本文、図表、図版中において遺構名は、次のような略号を用いる場合がある。

礫群：PSI, 集石遺構：SI, 炉穴：SP, 土坑：SC, 積穴住居：SA, 掘立柱建物：SB

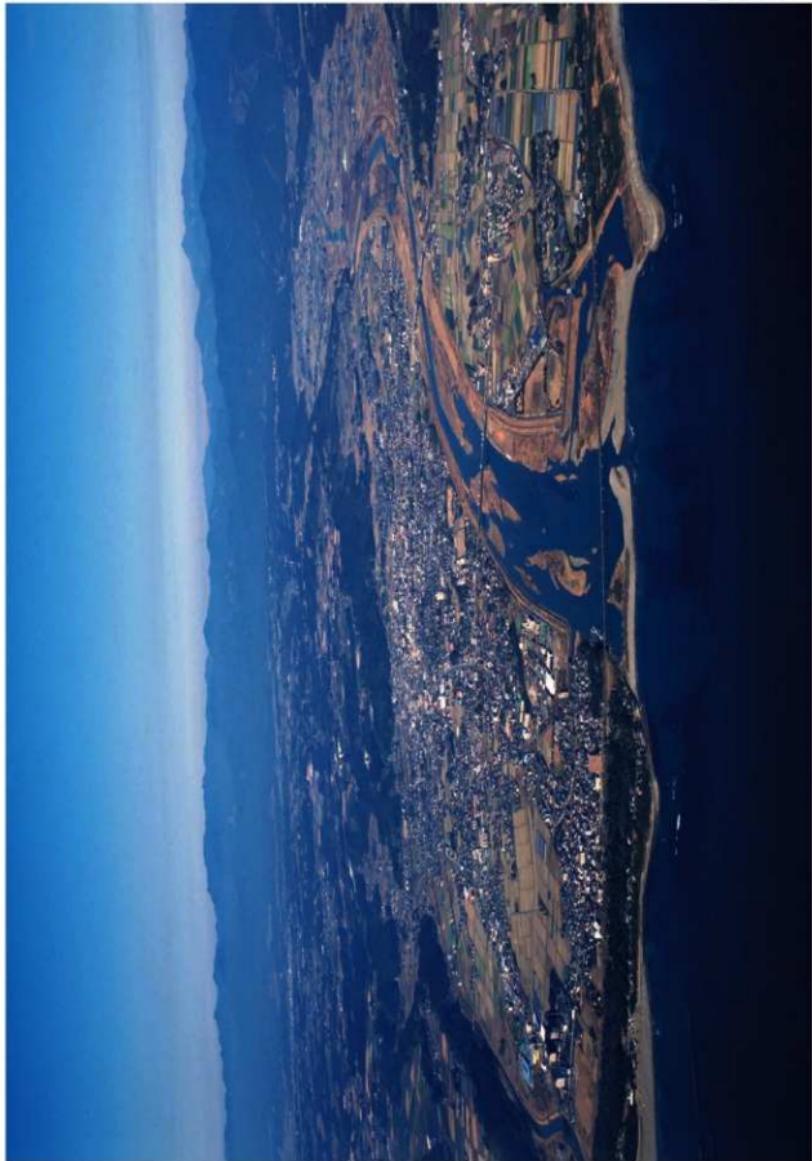
6 本書の本文、図表、図版中において石材名は、次のような略号を用いる場合がある。

黒曜石：Ob, 安山岩：An, 流紋岩：Ry, 凝灰岩：Tu, 阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩：Aso-Tu, 水晶：Cr, 石英：Qu, 鉄石英, ヒスイ輝石：Jad, 結晶片岩様緑色岩：Sg, 蛇紋岩：Se, 緑色岩：Gr, チャート：Ch, 玉髓：Ca, 瑪瑙：Ag, 結晶片岩：Sc, 頁岩：Sh, 珪質頁岩：SSh, 赤色頁岩：R-Sh, 砂岩：Sa, ホルンフェルス：Ho, 尾鈴山産溶結凝灰岩：Os

表 東九州自動車道（西都～都農間）関連の発掘調査における宮崎平野の基本層序

| No. | 略 称 | 層 名 | 年 代 | 特 徴 |
|-----|-------|---------|---------|--|
| 1 | | 表 土 | | |
| 2 | クロボク | 黒色土 | | |
| 3 | Kr-Th | 高原スコリア | AD1235 | 本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる。 |
| 4 | クロボク | 黒色土 | | |
| 5 | K-Ah | 鬼界アカホヤ | 6.5ka | 二次堆積の場合は、暗褐色の場合がある。低湿地では白い。 |
| 6 | M B 0 | 黒褐色ローム | | |
| 7 | M L 1 | 暗褐色ローム | | |
| 8 | Sz-S | 桜島薩摩 | 11ka | バミスは細かく、シャーベット状のブロックとなる。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。 |
| 9 | M L 1 | 褐色ローム | | |
| 10 | Kr-Kb | 小林軽石 | 15ka | 小丸川以北では識別が難しくなる。 |
| | | | | 深年Ⅱ段丘堆積物 |
| 11 | M B 1 | 暗褐色ローム | | |
| 12 | M L 2 | 黄褐色ローム | | 径2～3cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。ATの二次堆積や、土壤化、腐植などの影響でAT本体より色が暗いと思われる。 |
| 13 | A T | 姶良Tn | 24.5ka | 一次堆積層では最下部に大洞降下軽石（姶良大洞：A-Os）が見られる。 |
| 14 | M B 2 | 暗褐色ローム | | AT下位の黒色帯と呼ばれる部分で、固くクラックを生じやすい。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス（A-Fm,A-Ot）の密集が見られることがある。 |
| 15 | A-Fm | 姶良深港 | 26.5ka | |
| 16 | A-Ot | 姶良大塚 | 30ka | |
| 17 | M B 3 | 暗褐色ローム | | |
| 18 | M L 3 | 褐色ローム | | |
| 19 | | 赤褐色ローム | | |
| 20 | Kr-Aw | アワオコシ | 41ka | 赤褐色。スコリア、ラビリ。固結。アワオコシより細粒。降下スコリアが主体。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。 |
| 21 | M L 4 | 明褐色ローム | | |
| 22 | Kr-Iw | イワオコシ | 50ka | 赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。 |
| | | | | 雷野段丘堆積物 |
| 23 | | 明黄褐色ローム | | |
| 24 | | キンキラローム | | 黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸（A-Iw）の風化層。 |
| 25 | A-Iw | 姶良岩戸 | 60ka | 粗粒砂大～径3mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒。 |
| | | | | 阿蘇段丘堆積物 |
| 26 | Aso-4 | 阿蘇4 | 86-90ka | 阿蘇4火碎流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火碎流堆積物。風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。 |

※年代は、奥野充・福島大輔・小林哲夫 2000「南九州のテフロクロノロジー」『人類史研究』12による末較正年代。



1 野首第2遺跡周辺と高鍋市街地を空から眺める(日向灘方向から)

巻頭図版 2



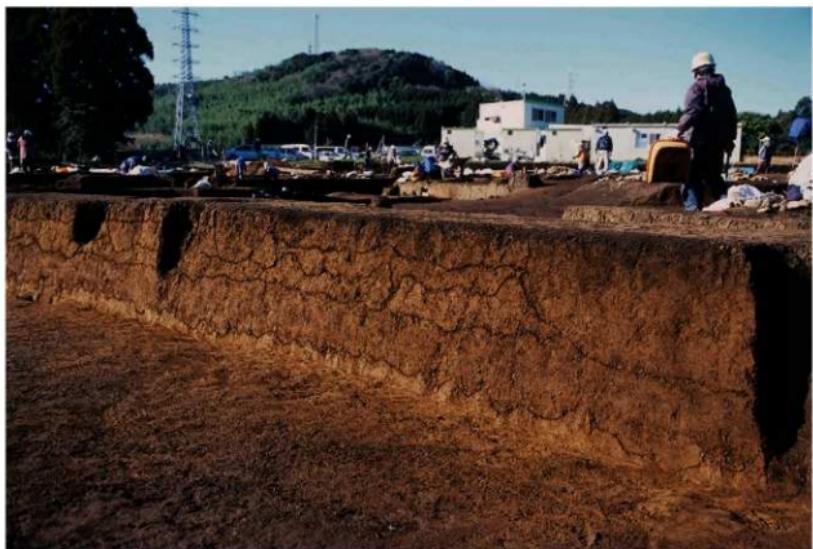
2 ATT直上(第IV期)の礫群(第19号)



3 ATT下位黒色帯中～下部(第二期)の礫群(第53号) 背景の土層上部の黄色味がかった部分がATT



4 繩文時代早期の環状ビット群（第1号）



5 A T上位～III層（縄文早期）までの地層堆積のようす（右手前は炉穴）

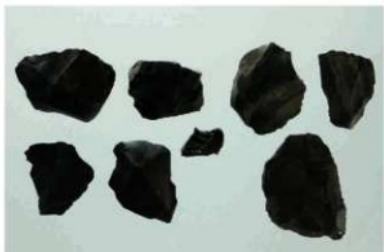
巻頭図版 4



6 旧石器時代の使用石材（1） 流紋岩Ⅰ群



7 旧石器時代の使用石材（2） 流紋岩Ⅱ群



8 旧石器時代の使用石材（3） 流紋岩Ⅲ群



9 旧石器時代の使用石材（4） 硅質頁岩Ⅰ群



10 旧石器時代の使用石材（5） 硅質頁岩Ⅱ群



11 旧石器時代の使用石材（6） 硅質頁岩Ⅲ群



12 旧石器時代の使用石材（7） ホルンフェルス



13 旧石器時代の使用石材（8） 成因不明

本文目次

| | |
|--------------------------------|-----|
| 第Ⅰ章 はじめに | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第Ⅱ章 調査の概要 | |
| 第1節 遺跡の位置と環境 | 2 |
| 第2節 発掘調査・整理作業の経過 | 6 |
| 第3節 基本層序 | 9 |
| 第Ⅲ章 調査の記録 | |
| 第1節 後期旧石器時代の石器の器種分類および類型化について | 12 |
| 第2節 石器に使用された石材について | 14 |
| 第3節 石器および礫の接合について | 17 |
| 第4節 遺物の分布と時間差について | 19 |
| 第5節 後期旧石器時代第Ⅰ期 | 20 |
| 第6節 後期旧石器時代第Ⅱ期 | 23 |
| 第7節 後期旧石器時代第Ⅲ期 | 34 |
| 第8節 後期旧石器時代第Ⅳ期 | 48 |
| 第9節 後期旧石器時代第Ⅴ期 | 61 |
| 第10節 後期旧石器時代第Ⅵ期 | 96 |
| 第11節 後期旧石器時代第Ⅶ期 | 125 |
| 第12節 縄文時代の土器・石器の器種分類および類型化について | 134 |
| 第13節 縄文時代早期 | 135 |
| 第14節 自然科学分析の成果 | 185 |
| 第Ⅳ章 成果と課題 | |
| 第1節 後期旧石器時代石器群の編年的整理 | 186 |
| 第2節 縄文時代早期土器群の編年的整理 | 189 |
| 第3節 縄文時代早期の炉穴と集石遺構 | 199 |
| 第Ⅴ章 おわりに | 200 |
| 引用・参考文献 | 200 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------------|----|
| 第1図 野首第2遺跡および東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡の位置 | 3 |
| 第2図 野首第2遺跡と周辺の主な遺跡 | 4 |
| 第3図 野首第2遺跡と周辺地形・遺跡との高低差（日向灘から） | 4 |
| 第4図 野首第2遺跡における調査区の区分とグリッド設定 | 9 |
| 第5図 野首第2遺跡の基本層序と遺物包含層 | 11 |
| 第6図 第Ⅰ期の石器 | 20 |
| 第7図 第Ⅰ期の石器の分布 | 21 |
| 第8図 第Ⅰ期の礫群 | 22 |
| 第9図 第Ⅱ期の石器の分布 | 24 |
| 第10図 第Ⅱ期の石器の分布 | 25 |
| 第11図 第Ⅱ期の礫群（1） | 27 |
| 第12図 第Ⅱ期の礫群（2） | 28 |
| 第13図 第Ⅱ期の礫群（3） | 29 |
| 第14図 第Ⅱ期の礫群（4） | 30 |
| 第15図 第Ⅱ期の礫群（5） | 31 |
| 第16図 第Ⅱ期の石器群（1） | 32 |
| 第17図 第Ⅱ期の石器群（2） | 33 |
| 第18図 第Ⅱ期の石器群（3） | 34 |
| 第19図 第Ⅲ期の石器の分布 | 38 |
| 第20図 第Ⅲ期の石器の分布 | 39 |
| 第21図 第Ⅲ期の礫群（1） | 40 |
| 第22図 第Ⅲ期の礫群（2） | 41 |
| 第23図 第Ⅲ期の礫群（3） | 42 |
| 第24図 第Ⅲ期の礫群（4） | 43 |
| 第25図 第Ⅲ期の石器群（1） | 44 |
| 第26図 第Ⅲ期の石器群（2） | 45 |
| 第27図 第Ⅲ期の石器群（3） | 46 |
| 第28図 第Ⅲ期の石器群（4） | 47 |
| 第29図 第Ⅳ期の石器の分布 | 50 |
| 第30図 第Ⅳ期の礫群（1） | 52 |
| 第31図 第Ⅳ期の礫群（2） | 53 |
| 第32図 第Ⅳ期の礫群（3） | 54 |
| 第33図 第Ⅳ期の礫群（4） | 55 |
| 第34図 第Ⅳ期の礫群（5） | 56 |
| 第35図 第Ⅳ期の石器群（1） | 57 |

| | | |
|-------|------------------|-----|
| 第36図 | 第IV期の石器群（2） | 58 |
| 第37図 | 第IV期の石器群（3） | 59 |
| 第38図 | 第IV期の石器群（4） | 60 |
| 第39図 | 第V期の石器の分布（1） | 62 |
| 第40図 | 第V期の石器の分布（2） | 64 |
| 第41図 | 第V期の礫群（1） | 67 |
| 第42図 | 第V期の礫群（2） | 68 |
| 第43図 | 第V期の礫群（3） | 69 |
| 第44図 | 第V期の礫群（4） | 70 |
| 第45図 | 第V期の礫群（5） | 71 |
| 第46図 | 第V期の礫群（6） | 72 |
| 第47図 | 第V期の石器群（1） | 73 |
| 第48図 | 第V期の石器群（2） | 74 |
| 第49図 | 第V期の石器群（3） | 75 |
| 第50図 | 第V期の石器群（4） | 76 |
| 第51図 | 第V期の石器群（5） | 77 |
| 第52図 | 第V期の石器群（6） | 78 |
| 第53図 | 第V期の石器群（7） | 79 |
| 第54図 | 第V期の石器群（8） | 80 |
| 第55図 | 第V期の石器群（9） | 81 |
| 第56図 | 第V期の石器群（10） | 82 |
| 第57図 | 第V期の石器群（11） | 83 |
| 第58図 | 第V期の石器群（12） | 84 |
| 第59図 | 第V期の石器群（13） | 85 |
| 第60図 | 第V期の石器群（14） | 86 |
| 第61図 | 第V期の石器群（15） | 87 |
| 第62図 | 第V期の石器群（16） | 88 |
| 第63図 | 第V期の石器群（17） | 89 |
| 第64図 | 第V期の石器群（18） | 90 |
| 第65図 | 第V期の石器群（19） | 91 |
| 第66図 | 第V期の石器群（20） | 92 |
| 第67図 | 第V期の石器群（21） | 93 |
| 第68図 | 第V期の石器群（22） | 94 |
| 第69図 | 第V期の石器群（23） | 95 |
| 第70図 | 第VI期の石器の分布 | 97 |
| 第71図 | 第VI期の礫群（1） | 98 |
| 第72図 | 第VI期の礫群（2） | 99 |
| 第73図 | 第VI期の石器群（1） | 100 |
| 第74図 | 第VI期の石器群（2） | 101 |
| 第75図 | 第VI期の石器群（3） | 104 |
| 第76図 | E区における母岩No.42の分布 | 105 |
| 第77図 | 第VI期の石器群（4） | 106 |
| 第78図 | 第VI期の石器群（5） | 107 |
| 第79図 | 第VI期の石器群（6） | 108 |
| 第80図 | 第VI期の石器群（7） | 109 |
| 第81図 | 第VI期の石器群（8） | 110 |
| 第82図 | 第VI期の石器群（9） | 111 |
| 第83図 | 第VI期の石器群（10） | 112 |
| 第84図 | 第VI期の石器群（11） | 113 |
| 第85図 | 第VI期の石器群（12） | 114 |
| 第86図 | 第VI期の石器群（13） | 115 |
| 第87図 | 第VI期の石器群（14） | 116 |
| 第88図 | 第VI期の石器群（15） | 117 |
| 第89図 | 第VI期の石器群（16） | 118 |
| 第90図 | 第VI期の石器群（17） | 119 |
| 第91図 | 第VI期の石器群（18） | 120 |
| 第92図 | 第VI期の石器群（19） | 121 |
| 第93図 | 第VI期の石器群（20） | 122 |
| 第94図 | 第VI期の石器群（21） | 123 |
| 第95図 | 第VI期の石器群（22） | 124 |
| 第96図 | 第VII期の石器と礫の分布 | 127 |
| 第97図 | 第VII期の礫群 | 128 |
| 第98図 | 第VII期の石器群（1） | 129 |
| 第99図 | 第VII期の石器群（2） | 130 |
| 第100図 | 第VII期の石器群（3） | 131 |
| 第101図 | 第VII期の石器群（4） | 132 |
| 第102図 | 第VII期の石器群（5） | 133 |
| 第103図 | 炉穴実測図（1） | 137 |
| 第104図 | 炉穴実測図（2） | 138 |
| 第105図 | 炉穴実測図（3） | 139 |
| 第106図 | 炉穴実測図（4） | 140 |
| 第107図 | 炉穴実測図（5） | 141 |
| 第108図 | 炉穴実測図（6） | 142 |
| 第109図 | 炉穴実測図（7） | 143 |
| 第110図 | 炉穴実測図（8） | 144 |
| 第111図 | 環状ビット群実測図（1） | 145 |
| 第112図 | 環状ビット群実測図（2） | 146 |
| 第113図 | 縄文土器実測図（1） | 148 |
| 第114図 | 縄文土器実測図（2） | 149 |
| 第115図 | 縄文土器実測図（3） | 151 |
| 第116図 | 縄文土器実測図（4） | 152 |
| 第117図 | 縄文土器実測図（5） | 153 |

表目次

| | |
|-------------------------------|-----|
| 第118図 繩文土器実測図(6) ······ | 154 |
| 第119図 繩文土器実測図(7) ······ | 155 |
| 第120図 繩文土器実測図(8) ······ | 157 |
| 第121図 繩文土器実測図(9) ······ | 158 |
| 第122図 繩文土器実測図(10) ······ | 160 |
| 第123図 繩文土器実測図(11) ······ | 162 |
| 第124図 繩文土器実測図(12) ······ | 163 |
| 第125図 繩文時代早期の石器(1) ······ | 164 |
| 第126図 繩文時代早期の石器(2) ······ | 165 |
| 第127図 繩文時代早期の石器(3) ······ | 168 |
| 第128図 繩文時代早期の石器(4) ······ | 169 |
| 第129図 繩文土器実測図(13) ······ | 177 |
| 第130図 繩文土器実測図(14) ······ | 178 |
| 第131図 繩文土器実測図(15) ······ | 179 |
| 第132図 繩文土器実測図(16) ······ | 180 |
| 第133図 繩文土器実測図(17) ······ | 181 |
| 第134図 I群出土重量分布図 ······ | 190 |
| 第135図 II群出土重量分布図 ······ | 190 |
| 第136図 押型文施文方向別出土量 ······ | 191 |
| 第137図 文様出土量 ······ | 191 |
| 第138図 横施文文様別出土量 ······ | 191 |
| 第139図 縦・斜方向文様別出土量 ······ | 191 |
| 第140図 横施文出土重量分布図 ······ | 192 |
| 第141図 縦・斜施文出土重量分布図 ······ | 192 |
| 第142図 1D類出土重量分布図 ······ | 192 |
| 第143図 4A・B類出土重量分布図 ······ | 192 |
| 第144図 4C類出土重量分布図 ······ | 193 |
| 第145図 4D類出土重量分布図 ······ | 193 |
| 第146図 4E類出土重量分布図 ······ | 194 |
| 第147図 III群2出土重量分布図 ······ | 194 |
| 第148図 1・2類出土重量分布図 ······ | 197 |
| 第149図 3類出土重量分布図 ······ | 197 |
| 第150図 4・5・6類出土重量分布図 ······ | 198 |
| 第151図 V群出土重量分布図 ······ | 198 |
| 第1表 土器觀察表(1) ······ | 170 |
| 第2表 土器觀察表(2) ······ | 171 |
| 第3表 土器觀察表(3) ······ | 172 |
| 第4表 土器觀察表(4) ······ | 173 |
| 第5表 土器觀察表(5) ······ | 174 |
| 第6表 土器觀察表(6) ······ | 175 |
| 第7表 土器觀察表(7) ······ | 176 |
| 第8表 土器觀察表(8) ······ | 181 |
| 第9表 土器觀察表(9) ······ | 182 |
| 第10表 土器觀察表(10) ······ | 183 |
| 第11表 土器觀察表(11) ······ | 184 |
| 第12表 押型文土器の時間的位置づけ ······ | 195 |
| 第13表 各土器群における胎土(粘土)の使用 ······ | 199 |

図版目次

巻頭図版

巻頭図版 1

- 1 野首第2遺跡周辺と高鍋市街地を空から眺める

巻頭図版 2

- 2 A T直上(第IV期)の礫群
3 A T下位黒色帯中～下部(第II期)の礫群

巻頭図版 3

- 4 縄文時代早期の環状ピット群
5 A T上位～Ⅲ層(縄文早期)までの地層堆積のようす

巻頭図版 4

- 6 旧石器時代の使用石材(1) 流紋岩Ⅰ群
7 旧石器時代の使用石材(2) 流紋岩Ⅱ群
8 旧石器時代の使用石材(3) 流紋岩Ⅲ群
9 旧石器時代の使用石材(4) 珪質頁岩Ⅰ
10 旧石器時代の使用石材(5) 珪質頁岩Ⅱ群
11 旧石器時代の使用石材(6) 珪質頁岩Ⅲ群
12 旧石器時代の使用石材(7) ホルンフェルス
13 旧石器時代の使用石材(8) 成因不明

巻末図版

巻末図版 1 ······ 203

- 1 遺跡遠景(1) 舌状台地の根元から北東を望む
2 遺跡遠景(2) 山古墳群から北西に野首第2遺跡を見上げる

巻末図版 2 ······ 204

- 3 遺跡遠景(3) 蛇行する小丸川、遺跡の背後に控える台地と山地

4 遺跡近景

巻末図版 3 ······ 205

- 5 後期旧石器第I期の礫群
6 後期旧石器第II期の礫群(1)

巻末図版 4 ······ 206

- 7 後期旧石器第II期の礫群(2)
8 後期旧石器第II期の礫群(3)

巻末図版 5 ······ 207

- 9 後期旧石器第II期の礫群(4)
10 後期旧石器第II期の礫群(5)

巻末図版 6 ······ 208

- 11 後期旧石器第II期の礫群(6)
12 後期旧石器第II期の礫群(7)
13 後期旧石器第II期の礫群(8)
14 後期旧石器第II期の礫群(9)
15 後期旧石器第II期の礫群(10)
16 後期旧石器第II期の遺物・礫出土状況(1)
17 後期旧石器第II期の遺物・礫出土状況(2)
18 後期旧石器第III期の礫群(1)

巻末図版 7 ······ 209

- 19 後期旧石器第III期の礫群(2)
20 後期旧石器第III期の礫群(3)
21 後期旧石器第III期の礫群(4)
22 後期旧石器第III期の遺物・礫検出状況

23 後期旧石器第IV期の礫群(1)

巻末図版 8 ······ 210

- 24 後期旧石器第IV期の礫群(2)
25 後期旧石器第IV期の礫群(3)

巻末図版 9 ······ 211

- 26 後期旧石器第IV期の礫群(4)
27 後期旧石器第IV期の礫群(5)
28 後期旧石器第IV期の礫群(6)
29 後期旧石器第IV期の礫群(7)

30 後期旧石器第V期の礫群(1)

巻末図版 10 ······ 212

- 31 後期旧石器第V期の礫群(2)
32 後期旧石器第V期の礫群(3)

巻末図版 11 ······ 213

- 33 後期旧石器第V期の礫群(4)
34 後期旧石器第V期の礫群(5)
35 後期旧石器第V期の礫群(6)
36 後期旧石器第V期の礫群(7)
37 後期旧石器第V期の礫群(8)
38 後期旧石器第V期の礫群(9)
39 後期旧石器第V期の礫群(10)
40 後期旧石器第VI期の礫群

巻末図版 12 ······ 214

- 41 縄文早期の集石遺構(1) 検出状況
42 縄文早期の集石遺構(2) 配石
43 縄文早期の集石遺構(3) 配石
44 縄文早期の集石遺構(4) 検出状況

| | | |
|--------------------------|------------------------------|-----|
| 45 縄文早期の集石遺構（5）配石 | 78 後期旧石器第V期の石器（5） | |
| 卷末図版 13 | 79 後期旧石器第V期の石器（6） | |
| 46 縄文早期の集石遺構（6）検出状況 | 80 後期旧石器第V期の石器（7） | |
| 47 縄文早期の集石遺構（7）配石 | 81 後期旧石器第V期の石器（8） | |
| 48 縄文早期の集石遺構（8）検出状況 | 82 後期旧石器第V期の石器（9） | |
| 49 縄文早期の集石遺構（9）断面（四分） | 83 後期旧石器第V期の石器（10） | |
| 50 縄文早期の集石遺構（10）断面 | 84 後期旧石器第V期の石器（11） | |
| 51 縄文早期の集石遺構（11）配石 | 卷末図版 20 | 222 |
| 52 縄文早期の環状ピット群 | 85 後期旧石器第V期の石器（12） | |
| 53 縄文早期の散礫 | 86 後期旧石器第V期の石器（13） | |
| 卷末図版 14 | 卷末図版 21 | 223 |
| 54 縄文早期の炉穴（1） | 87 後期旧石器第V期の石器（14） | |
| 55 縄文早期の炉穴（2） | 88 後期旧石器第V期の石器（15） | |
| 56 縄文早期の炉穴（3） | 89 後期旧石器第V期の石器（16） | |
| 57 縄文早期の炉穴（4）集石遺構を切って構築 | 90 後期旧石器第V期の石器（17） | |
| 58 縄文早期の炉穴（5）磨石を包含 | 91 後期旧石器第V期の石器（18） | |
| 卷末図版 15 | 卷末図版 22 | 224 |
| 59 縄文早期の炉穴（6）環状石斧を包含 | 92 後期旧石器第VI期の石器（1） | |
| 60 縄文早期の炉穴（7）環状石斧近影 | 卷末図版 23 | 225 |
| 61 縄文早期の炉穴（8） | 93 後期旧石器第VI期の石器（2） | |
| 62 縄文早期の石斧製作跡 | 94 後期旧石器第VI期の石器（3） | |
| 63 後期旧石器～縄文早期の陥し穴状遺構検出状況 | 卷末図版 24 | 226 |
| 64 後期旧石器～縄文早期の陥し穴状遺構 | 95 後期旧石器第VI期の石器（4） | |
| スライス調査 | 96 後期旧石器第VI期の石器（5） | |
| 卷末図版 16 | 卷末図版 25 | 227 |
| 65 後期旧石器第I期の石器 | 97 後期旧石器第VI期の石器（6） | |
| 66 後期旧石器第II期の石器（1） | 98 後期旧石器第VII期の石器 | |
| 67 後期旧石器第II期の石器（2） | 卷末図版 26 | 228 |
| 68 後期旧石器第III期の石器（1） | 99 縄文早期の土器（1）Ⅰ群　爪形文 | |
| 69 後期旧石器第III期の石器（2） | 100 縄文早期の土器（2）Ⅱ群　無文 | |
| 卷末図版 17 | 101 縄文早期の土器（3）外面　Ⅲ群　山形押型文 | |
| 70 後期旧石器第IV期の石器（1） | 102 縄文早期の土器（3）内面　Ⅲ群　山形押型文 | |
| 71 後期旧石器第IV期の石器（2） | 103 縄文早期の土器（4）外面　Ⅲ群　楕円押型文4C類 | |
| 72 後期旧石器第IV期の石器（3） | 104 縄文早期の土器（4）内面　Ⅲ群　楕円押型文4C類 | |
| 73 後期旧石器第IV期の石器（4） | 105 縄文早期の土器（5）外面　Ⅲ群　楕円押型文4D類 | |
| 74 後期旧石器第V期の石器（1） | 106 縄文早期の土器（5）内面　Ⅲ群　楕円押 | |
| 卷末図版 18 | | |
| 75 後期旧石器第V期の石器（2） | | |
| 76 後期旧石器第V期の石器（3） | | |
| 卷末図版 19 | | |
| 77 後期旧石器第V期の石器（4） | | |

| | |
|--|-----|
| 型文 4D 類 | |
| 卷末図版 27 | 229 |
| 107 繩文早期の土器 (6) Ⅲ群 楕円押型文 4D 類 | |
| 108 繩文早期の土器 (7) Ⅲ群 楕円押型文 4D 類 | |
| 109 繩文早期の土器 (8) 外面 Ⅲ群 楕円押 型文 4E 類 | |
| 110 繩文早期の土器 (8) 内面 Ⅲ群 楕円押 型文 4E 類 | |
| 111 繩文早期の土器 (9) Ⅲ群 楕円押型文 胴部 | |
| 112 繩文早期の土器 (10) Ⅲ群 複合押型文 | |
| 113 繩文早期の土器 (11) Ⅲ群 底部 | |
| 卷末図版 28 | 230 |
| 114 繩文早期の土器 (12) Ⅲ群 枝回転文・繩文・ 撚糸文 | |
| 115 繩文早期の土器 (13) Ⅲ群 その他 | |
| 116 繩文早期の土器 (14) Ⅲ群 2 手向山式 | |
| 117 繩文早期の土器 (15) Ⅳ群 貝殻・条痕 文 1・2 類 | |
| 118 繩文早期の土器 (16) Ⅳ群 貝殻・条痕 | |
| 文 1・2 類底部 | |
| 119 繩文早期の土器 (17) Ⅳ群 貝殻・条痕 文 3 類 | |
| 120 繩文早期の土器 (18) Ⅳ群 貝殻・条痕 文 4~6 類 | |
| 121 繩文早期の土器 (19) Ⅳ群 貝殻・条痕 文 4~6 類底部 | |
| 122 繩文早期の土器 (20) V 群 沈線文系 | |
| 卷末図版 29 | 231 |
| 123 繩文早期の土器 (21) 外面 集石遺構出土 | |
| 124 繩文早期の土器 (21) 外面 集石遺構出土 | |
| 125 繩文早期の土器 (22) 外面 炉穴出土 1 | |
| 126 繩文早期の土器 (22) 内面 炉穴出土 1 | |
| 127 繩文早期の土器 (23) 外面 炉穴出土 2 | |
| 128 繩文早期の土器 (23) 内面 炉穴出土 2 | |
| 129 繩文早期の土器 (24) 外面 炉穴出土 3 | |
| 130 繩文早期の土器 (24) 内面 炉穴出土 3 | |
| 卷末図版 30 | 232 |
| 131 繩文早期の石器 (1) | |
| 132 繩文早期の石器 (2) | |

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道の延岡～清武間は、平成元年2月に基本計画が決定し、これを受けて宮崎県教育委員会（以下県教委）では予想されるルート周辺の分布調査を実施し、多くの遺跡が確認された。その一区間である都農～西都間は、平成9年12月に施行命令が出され、これに伴い平成10年度に県教委が路線上的分布調査を行った結果、計79箇所、約896,000m²に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで県教委では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事で影響を受ける遺跡の発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることとなった。

野首第2遺跡の確認調査は、平成12年9月28日から同年10月13日にかけておこなわれた。その結果、縄文時代早期から古墳時代にかけての土器・石器類が多数出土し、同時期の構造も高密度で検出された。これを受けて、日本道路公団と宮崎県埋蔵文化財センターとの間で協議が行われ、野首第2遺跡の発掘調査を実施することになった。調査面積と調査期間は以下の通りである。

平成13年度

平成13年5月7日～平成14年3月31日

平成14年度

平成14年4月3日～平成15年3月31日

平成15年度

平成15年4月3日～平成16年3月31日

平成16年度

平成16年4月5日～平成17年3月29日

第2節 調査の組織

野首第2遺跡の調査の組織は、次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛（平成13年度）

米良弘康（平成14・15年度）

宮園淳一（平成16・17年度）

清野 勉（平成18年度）

副所長 加藤吾郎（平成18年度）

副所長兼調査第二課長

岩永哲夫（平成13～18年度）

副所長兼総務課長

菊地茂仁（平成13年度）

大蘭和博（平成14～16年度）

総務課長 宮越 尊（平成17・18年度）

調査第一課長 面高哲郎（平成13年度）

児玉章則（平成14・15年度）

高山富雄（平成16～18年度）

主幹兼総務係長

石川恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山正信（平成18年度）

総務係長 亀井維子（平成13年度）

野邊文博（平成14年度）

調査第一係長 谷口武範（平成13～16年度）

主幹兼調査第一係長

長津宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津宗重（平成18年度）

調査第二係長 長津宗重（平成13～16年度）

主幹兼調査第二係長

菅付和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付和樹（平成18年度）

主事（調査・整理担当）

重留康宏（平成16～18年度）

松本 茂（平成13～18年度）

主查（調査担当）

尾園賢二（平成13～15年度）

主事（調査担当）

小宇都あづさ（平成16年度）

嶋田史子（平成16年度）

調査員（嘱託）辻 弥生（平成13年度）

川畑真二（平成14・15年度）

落合賢一（平成14年度）

嶋田史子（平成15年度）

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境

(1) 立地

野首第2遺跡の所在する高鍋町は九州島の東南部を占める宮崎県のほぼ中央、およそ東経 $131^{\circ} 27' \sim 33'$ 、北緯 $32^{\circ} 05' \sim 10'$ の位置にある。

町域はすべて宮崎平野に包摂され、東には日向灘を望み、北は川南原台地から川南町に、南は水谷原台地から新富町へと続く。西には茶臼原台地(西都市)、中原・百合原原へと続く台地(木城町)があり、北西には尾鷲山を眺めることができる。

町域の北半部には小丸川が東流し、その流域の左岸中程、現在の海岸線からはおよそ5.3kmのところに野首第2遺跡は所在する(第1図・第2図1)。遺跡は小丸川を北東に望む舌状台地(高位河岸段丘面:岡富面)に展開する緩斜面(傾斜度8°以上15°未満)上にある。標高はおよそ35m前後を測る。

野首第2遺跡の立地上の特性を巨視的に捉えるならば、町域の基盤をなす大小規模の「原」地形が、小丸川が形成する冲積低地と接する縁辺部に分布する近隣の遺跡と同様のものとして理解できる(巻頭図版1・第1図)。だが、小丸川に向かって一段下って舌状に張り出す地形は、近辺と比較しても独特の感がある(第2図・巻末図版1・2)。

遺跡は、舌状台地の中程一体を占めているらしく、踏査の結果、調査区外にもかなりの広範囲に縄文後・晩期および古墳時代の遺物が散布することがわかっている。A区の北側は谷地形であり、現在も湧水がみられる(野首第1遺跡:第2図2)。C区の南側にも同じく湧水点が確認され(南中原第1遺跡:第2図9)、恵まれた水利環境といえる。遺跡の南西には台地が控えており、過去には、絶好的の狩猟フィールドとして利用された蓋然性が高い(第2図)。

(2) 歴史的環境

本遺跡では、後期旧石器時代から現代に至るまで多数の時代・時期に亘る考古資料の出土をみたが、周辺にも多くの遺跡が存在している。以下、高鍋町域の遺跡を中心に、年代順に略説すること

にしたい。

■旧石器時代

從来から知られる代表的な遺跡として、持田中尾遺跡(文献1)や妻道南遺跡(文献2)、北牛牧第1遺跡・牛牧原遺跡(文献3)などがあり、また大野寅男氏による表面採集活動によって確認された遺跡も多い(文献4・5)。近年では、東九州自動車道関連の発掘調査(西都～都農間)によって、当該時代の遺跡確認数は急増した(文献6～8)。AT上位・下位とともに充実した資料の蓄積がある。

持田中尾では、本来の帰属層位は明確ではないものの、角錐状石器、ナイフ形石器、円形搔器などが確認され、瀬戸内技法に類する技術的特徴を有するナイフ形石器の存在が特筆される。

妻道南では、MB1から黒曜石製のナイフ形石器や剥片、石核、敲石等の出土がある。

北牛牧第1ではAT直下(MB2上部)から礫群が1基検出されたほか、ML2～MB1にかけてナイフ形石器や角錐状石器、搔器などの出土がみられる。隣接する牛牧原においても、同様の層準から礫群5基が検出されている。

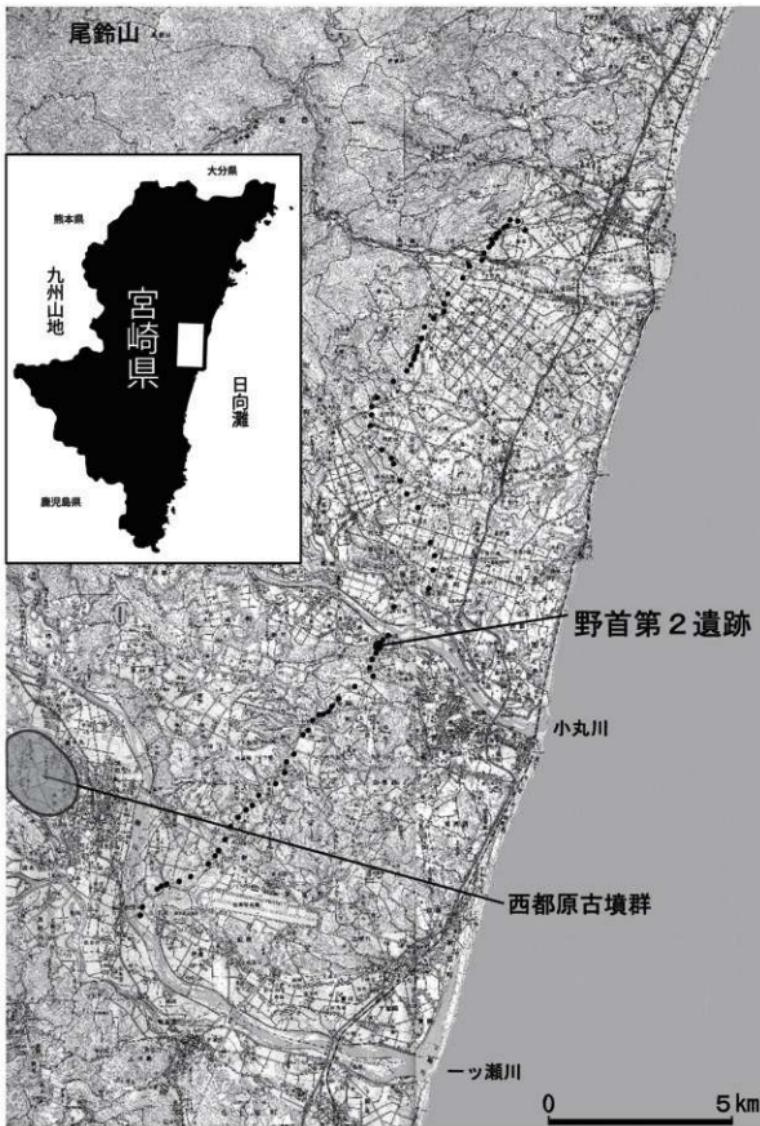
北牛牧第5遺跡では剥片尖頭器などの他、北牛牧型と設定されたナイフ形石器がまとまって出土した。

本遺跡の北西に隣接する野首第1遺跡では、県道木城高鍋線関連の発掘調査においてAT上下位に亘るまとまった量の旧石器時代遺物が確認された(文献9)。旧石器I期(AT下位)では、ナイフ形石器や石斧などが確認され、旧石器II期(AT上位)では、ナイフ形石器(北牛牧型)、角錐状石器などが確認されている。

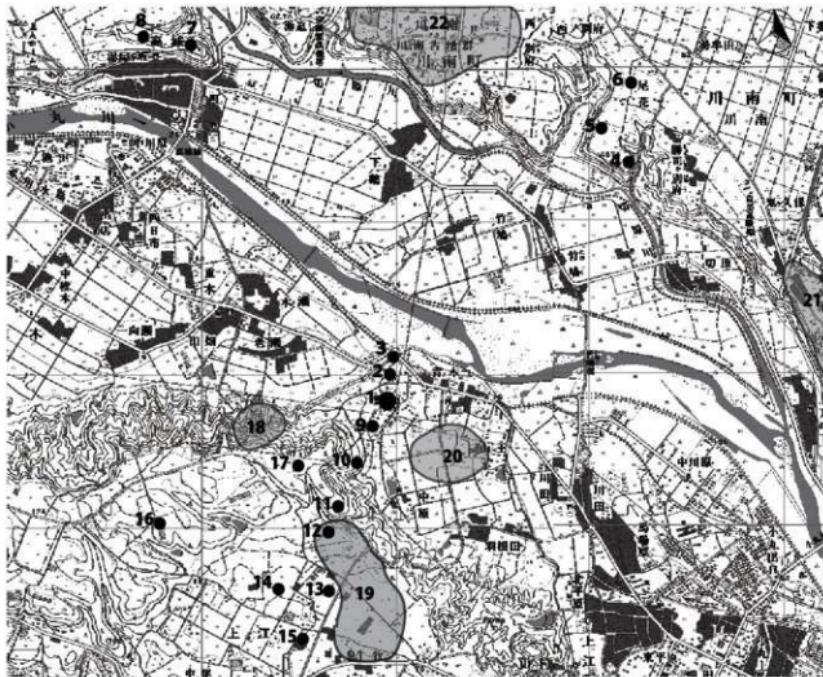
その他、大野寅男氏によって確認された遺跡としては雲雀山、中尾原、小並、茶屋原、耳切の各遺跡がある。

■縄文時代

草創期の遺跡としては、崩戸遺跡(文献10)や老瀬坂上第3遺跡(文献11)が知られている。いずれの遺跡からも隆起線文土器が出土しており、前者では当該期の可能性がある尖頭器も確認されている。後者からは、鹿児島県域を主体的な

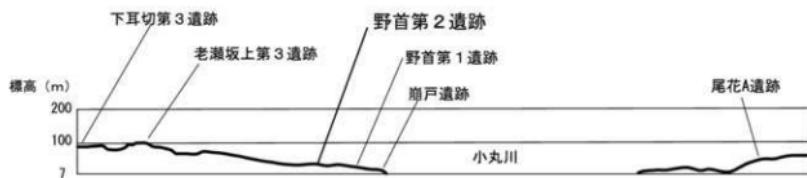


第1図 野首第2遺跡および東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡の位置 S = 1 / 100,000



1. 野首第2, 2. 野首第1, 3. 崩戸, 4. 尾花坂上, 5. 尾花A, 6. 西ノ別府, 7. 高城跡, 8. 永山古墳
 9. 南中原第1, 10 南中原第2, 11. 老瀬坂上第3, 12. 下耳切第3, 13. 北牛牧第1, 14. 北牛牧第5
 15. 牛牧, 16. 耳切, 17. 老瀬坂上第2, 18. 老瀬横穴墓群, 19. 牛牧古墳・地下式横穴墓群, 20. 山王古墳群
 21. 持田古墳群, 22. 川南古墳群

第2図 野首第2遺跡と周辺の主な遺跡



第3図 野首第2遺跡と周辺地形・遺跡との高低差（日向灘から）

分布圏とする水迫式土器が主体的に出土しており、当該地域における土器文化を考察する上で興味深い資料を提示している。また北牛牧第5遺跡からは、この時期と推測される尖頭器が出土しているが、具体的に時期が判断できる遺物の出土がないために、あくまで推測の域をでない。

早期の遺構・遺物は、大戸ノ口第2遺跡（文献12）、妻道南遺跡、水谷原遺跡（文献13）、持田中尾遺跡、老瀬坂上第3遺跡、野首第1遺跡、崩戸遺跡など数多くの遺跡から確認されている。高鍋町域が東九州の中央部に位置している事も手伝い、東九州や南九州において特徴的な土器型式が混在して確認されている。これらの遺跡からは、多数の集石遺構や炉穴が検出されている。これらの遺構の具体的な帰属時期が問題になるが、遺構の検出面に複数系統の土器型式が混在して出土する場合が多く、詳細な時期の検討を困難にしている感は否めない。

前期の遺構・遺物は、野首第1遺跡から轟B式、曾畑式、轟C・D式が、老瀬坂上第3遺跡から轟B式、曾畑式が出土している。特に野首第1の曾畑式には滑石が混入される点は注目される。日向灘に面した遺跡では、滑石が混入した曾畑式が内陸部と比べ多く出土する傾向があり、当時の生活環境を考察する上で看過できない。

中期の遺構・遺物は、大戸ノ口第2遺跡、下耳切第3遺跡（文献14）などで確認されている。県内で中期に該当する遺跡はごく少数に限られる。その中でも高鍋町内を含む県北部では、中・四国系の土器が出土する傾向にあり、前述した遺跡でも船元式の出土が見られる。特に下耳切第3では中期の集落が検出されており注目される。

後期に入ると、再び遺跡の数が増加する。野首第2遺跡の近隣では、野首第1遺跡、老瀬坂上第3遺跡、下耳切第3遺跡などが知られる。これらの遺跡においては、住居跡の検出事例には乏しいが、それまで認められなかった、打製石斧や石錐、土器片錐が出土するようになる。とくに石錐や土器片錐の用途を漁労に求めるならば、食物として積極的に水産資源を求めるという生活様式の変化が始まるととも言える。

晩期の開始期は時期区分論的にも未だ判然としない部分が多い。滋賀里式並行期にあたると思われる入佐Ⅱ式期の県内の様相は土器型式論的な面も含め、未だ不明な点が多い。これに後続する時期の遺跡として、野首第1遺跡、老瀬坂上第3遺跡などが挙げられる。これらの遺跡からは、当該期の土器が出土しているものの、生活跡の明瞭な検出は見られない。これは東九州自動車道に関連する発掘調査全体における傾向であり、晩期における人々の暮らしの復元を困難にしている。

■弥生時代

周辺の弥生時代の遺跡には、持田遺跡、持田中尾遺跡、野首第1遺跡、老瀬坂上第3遺跡などがある。

弥生時代前期～中期の集落としては、持田中尾遺跡、大戸ノ口第2遺跡が知られる。両者とともに瀬戸内地域の土器が出土しており、海を越えた地域間交流が窺える。また持田中尾遺跡からは松菊里型住居に類似した住居や大陸系磨製石斧も出土しており、弥生時代初頭における当該地と大陸との繋がりを知る上で貴重な資料を提示している。

弥生時代中期～後期前半の集落としては牛牧原遺跡がある。検出された竪穴住居の中には、花弁形住居、間仕切住居がある。老瀬坂上第3遺跡からは住居跡は検出されていないものの、山ノ口式に相当する遺物が出土している。

弥生時代後期の遺跡として、野首第1遺跡からは、土坑と土器集中区が認められた。先述した大戸ノ口第2遺跡からも、この時期の集落が検出されている。

■古墳時代

高鍋町内には、いくつかの古墳群や、それに伴うと考えられる集落を認めることができる。

野首第2遺跡の眼前には山王古墳群（文献15）が展開している。この古墳群は前方後円墳1基と円墳11基が同心円状にまとまっている。野首第2遺跡の北斜面上には野首古墳群（文献9・15）が存在する。この古墳群は横穴石室を内部主体とする2基の円墳から構成されており、近接する野首第1遺跡において、古墳時代中期後半～後期初頭、後期後半～終末にかけての集落が調査されて

いる。

これらの古墳群並びに、集落に関しては、第二分冊において詳述したい。

■古代

近隣で古代に該当する遺跡はあまり知られていない。老瀬坂上第3遺跡からは8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる蔵骨器が出土している。遺物としては他に、8世紀中頃～後半の所産と考えられる須恵器高台付蓋の転用硯が出土している。

■中世～近世

老瀬坂上第2遺跡からは、土壘と空堀が検出されており、天正6（1578）年の高城・耳川合戦時における島津以久の陣跡と推測されている（文献16）。

崩戸遺跡からは掘立柱建物跡をはじめとした遺構が検出されている。

■近代～現代

太平洋戦争終盤の1945（昭和20）年には高鍋に護道部隊が高鍋に配備され、下耳切第3遺跡、老瀬坂上第3遺跡近辺の山中に機関銃座や砲台を構築し、海岸から上陸する米軍へ備えていた。その際、砲兵隊が麓から大砲を牛牧の丘に運んだという記録がある。この様子を実際に目撃された方が、南中原第2遺跡付近に現在も住まわれており、当時の話を伺う事ができた。

その方の話では、青木神社から南中原第1遺跡の調査区内を通って老瀬坂上第3遺跡の丘陵へ、牛馬を用いて大砲を運んだが、現地は急斜面であり、作業は難航したらしい。銃座が構築された老瀬坂上第3遺跡周辺の谷間には、にわか作りの兵舎、弾薬庫、防空壕が作られたという事である。

防空壕に関しては、下耳切第3遺跡と老瀬坂上第3遺跡を区切る谷の斜面にも認める事ができる。また、兵隊は「白い器」を使って食事をしていたらしいが、野首第2遺跡において「白い器」に該当すると思しき磁器が出土している。この磁器を、先の話をして下さった方に見ていただいたが、50年以上前の話であり、この器を兵隊が使用したかどうか、確証は持てないとの事であった。

第2節 発掘調査・整理作業の経過

（1）確認調査の概要

本遺跡の確認調査は平成12年9月28日から同年10月13日にかけて実施された（調査日数実働11日）。本調査におけるB（D）・C区に相当する範囲に、計11箇所の確認トレンチを入れ、遺構・遺物の確認をおこなった。当初より表土中に多量の土器片が認められていたが、トレンチ掘削の結果、やはり同様の遺物包含状況が確認された。また、竪穴住居らしき遺構、多数のピット、焼礫なども伴って検出されたため、複数時期にまたがる遺物包含層の存在が予想された。以上の結果を踏まえ、調査区を便宜的に北側からA・B・C区と設定し、本調査に取り組むことになった。

（2）本調査の調査日誌抄

■平成13年度

平成13年5月7日（月）

・平成13年度調査開始 現場事務所等搬入

平成13年5月9日（水）

・発掘用具等搬入

平成13年5月10日（木）

・発掘作業員40名体制で調査開始

平成13年5月14日（月）

・重機による表土剥ぎ開始（A区）

平成13年5月22日（火）

・測量業務委託実施

平成13年6月14日（木）

・電気・水道工事

平成13年7月27日（金）

・発掘体験（生日地区親子会）

平成13年8月1日（水）

・ペルコン等機材搬入

平成13年8月24日（金）

・第1回空中写真撮影委託（A区）

平成13年9月3日（月）

・整理作業棟追加設置

平成13年9月13日（木）

・整理作業開始（遺物水洗・注記）

平成13年10月9日（火）

・第1回調査指導委員会

平成13年10月24日（水）

- ・重機による表土剥ぎ（C区）
平成 13 年 11 月 16 日（金）
 - ・発掘体験（高鍋西小）
平成 13 年 11 月 19 日（月）
 - ・第 1 回集石遺構実測委託
平成 13 年 12 月 8 日（土）
 - ・現地説明会実施
平成 13 年 12 月 19 日（水）
 - ・排土運搬委託（500 m³）
平成 14 年 1 月 17 日（木）
 - ・自然科学分析委託（植物珪酸体・リン酸分析）
豊穴住居内の床面 サンプリング
平成 14 年 1 月 25 日（金）
 - ・第 2 回集石遺構実測委託
平成 14 年 2 月 21 日（木）
 - ・第 2 回空中写真撮影委託（A区）
平成 14 年 3 月 12 日（火）
 - ・重機により排土置場処置
平成 14 年 3 月 20 日（水）
 - ・第 2 回調査指導委員会
※調査日数 実働 195 日
- 平成 14 年度**
- 平成 14 年 4 月 3 日（水）
 - ・平成 14 年度調査開始
 - 平成 14 年 4 月 8 日（月）
 - ・発掘作業員 50 名体制で調査開始
 - 平成 14 年 5 月 1 日（水）
 - ・整理作業開始（水洗・注記）
 - 平成 14 年 5 月 23 日（木）
 - ・重機による表土剥ぎ（C区）
平成 14 年 5 月 29 日（水）
 - ・排土運搬委託（1,000m³）
平成 14 年 6 月 13 日（木）
 - ・調査区周辺の防護柵設置
平成 14 年 6 月 28 日（金）
 - ・整理作業棟追加設置
平成 14 年 7 月 12 日（金）
 - ・水道増設、電気容量変更工事
平成 14 年 9 月 3 日（火）
 - ・第 1 回空中写真撮影委託（C区）
平成 14 年 10 月 15 日
- ・第 1 回調査指導委員会
平成 14 年 10 月 27 日（日）
 - ・博物館主催発掘体験
平成 14 年 11 月 19 日（火）
 - ・発掘体験（高鍋西小）
平成 14 年 11 月 25 日（月）
 - ・重機による排土移動
平成 14 年 12 月 2 日（月）
 - ・整理作業棟追加設置
平成 14 年 12 月 9 日（月）
 - ・現場事務所等 B区から A区へ移設
平成 14 年 12 月 10 日（火）
 - ・電気配線等移設
平成 15 年 1 月 29 日（水）
 - ・重機による表土剥ぎ（B区）
平成 15 年 3 月 5 日（水）
 - ・第 2 回空中写真撮影委託（C区）
平成 15 年 3 月 18 日（火）
 - ・第 2 回調査指導委員会
※調査日数 実働 223 日
- 平成 15 年度**
- 平成 15 年 4 月 3 日（木）
 - ・平成 15 年度調査開始
 - ・発掘作業員 50 名体制で調査開始
平成 15 年 5 月 23 日（金）
 - ・排土運搬委託（1,700m³）
平成 15 年 6 月 9 日（月）
 - ・電気・水道工事
平成 15 年 8 月 20 日（火）
 - ・第 1 回調査指導委員会
平成 15 年 8 月 22 日（金）
 - ・宮崎大学宇田津先生による豊穴住居・土坑の土壤サンプリング（植物珪酸体等分析）
平成 15 年 8 月 18 日（月）
 - ・集石遺構埋土サンプリング
平成 15 年 10 月 26 日（日）
 - ・現地説明会
平成 15 年 10 月 29 日（水）
 - ・第 1 回空中写真撮影委託（B区）
平成 15 年 11 月 25 日（火）
 - ・発掘体験（高鍋西小）

- 平成 15 年 12 月 5 日（金）
・自然科学分析委託（C 14 年代測定、火山灰分析）
- 平成 16 年 2 月 10 日（火）
・第 2 回空中写真撮影委託（B 区）
- 平成 16 年 2 月 16 日（月）
- ・排土運搬委託（700m³）
- 平成 16 年 3 月 1 日（月）
・第 2 回調査指導委員会
※調査日数 実働 216 日
- 平成 16 年度
平成 16 年 4 月 5 日（月）
・平成 16 年度調査開始 整理作業開始
- 平成 16 年 6 月 2 日（水）
・発掘作業員作業開始 B・C 区の調査
- 平成 16 年 7 月 14 日（水）
・環状ピット群確認・実測開始
- 平成 16 年 8 月 12 日（木）
・E 区の産業廃棄物の現状確認および搬出処分の検討
- 平成 16 年 8 月 31 日（火）
・台風 16 号の襲来による被災状況の確認 調査事務所等が若干の被災
- 平成 16 年 9 月 7 日（火）
・台風 18 号の襲来による被災状況の確認 特に被災なし
- 平成 16 年 9 月 24 日（金）
・E 区発掘調査開始 重機による表土除去 産業廃棄物の撤去
- 平成 16 年 9 月 29 日（水）
・台風 19 号の襲来による被災状況の確認 特に被災なし
- 平成 16 年 10 月 1 日（金）
・B 区の陥し穴状土坑の調査
- 平成 16 年 10 月 12 日（火）
・E 区の発掘作業員作業開始
- 平成 16 年 10 月 28 日（木）
・高鍋西小学校児童の地層見学 1 回目（総合的学習の時間）
- 平成 16 年 11 月 15 日（金）
・高鍋西小学校児童の地層見学 2 回目
- 平成 16 年 12 月 3 日（金）
・E 区空中写真撮影実施
- 平成 16 年 12 月 27 日（月）
・B（D）・C 区発掘調査終了
- 平成 17 年 2 月 3 日（木）
・ピーター・マシウス氏、マイケル・ファラガー氏、西田泰民氏來訪。
- 平成 17 年 2 月 25 日（金）
・E 区発掘調査終了 以後プレハブにて整理作業のみ継続して実施
- 平成 17 年 3 月 29 日（火）
発掘調査全工程終了 撤収
- ※調査日数 実働 223 日
- （3）調査の方法
- 調査区の名称
- 全調査範囲を、A・B・C・E 区の四つの調査区に分けて、発掘調査をおこなった。四つめの調査区を「D 区」としなかったのは、次の理由による。
- 当初、野首第 2 遺跡の遺跡範囲は、A・B・C 区にあたる範囲が認定され、今回 E 区とした範囲は、南中原第 1 遺跡の範囲として周知されていた。しかし、野首第 2 遺跡の C 区の調査が進むにつれ、隣接する南中原第 1 遺跡の一部分についても、C 区と連続する遺跡の様相や、立地上の観点からも、これを野首第 2 遺跡に含めて理解するのが妥当と判断され現在に至った経緯がある。だが、この判断を下す以前に、B 区の調査を実施した際、Na 付き遺物（ドットマップ作成可能遺物）の取り上げ点数が膨大になったため、注記の便宜を考慮し、「D」の記号を付して 1 から再記録をした事情があり、そのため新たに付加した調査区に「D 区」の名称は用いなかった。
- グリッド設定
- 全調査区を 21 × 12 の 10 m グリッドに分割し、南北にアルファベットの A ~ U、東西に 1 ~ 12 の記号・番号を振った。また、遺物の取り上げに際し、それぞれのグリッドを四分割し北東に位置する区画から時計回りに細分グリッド名を与えた（例：A 1-1, A 1-2, A 1-3, A 1-4）。
- 遺物の取り上げ
- 遺物の取り上げに際し、ドットデータについては A 区の調査開始時は平板測量とレベルによ

る取り上げをおこない、その後はトータルステーションによる取り上げに変更した。A区では異なる種類の取り上げ方法を併用したため、遺物のナンバリングにも二種類の表記をせざるをえなかつた。具体的な表記については、第二分冊に添付する遺物計測表に記す。

その他、I層中の遺物の大半やII層以下的一部の遺物については、先述したグリッド区画に従い、同一層中の遺物について一括取り上げをおこなつた。また、ドットデータについてはA1グリッドの北東隅をX・Y座標の原点(O・O)と簡便化し、記録をおこなつた。A1グリッドの実際の数値はX座標:-94590.000, Y座標:46170.000である。

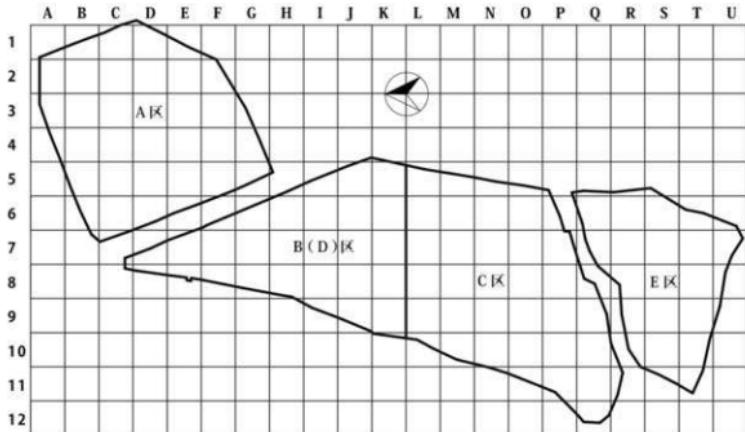
第3節 基本層序

野首第2遺跡では、計六時代、細分時期では15以上の時間幅にわたる考古遺物の検出があつた。これらの遺物は、第5図に示した包含状況において確認されている。野首第2遺跡独自の基本層序はローマ数字(I, II, III...)で表し、括弧内には東九州自動車道(都農→西都間)基本層序(文献6)を併記した。地層対比のうえで鍵となる降下火山灰層が七つ確認されたが、これは肉眼観察および鏡下の観察に依っている。

以下、各層の特徴を述べる。

表土:現耕作土。層厚30~50cmを測る。陶磁器やガラス類などの近・現代、近世、中世の遺物が含まれるほか、土器細片が疎らに混入する。これらの土器片は耕作による攪拌によって非常に細かに粉碎されているが、色調などからは古墳時代の土器師、縄文時代後・晚期の土器などが大半を占めるものと思われる。縄文時代後・晚期の石器類(剥片、石錘、石斧、磨石など)も多く、表面採集が容易である。

I層:暗灰褐色土層。層厚20~50cmを測る。上部は古墳時代、古代を中心とする遺物包含層、下部は縄文時代後・晚期を中心とする包含層で



第4図 野首第2遺跡における調査区の区分とグリッド設定 S=1/2,000

ある。本来、上部と下部は出土遺物の時期を違えるため、別個の層として扱うことが望ましい。しかしながら、I層の上部と下部は場所によつては分層可能な場合もあるが、調査区の大半では肉眼で明確に分離することは困難であった。そのため、ここでは上述の措置をとった。くわえて、上部・下部それぞれ場所毎に変化の程度はさまざまに土質・土色を異にしている。こうした土壤堆積を惹起した要因については第二分冊に詳述することにしたい。

アカホヤ (K-Ah)：二次堆積層。層厚0～15cmを測る。A区における調査開始当初は確認しておらず、後にC区の南西端およびE区の調査に至って認識された。そのため、当初は基本土層に含めていない。堆積も部分的であり、包含遺物などに関する情報も少ないが、K-Ahの存在を示すものとして重要である。

II層：黒色土層。層厚5～15cmを測る。MB 0に相当する。

III層：暗褐色土層。層厚10～15cmを測る。MB 0～ML1の漸移層に相当する。

IV層：黄褐色土層。層厚30～40cmを測る。ML～Kr-Kb（小林軽石）が明瞭に視認できる下部のIV b層と含まない上部のIV a層に細分される。両者を一括してIV層としたのは、場所によって、小林軽石の堆積が希薄な場合があり、IV b層相当層位がIV a層と分層困難なためである。したがって個々の遺物の取り上げも、両層が区分可能な場合には各層名を、区分困難な場合はIV層の上部・下部などの出土層位名を用いた。

V層：暗褐色土層。層厚20～40cmを測る。MB 1相当層。AT上位の旧石器時代石器群（第

IV期～第VII期）の主要な包含層。

VI層：明黄褐色土層。層厚20～30cmを測る。ATの一次堆積層。ただし、堆積は不安定で、特に上部はV層との境界は両層の上下移動が進む。

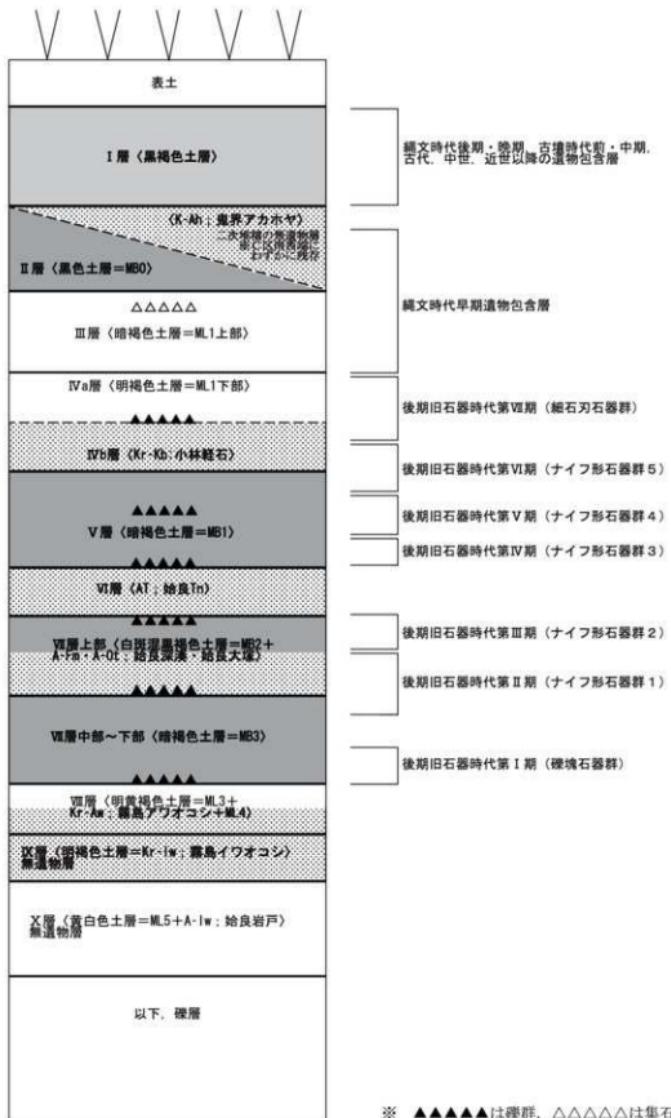
VII層：MB 2～MB 3の黒色帯と両層に挟まれる始良深港（A-Fm）・始良大塚（A-Ot）を含む。A-FmとA-OtはMB 2に含まれ渾然一体となつた堆積で分層困難であるが、その下部のMB 3とは分層可能である。したがって、この黒色帯は肉眼的には、【上部：MB 2 + A-Fm + A-Ot】（層厚約30cm）と【下部：MB 3】（層厚約40cm）に二大別すべきであるが、調査当初には両者を一括して黒色帯として扱つたため、ここでもその層名を踏襲している。黒色帯内のレベル差については、【上部：MB 2 + A-Fm + A-Ot】をV上層、【下部：MB 3】の上半をV中層、下半をV下層と記録した。AT下位の旧石器時代石器群（第II・III期）の包含層。

VIII層：明黄褐色の粘質土層。ML 3相当。層厚10～20cmを測る。Kr-Aw（霧島アワオコシ）の可能性が指摘される赤色粒を含むことがある。

IX層：Kr-Iw（霧島イワオコシ）が主体となる硬質の明褐色土層。層厚約10cmを測る。無遺物層。

X層：黄白色の粘質土層。トレンチによる確認では、層厚40～50cm程度と推測される。水性堆積である可能性が高い。自然小礫を疎らに含む。

付近の露頭における観察によれば、以下は小礫主体の礫層が続き、さらに水性堆積の砂層、粘土層などが続く無遺物層である。



※ ▲▲▲▲は縄群、△△△△△は集石遺構・散礫

第5図 野首第2遺跡の基本層序と遺物包含層

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 後期旧石器時代の石器の器種と類型について

(1) 決定器種

a 刺片石器

■ナイフ形石器

須藤隆司氏が示した以下の言に従い、本報告書におけるナイフ形石器の定義とする。

「ナイフ形石器とは、縁辺を機能部として利用するのに適した刺片を製作する技術の基に、縁辺を機能部として利用するのに適した縁辺整形としての調整加工技術によって製作された石器である。つまり、刺片の鋭利な縁を機能部として活用するために調整加工によって整形された石器の総称をナイフ形石器としたいと考えている。」(文献 17)

本遺跡において、上述の規定に該当する資料は、素材・形態・加工の変異によってさらに I ~ VI の六群に細分される。

I 群（基部加工ナイフ形石器）：打面側を基部としてその側面にプランティングを施す。先端部付近に部分加工を施すものも散見される。本類型は素材の違いによりさらに三つに細分可能である。

I 群 a 類：末端部が尖鋭な縱長刺片や石刃を素材とし、背面構成に刺片素材石核のポジ面を取り込む。分厚な断面形となる傾向がある。

I 群 b 類：a 類と同様の素材を用い、背面構成が全て内面から構成される。

I 群 c 類：a・b 類とは素材刺片の形状が異なり、やや幅広の縱長刺片を用いる。

II 群（二側縁加工ナイフ形石器）：二つのグループに細分可能である。

II 群 a 類：石刃やそれに類する縱長刺片を素材とし、これを斜断するようにプランティングによる整形を施したもの。いわゆる茂呂型・九州型と呼ばれる資料に該当。

II 群 b 類：a 類と比較し短身で比厚も大きいグループ。基部を尖鋭に作出する資料を含む。いわゆる切り出し形石器や理谷型ナイフ形石器を含む。

III 群（与一側縁加工ナイフ形石器）：素材刺片の

違いからさらに二つに細分する。

III 群 a 類：瀬戸内技法に類する横剥ぎの技術の結果獲得された背面にポジ面を配する刺片を素材とした資料。一側縁加工が多いが二側縁や基部にプランティングを施す資料も一定量認められる。いわゆる国府型ナイフ形石器を含む。

III 群 b 類：上記以外の刺片を素材とした一側縁加工ナイフ形石器。

IV 群（部分加工ナイフ形石器）：載頂加工のほか、多様な加工を含む。

V 群（類角錐状石器）：鋭利な縁辺を残しながらも、ナイフ形石器一般にみられる刃部角よりも鈍い縁辺で、二次加工などはむしろ角錐状石器に共通した技術的特長を有するものを一括した。二側縁加工、一側縁加工など整形には変異を含む。

VI 群（その他）：その他、上記の分類に該当しない資料や全器形の推定が困難である資料をこの範疇に含めた。

■台形石器・台形様石器

刺片を素材とし、直箭刃を備えるプランティングトゥールをこの範疇に含めた。A T (第VI層) の上・下位とともにこの種の石器が確認されたが、通常にしたがい上位出土資料を台形石器、下位出土資料を台形様石器と呼んでおく。

石刃ないしこれに類する縱長刺片を素材とし、これを横位に用いてプランティング整形を施したグループを I 群、それ以外の一般的な刺片を素材としたグループを II 群としておく。

■角錐状石器（三稜尖頭器）

ナイフ形石器のプランティングに近い急斜度の二次加工が周縁を巡る尖頭形の石器をこの範疇に含めた。素材刺片の違い、二次加工の粗粒に応じて細分が可能である。

■尖頭器

角錐状石器と異なり、緩斜度の二次加工が周縁を巡る尖頭形の石器をこの範疇に含めた。

■搔器

石刃もしくは縱長刺片の末端にスクレイバーエッジを作出する I 群（先刃搔器）と、それ以外の横長刺片や不定形刺片を素材とした II 群に細分される。II 群にはいわゆる円形搔器を含む。

■削器

スクレイバーエッジを有するツールで搔器以外の資料を一括した。刃部の形状は細かな剥離を伴うもの、鋸歯状を呈するものなど変異に富む。

なお、搔器と削器の中間的特徴を持つものについては、“搔器／削器”と表記する。

■彫器

穂状剥離痕を有するツールについて認定したが、可能性にとどまるものも含めてピックアップした。

■細石刃

目的的な細石刃のほか、いわゆる“調整細石刃”も含む。

■微細剥離片

剥片の縁辺に不規則的な微細剥離痕を有する資料について認定した。

■二次加工剥片

明確な二次加工痕を有するが、上記したいずれのツールにも該当しないものを一括した。

b 磔塊石器

■斧状石器

明確な局部磨製石斧類は確認されなかったが、その可能性のある研磨痕を有する礫片を確認した。

■礫器

両刃礫器を**I群**、片刃礫器を**II群**とし、それ以外の資料を**III群**とした。いずれの類型も石核の可能性を有するものも含む。両方の機能を有した可能性が高いと判断されたものについては、“礫器／石核”と表記する。

■敲石

素材となる礫の形状の違いから、次の六群に大別できる。

I群（棒状）, **II群（不整棒状）**, **III群（球状）**

IV群（不整球状）, **V群（扁平）**, **VI群（錐状）**

■磨石

磨面を有する礫を一括した。敲打痕を伴うものも認められ、敲石の機能も兼ね備えた可能性が高いものについては“磨石／敲石”と表記した。

■台石

被敲打痕や磨耗面が観察される資料のほか、サイズと形状から台石の可能性が考えられるものについても認定したものがある。

(2) 工程器種

■石核

石核は、形状から次のように細分した。

I群（石刃石核）：さらに二つに細分できる。

I群a類：通常の石刃石核。分厚な剥片や分割礫を素材とし、作業面は一定の幅を持つ。石刃生産が単一の作業面で進行するもの、作業面が石核周囲を巡るものなど変異が認められる。打面・作業面調整の多寡・有無に応じた変異がある。

I群b類：剥片を素材とし、その小口を作業面に設定するもの。生産される石刃には、断面が分厚な資料を一定量含む。やはり打面・作業面調整の多寡・有無に応じた変異がある。

II群（有底剥片石核）：瀬戸内技法に類する横剥ぎの剥片剥離工程の結果残される石核。真正的瀬戸内技法に限らず、主に剥片素材石核を用い、目的剥片の背面に石核素材剥片のボジ面を取り込む剥片剥離に伴う石核を一括する。生産される剥片は横長・不定形剥片が大半を占める。

III群（求心状石核）：石核の周囲の縁辺を打面とした求心状の剥片剥離に伴う石核。分割礫や剥片などを素材とする。生産される剥片は貝殻状・不定形剥片が多い。打面・作業面調整は通常はおこなわれない可能性が高い。

IV群（賽子状石核）：打面転位を複数回経た結果、形状が賽子状を呈する残核。生産される剥片には貝殻状・不定形剥片が対応するが、初期工程では縱長剥片・石刃など多様な剥片にも対応していた可能性もある。打面・作業面調整の有無は不明である。

V群（礫器状石核）：礫を素材とし、礫面を打面として貝殻状・不定形剥片を生産する。打面・作業面調整は通常はおこなわれない可能性が高い。

VI群：その他の石核を一括した。多くは不定形剥片などを目的剥片とする。

■細石刃石核

文献18に示された分類に沿って記述する。詳

細は該当する事実記載に後述する。

■分割礫

石器製作に際し、節理面などの影響で不規則に割れて分割されたもので、石核とも剥片とも判断しにくいものについてこの範疇を適用した。

■原石

調査区内から出土した礫のうち、剥片石器に使用された石材と質が共通するものについてその可能性を考えた。

■剥片

剥片は、縦長剥片、横長剥片、矩形剥片、不定形剥片、石刃、有底剥片、折断剥片、プランディングチップ、打面再生剥片、作業面再生剥片、礫面剥片などを一括した総称として扱う。プランディングチップは碎片のカテゴリーにまたがる。

■碎片

1 cm四方の枠に長・幅・厚が収まる剥片を便宜的にこのカテゴリーにまとめた。ただし細石刃はこれに含めず区別した。この基準の根拠は細石刃を除くトゥールにおいて最も平均サイズの小さな本遺跡出土の台形石器のほとんどが1 cm四方の枠に収まるからである。

第2節 石材について

(1) 石材種

本遺跡から出土した石器・石製品に用いられた石材種について以下に説明をくわえる。なお、火成岩系では流紋岩、堆積岩系では頁岩・砂岩とした資料には、厳密に言えば变成してホルンフェルス化しているものを含む可能性が高い。これは、典型的なホルンフェルスの特徴（粉吹き状風化、点紋・筋状パターンの風化、紫黒色で緻密な新鮮面）が認められない場合は、他の特徴から石材種を同定しているためである。たとえば、微生物の化石が含まれている場合は頁岩などの堆積岩として、流理構造が明瞭な場合は流紋岩などの火成岩として同定した。

以下、注釈を要するものについて説明する。

a 火成岩系

■黒曜石（Ob）

九州島内の諸産地に概ね対応した変異によって

五つのグループに分けられる。

Ob I群：肉眼による同定から宮崎・鹿児島・熊本三県境に所在する桑ノ木津留・上青木を産地とする可能性を指摘できる一群。更に三類に分けられる。

Ob I群a類：透光下ではややセピア色がかる黒色を呈する。透光性は高く強い光沢を持つ。わずかに白色の不純物を含む。表面はザラついた平坦面から構成（角礫）。ロウ状の肌理を持ち良質。

Ob I群b類：a類と共に諸特徴を持つが縞模様が入る。縞模様は発泡状や霞状を呈する。

Ob I群c類：a類と共に諸特徴を持つが、灰色。Ob IV群と類似する資料。

Ob II群：肉眼による同定から鹿児島県日東近辺、三船、長谷、熊本県小国、白浜林道などの産地である可能性を指摘できるグループ。更に五類に分けられる。

Ob II群a類：透光下ではややセピアがかる黒色を呈する。透光性は高く強い光沢を持つ。黄白色の不純物を疎らまたは多く含む。表面は凹凸に富む。節理に影響されしばしば不規則な割れを起こす。三船産の可能性が高い。

Ob II群b類：透光性に乏しく光沢が強い。黒灰色が主で、縞模様が目立つものもある。黄白色の不純物を多く含む。表面は発泡したような凹凸に富む。日東近辺産である可能性が高い。

Ob II群c類：b類と共に諸特徴を持つが、灰色または黄灰色の縞模様を持つ。

Ob II群d類：黒色地に灰色の縞模様が入る。灰白色の不純物を疎らに含む。透光性に乏しく、わずかに光を透す部分は濃茶色を呈する。

Ob II群e類：黒色地に金色の不純物を含む。透光性はほとんど無いが、わずかに透ける部分は濃茶色を呈し、黒色の細い縞が走る。

Ob III群：腰岳、大牟田などの西北九州産黒曜石に肉眼的特徴が類似する一群。さらに四類に分けられる。

Ob III群a類：黒色で透光性が高く、黒～灰色の縞が走る。不純物はほとんど無く良質。

Ob III群b類：黒色で透光性はほとんど無く、ギラつく光沢を持つ。不純物をわずかに含むことが

多い。

Ob III群c類: 漆黒色で透光性は全く無い。

Ob III群d類: 灰色で不純物をわずかに含む。良質。

Ob IV群: 大分県姫島産の可能性が高い一群。更に三類に分けられる。

Ob IV群a類: 灰褐色を呈し、透光性が高い。

Ob IV群b類: 灰黒色を呈し、a類に比べ透光性に乏しい。

Ob IV群c類: 灰白色を呈し、透光性に乏しい。

Ob V群: 上記以外の黒曜石を一括した。

■尾鈴山産溶結凝灰岩 (Os-Tu)

木城花崗閃緑斑岩や流紋岩などを含む総称である「尾鈴山酸性岩類」のうち、肉眼での判別が比較的容易な溶結凝灰岩。よく引き伸ばされた白～灰色の本質レンズが観察される。宮崎平野では砂岩と並んで、時期を問わず礫塊石器の製作に多用される。最近では剥片石器製作の事例も散見される。宍戸章氏によれば、本岩石種は「WT 1：黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩」と「WT 2：黒雲母斜方輝石デイサイト質溶結凝灰岩」に区別されるが、宮崎県内の磨石に用いられるものの大半は、風化して灰白色を呈する前者である（文献 19）。肉眼的特徴からみて、本遺跡において認定したものも、ほとんどが WT 1 であると推定される。

■阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩 (Aso-Tu)

2001 年に詳細な分析（文献 20）が公にされる以前は阿蘇産黒曜石と呼ばれていた岩石である。

■安山岩 (An)

四つのグループに分けられる。

An I群: 肉眼的に西北九州地方の無斑晶質安山岩（いわゆるサヌカイト）に類似する資料を一括している。

An II群: 大分県姫島産と考えられる資料。

An III群: 青灰色に風化するガラス質の安山岩。

An IV群: その他の特徴を有するグループ。

■流紋岩 (Ry)

おおまかに四つの様相に分かれる。いずれも緻密・硬質で、变成してホルンフェルス化したものと含む可能性が高い。

Ry I群: 表面の風化のため、流理構造は観察できる場合もあるが明瞭ではない。新鮮な面は紫黒

色から黒色で緻密。肉眼的特徴は五ヶ瀬川流域の旧石器時代石器群に多用される石材と同種。色調からさらに三類に分けられる。

Ry I群a類: 風化の結果、淡黄白色から灰褐色を呈する。

Ry I群b類: 風化の結果、a類と同様の色調を基調とするが、灰褐色部分が斑状に残る。

Ry I群c類: 風化層が上記二者に比較して厚く、黄白色を呈する。鉄分の付着がしばしばみられる。凝灰岩質とも言えるか。

Ry II群: 表面の風化がやや進んでいるが流理構造が比較的明瞭に観察される一群。新鮮な面は紫黒色。

Ry II群a類: 灰白色から淡青灰色を呈する。肉眼的特徴から五ヶ瀬川流域産の可能性が高い。

Ry II群b類: 茶褐色から暗褐色を呈する。肉眼的特徴が類似する資料は五ヶ瀬川流域の旧石器資料にも散見されるが、断定は難しい。

Ry III群: やや光沢のある黒色またはくすんだ青灰色を基調とし、しばしば灰～灰褐色の流理構造が観察される。風化はさほど進まず緻密。流理構造が斑状に拡がる資料もある。新鮮な面は紫黒色から黒色で緻密。

Ry III群a類: やや光沢のある黒色を呈するグループ。

Ry III群b類: くすんだ青灰色を呈するグループ。

Ry IV群: その他の流紋岩類。尾鈴山酸性岩類に含まれる可能性が指摘される流紋岩などを含む。

b 变成岩系

■堆積岩源ホルンフェルス (Ho)

松田清孝氏によれば、本遺跡の傍らを流れる小丸川流域には石器石材や礫群に使用可能なホルンフェルスが豊富に産出する（文献 21）。氏は石器石材に多用されるホルンフェルスを「緻密なホルンフェルス石材」と呼び、その源岩が泥岩・頁岩・砂岩などの堆積岩であることを述べた。ここでは、ホルンフェルス特有の粉吹き状風化、点紋、筋状パターンの有無を基準に認定した。いずれも新鮮な面は紫黒色から黒色を呈し、緻密で貝殻状断口がみられる。

松田分類を参照しつつ、肉眼的特徴にしたがって三群に分けた。

Ho I群：粉吹き状に強く風化し黄白色から黄土色あるいは灰色を呈する。稜線も摩滅する傾向が強い。松田分類では頁岩源ホルンフェルスに相当。色調からさらに二類に分かれ。

Ho I群a類：黄土色から黄白色。

Ho I群b類：灰色から暗灰色。

Ho II群：やや風化した表面に点紋が万遍なく点在または筋状のパターンで分布する。灰色から暗灰色を呈する。松田分類では頁岩源ホルンフェルスに相当。

Ho III群：やや風化した表面で、目立つ点紋は観察されない。

■結晶片岩(Sc)

ごくわずかな量が確認されたが、人工品ではない可能性もある。

c 堆積岩系

■珪質頁岩(SSh)

色調から三つに分かれ。やはり変成してホルンフェルス化するものを含む。

SSh I群：灰褐色から黒褐色地に黄白色斑が入る場合もある。黄白色部分の質感から判断すると流紋岩(Ry I群)を含む可能性も考えられる。

SSh II群：黒灰色地を基調とし、稀に灰白色斑が混ざる。肌理はやや粗い。やはり、流紋岩(Ry I群)を含む可能性が考えられる。

SSh III群：暗褐色～淡赤褐色を呈する。粒状構造が明瞭なものから、滑らかな肌理でガラス質に近いものまで変異がある。東日本地域で呼び慣わされる“チョコレート頁岩”に類似するものを含む。

■頁岩(Sh)

層状剥離性が顕著で、黒褐色から灰褐色を呈する。変成してホルンフェルス化したものを含む。

Sh I群：風化は進まず、黒色～灰褐色を呈するグループ。

Sh II群：ホルンフェルス化して風化が進み、灰から灰褐色を呈するグループ。

Sh III群：上記以外の特徴を持つ頁岩。

■砂岩(Sa)

三つのグループに分けた。

Sa I群：細粒で均質。灰褐色または黄褐色から黄土色を呈する資料が多い。

Sa II群：I群に比較し、やや粗粒。青白色から灰白色を呈する。

Sa III群：I群より細粒かつ硬質緻密で剥片石器の製作に適する。

■赤色頁岩(R-Sh)

チャートに似た外観であるが、光沢に乏しく、層状に剥離しやすい。赤～暗赤色のほか、暗紫色、淡緑色などの色調が認められる。

■チャート(Ch)

通常のチャート(I群)のほか、風化が進んで光沢の無くなったものを“無光沢チャート”(II群)として識別した。チャートと頁岩の中間的特徴を持つ。

■緑色珪質岩(Gs)

無光沢チャートに似るが、より光沢が強く、石質に粘りがある。緑～灰緑色を呈する。珪質頁岩III群と連続した産状が確認されることから、堆積岩と判断された。チャートと珪質頁岩の中間的特徴を持つ。

d 成因不明の石材種

非破壊の肉眼鑑定では成因・石材種が特定できない資料。

X I群：黒褐色から黒灰色を呈する。粒状構造が明瞭なものから、滑らかな肌理でガラス質に近いものまで変異がある。

X II群：その他、成因不明の岩石を種々、この範疇に含めた。

第3節 石器・礫の接合について

(1) 石器の接合

a 基本的操作概念

石器の接合資料の形成には、様々な要因が想定される。五十嵐彰氏は、物質を“破壊”に導くこれら複数の要因を大きく二つにグルーピングした（文献22）。すなわち、意図的な破壊（割り）と非意図的な破壊（割れ）である。氏は、前者をI類接合、後者をII類接合と規定する。また、氏は研究史の整理を踏まえ、“母岩資料”と“接合資料”という二つの概念を、前者が後者を包摂する関係として提示した。本報告書においても、五十嵐氏の提案に賛同し、その操作概念を踏襲する。以下、あらためて、五十嵐氏が提示した諸概念の説明を付す。

母岩資料：遺跡に持ち込まれた他と区別しうる礫塊を単位とする。本報告書中では「母岩」と省略して記載する。

接合資料：I類接合によって構成される（石核と剥片類の接合は個体として認識される）。

石器資料：一回の打撃によって生じる剥片類を単位とする（II類接合を含む）。

補足事項として、非意図的な割れとされるII類接合と意図的な折断との関係に触れておく。本報告書においてII類接合としたものの中には、意図的な折断行為によって生じた資料も含まれる可能性が高い。ただし、五十嵐氏も指摘するとおり、“折り”と“折れ”的厳密な区別は、現実的に容易ではない。したがって、本報告書におけるII類接合の初発の規定では、意図的な折断と考えられる資料も含めることとし、必要に応じて随時説明を加えることにしたい。

I類接合は次のように細分する。

I a類接合：剥片および剥片素材のトゥールと石核の接合、あるいは石核素材のトゥールと剥片の接合。

I b類接合：剥片同士および剥片素材のトゥールと剥片の接合。

I c類接合：トゥールの調整加工に関わる接合。

上記三類の存在は、それぞれ次に示す人間行動の証左となる。

I a類接合の存在は、現調査区内において剥片剥離がおこなわれた可能性が高いことを示す。また、その母岩消費は、調査区内でほぼ終了したことを想定できる。ただし、剥片素材石核の利用も考慮する必要があるため、残された石核の大きさに留意する必要があろう。トゥールが残されている場合、それが破損品であるか完形品であるかも解釈上、重要である。

I b類接合の存在は、石核が無いことで、それが他の場所へ持ち出された可能性を示す。あるいは、残された剥片が優美な石刃であるような場合には、それが他の場所で同時製作された搬入品である可能性もある。

I c類接合の存在は、現調査区内でトゥールの調整がおこなわれたことを示す。これには、①現調査区内でトゥールの製作がおこなわれた可能性、②現調査区内でトゥールの刃部再生、変形などのメインテナンスがおこなわれた可能性、などが含まれる。

II類接合は次のように細分する。

II a類接合：折れ（折り）面接合（=破損接合）。

II b類接合：節理面接合。

II c類接合：剥片剥離時にバルブを起点に起こった縱割れ。

今後の資料操作を考慮して、以上の操作概念を用いた母岩資料の類型化を試みると、次のような分類が有効と考えられた。まず、接合資料を含むI類母岩、含まない2・3類母岩に大別する。更に全類をトゥール、石核を含むものと、剥片・碎片のみからなるグループとに区別した。その結果、以下に示す大別3細別10の母岩資料類型を設定するに至った。

1類母岩：剥片素材のトゥールを含み石核を持たないI T類、石核と剥片のみから構成されるI C類、トゥールと石核を両方持つI TC類、剥片・碎片のみからなるI F類に四細分される。

2類母岩：複数の非接合資料およびII類接合から構成される母岩資料。複数のトゥールからなる2 T類、石核の2 C類、剥片の2 F類に三細分される。

3類母岩：単独の非接合資料および単独のII類接

合から構成される母岩資料。単独もしくはⅡ類接合のトゥールの3T類、石核の3C類、いずれも含まず剥片のみからなる3F類に三細分される。

以上の類型設定に従い資料の整理を進めたが、石材によっては、厳密な同一母岩資料の同定が困難な場合も多くあった。そのため、接合する事実や、肉眼的特徴において他資料との差異が明確で同一母岩と確定できる資料（確定母岩資料）とは区別して、確定困難な資料は一定の類似性を根拠に推定母岩資料を設定した。

b 認定した母岩資料と接合資料

上記した概念を用いて検討した結果、多数の接合資料が得られ、これまでに少なくとも100単位以上の母岩資料を認定した。ただし、充分な整理を終えたとはいはず、今後も作業を継続すれば、更なる接合資料と母岩資料の認定数が増加する可能性が高い。新たな成果については折をみて提示する機会を期したい。

(2) 磨の接合

a 磨の取り上げ

調査を進める段階では、石器以外の磨の取り上げについて、次のような方法を探った。

まず、外観として一定のまとまりを持って分布する磨については、そのまとまりを単位（“PSI”と表記）として通し番号（A～D区：PSI 1～278、E区：PSI 1～31）を振り、各PSIの構成磨についても、PSI毎に通し番号を振った（例：PSI 1 № 1～66）。PSIと認定したものは、縮尺1/20もしくは1/10で図化した。

まとまりを持たず散在する磨については、基本的に遺物と同じ扱いをし、ドットデータのみの記録とした。ただし、大形の磨が単独で検出された場合には、その検出状況を一定程度、復元できるよう、検出上面にマジックで北位を記した。

b 出土磨の扱い

一般に、旧石器時代の遺跡から出土する磨がまとまりを持つ場合には、“礫群”的呼称が用いられるが、いくつかの類型も認識されている。例えば金山嘉昭氏は、礫群を稠密な分布状況を示すA型礫群と疎らに分布するB型礫群に分類した（文献23）。本遺跡においても、複数の特徴を異にする磨の分布状況が確認され、これらは人間行動や埋没環境などの人為・非人為的な影響を受けて残されたものと考えられる。また、通常“イモ石”とも呼称される自然小礫も多く確認されたが、なかには被熱などの人為的影響を受けたいわゆる礫群構成磨との境界が曖昧な資料も含まれる。これらの資料の整理は未だ充分になされたとは言い難く、今後の更なる検討が要請される。そこで、本報告書においては旧石器時代の遺物包含層中の人为的に搬入されたと考えられる礫総体を広義の礫群と捉え、暫定的処置として、調査時の所見を考慮して明確なまとまりをもつ磨の分布を狭義の礫群と認定し、そのいくつかを報告することで責を果たしたい。狭義の礫群は便宜的に次のように分類しておく。

礫群Ⅰ類：磨が稠密な分布を呈するもの。さらに磨同士が密接するものをⅠa類、磨と磨の間隔がやや空きものの周囲の状況と比較して明確なまとまりを有する磨の集中部をⅠb類と記載する。

礫群Ⅱ類：Ⅰ類に比して磨が疎らな分布を示すもの。明確な集中部を持たず、比較的広い範囲に磨が散らばるものをⅡa類、Ⅱa類とⅠb類の中間的様相を示すものをⅡb類とする。

礫群Ⅲ類：磨が小規模な範囲に積み上げられたように出土するもの。調査当初は旧石器時代の所産と考えていたが、結論を先に言えば、縄文時代早期以降の所産を含む可能性が高い。この類型に関しては第Ⅲ章第13節において後述する。

第4節 遺物の分布と時間差について

発掘調査を実施している最中には、おまかに A T下位に三つ、A T上位に三つの遺物および礫群集中層準を認めた。下から、①MB 3下部、②MB 3上部～MB 2下部、③MB 2最上部、④A T直上、⑤MB 1中部、⑥MB 1上部～Kr-Kbの順である。このうち⑥にはナイフ形石器を含む石器群と細石刃石器群の両方が含まれていたため、これを分けて⑦細石刃石器群とすれば、七つの細別時期の存在が予想された。

ただし、接合や母岩資料認定作業の結果などを考慮すると、個々の遺物の本来の帰属層位に関しては、不確定な部分が多い。また、調査の進展に伴い、記録した出土層位にも精粗が生じる結果となつた。

次節以降、前節において認定した母岩資料と接合資料、および礫群構成礫の接合状況、分布状況を勘案し、上記に予想された七つの時期細分が妥当であるか否かを検証しつつ報告をおこなう。

第5節 後期旧石器時代第Ⅰ期

(1) 概要

第VII層(MB3)下部～第VIII層上部から構造・遺物が確認された。第Ⅰ期に該当する構造には礫群があり、遺物としてはナイフ形石器、少量の剥片・石核などがあるが、剥片石器の存在は不安定である。

(2) 構造(第8図)

礫群を7基認定した。調査区の内訳はA区6基、B区1基であり、A区に集中する傾向が認められる。検出層位は第64号礫群がVII層下部～VIII層上部である以外は全てVII層下部において確認された。礫群は、いずれも比較的小規模にまとまりつつも、構成礫が互いに接することなく分布する共通性が認められる。総体的に、後述する第Ⅱ期以降の礫群の構成礫に比べ、破碎の度合いが低く、被熱痕跡にも乏しい傾向が窺われる。いずれの礫群にも完形礫かそれに近い状態の礫が組成する。

(3) 遺物(第6図)

遺物として挙げられるものは少ない。A区13点(ナイフ形石器1点、剥片10点、石核2点)、

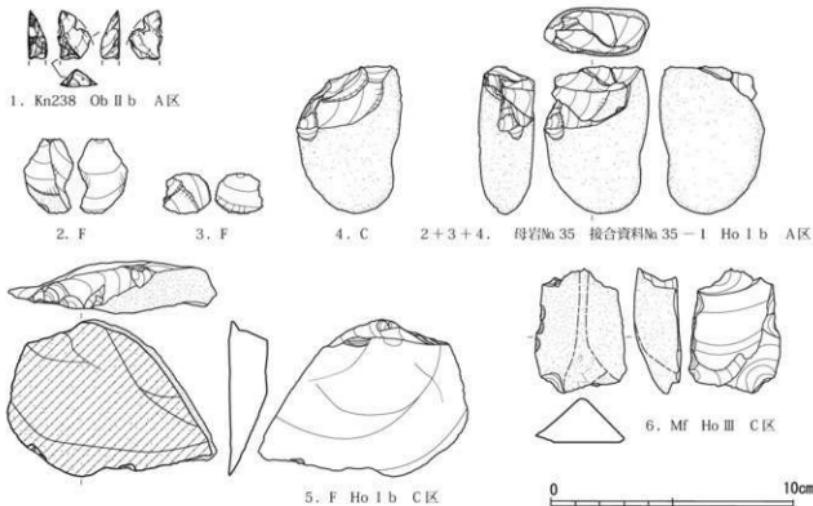
B(D)区1点(剥片)、C区17点(微細剥離剥片1点、碎片1点、剥片13点、石核2点)の計31点を認定し、E区では認定できる資料は確認されなかった。認定した資料中にも自然礫の可能性が高いものも含まれる。黒曜石製(Ob群IIb類)のナイフ形石器1も1点のみの確認であることから、上層からの落ち込みである可能性は拭えない。

母岩資料としては母岩No35(接合資料No35-1)について第Ⅰ期の所産である可能性を認めた。本資料は小形礫器状の石核2(V類)と剥片2点(3・4)から構成される。石核はVII層下部～VIII層上部から出土した。

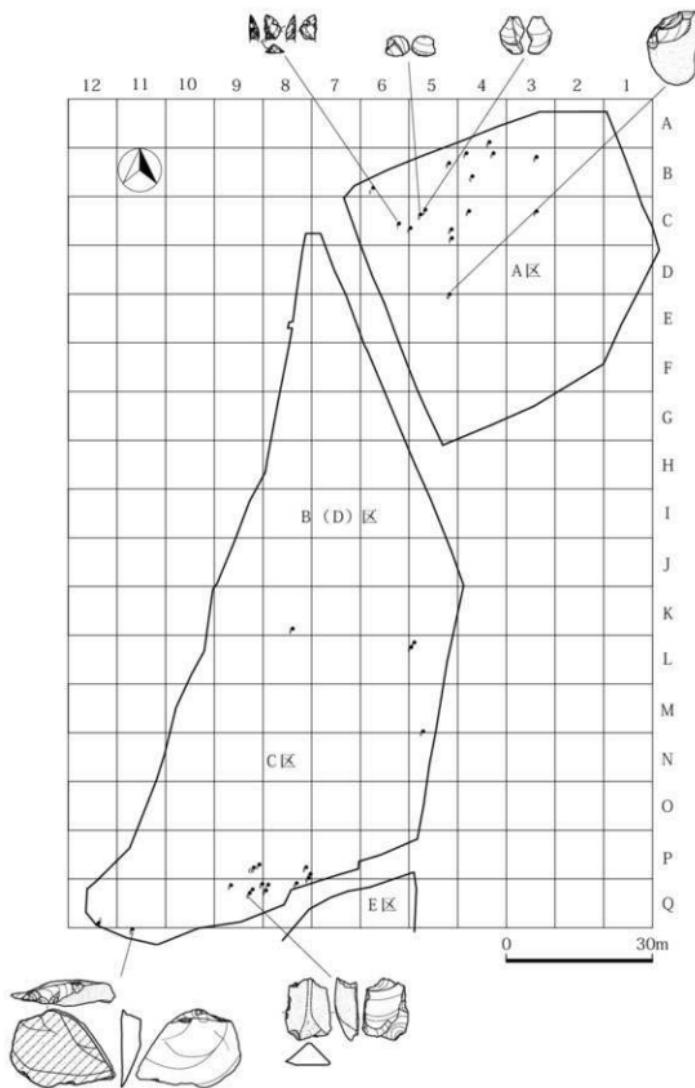
その他、剥片類の出土が認められる(5・6)。礫群中の完形礫が敲石や磨石の素材となった可能性も考慮する必要がある。

(4) 小結

第Ⅰ期の遺物は資料数に乏しく、人為・自然為の判別が困難なものも含まれる。一方で礫群の分布様相には、ヒトが関与した可能性が高い。本遺跡のみでなく、同一層位からの資料群の比較検討が今後望まれる。



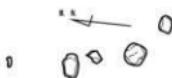
第6図 第Ⅰ期の石器(S=1/2)



第7図 第Ⅰ期の石器の分布 ($S = 1 / 1,000$)



第 60 号蝶群



第 112 号蝶群



第 113 号蝶群



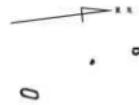
第 64 号蝶群



第 114 号蝶群



第 115 号蝶群



第 198 号蝶群

第 8 図 第 I 期の蝶群 第 60・64・112～115・198 号蝶群 ($S = 1 / 20$)

第6節 後期旧石器時代第Ⅱ期

(1) 概要

第VII層中部(MB 3上部～MB 2下部)を中心とし、遺構・遺物が確認された。第Ⅱ期に該当する遺構には礫群があり、遺物としてはナイフ形石器・台形様石器・二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・石核等が認められる。

(2) 遺構(第11～15図)

32基の礫群が確認された。B区に2基、C区に1基が確認されたほかは全てA区における検出である。礫は稠密に分布するI群a類は4基、他にI群b類やII群b類あるいはその混合などが12基を占める。残るII群a類が20基となり、全体に疎らな分布を呈する礫群が増加する傾向にある。

礫群I群a類として、以下の4基について説明を加える。

第34号礫群はVII層中部から検出され、礫112点が一つの集中部とその周囲の疎らな分布を構成する(第11図)。集中部から50cmほどの位置に大形の敲石と剥片の分布が確認された。

第53号礫群はVII層中部～下部にかけて80点の礫が大きく三つの集中部に分かれて近接する(第11図)。礫は單一面に拡がるのみでなく、検出面の礫を取り上げた後にも十数個の礫が顔を覗かせる垂直分布を示した。

第90号礫群はVII層中部から検出され、およそ1mの範囲に109点の礫が密集する(第12図)。近接して、4点の剥片・石核の分布も認められた。第53号と同じく、礫は重層的な構造をとり、上部の礫を除去した後にも、礫の密集する箇所が確認された(巻末図版6-13)。礫の密集する範囲の中央を通るように断ち割りを入れ、土層堆積の観察をおこなったが掘り込みなどは見出せなかった。

第93号礫群もVII層中部で検出され、直径1.5mの範囲に大半の礫がまとまり、特に稠密な箇所が認められる(第12図)。この部分ではやはり礫が垂直分布上に積み重なる様相が認められた。礫の総数は57点を数える。

礫群I群b類としては、第54・58・70号礫群などが挙げられる(第13図)。

第54号礫群はVII層中～下部にかけて検出され、

32点の礫がやや密に分布する。

第58号礫群もVII層中～下部にかけて検出であり、9点の礫が小範囲にまとまる。

第70号礫群は、35点の礫から構成され、比較的大形の礫が目立つ。VII層上部から中部にかけて検出された。

第57号礫群はいわばI群とII群の混在タイプである。126点の礫から構成され、範囲内には石器2点も含む。VII層中部から検出された。

礫群II群a類は、10点以下の礫がまばらに分布する様相が多く観察された。

本類型では最多でも第79号礫群の18点を数えるのみである。第79号礫群には破碎した極小礫も含んでいる。VII層中部から検出された。

第85号礫群はVII層中部に7点の礫と5点の石器が疎らに分布している。

(3) 遺物(第16～18図)

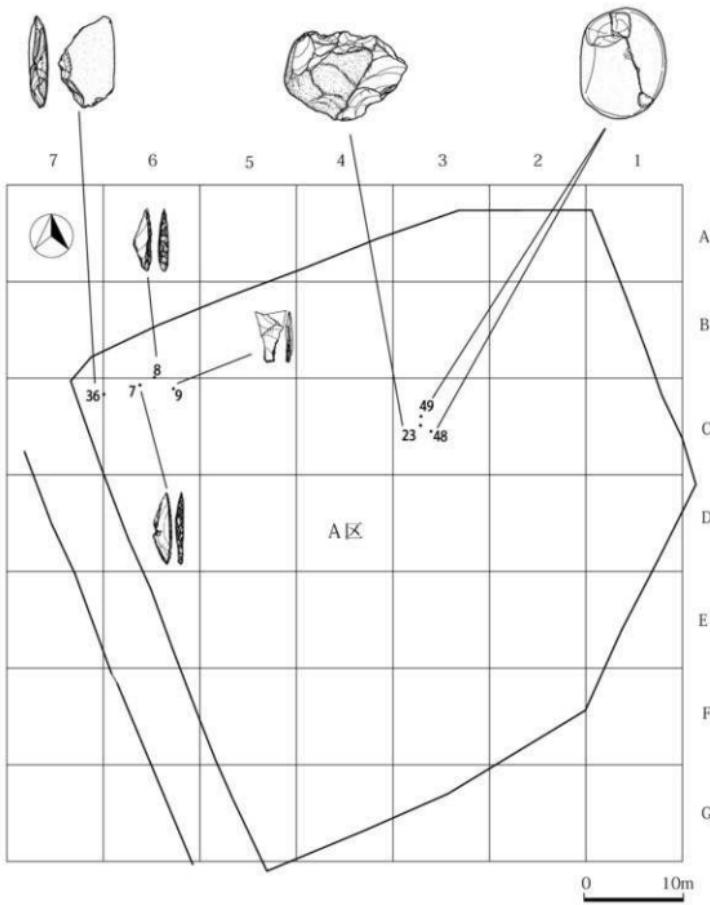
ナイフ形石器(第16図7・8)

A区においてナイフ形石器2点が出土した。7・8のいずれもII類に属するが、素材剥片は異なり前者が縦長剥片、後者が背面にボジ面を有する不定形剥片である。なお、これらの資料はVII層上部から出土したナイフ形石器とも共通する特徴を備えており、上層からの落ち込みの可能性も排除できない。出土層位は7がVII層中部～下部、8がVII層中部である。

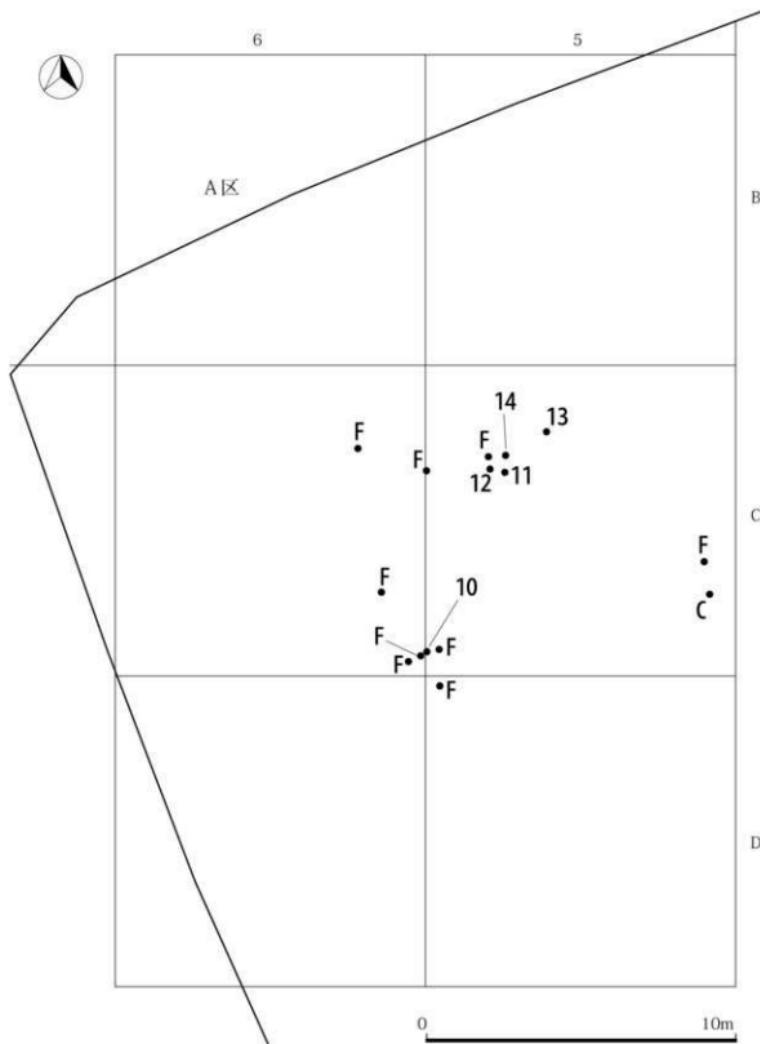
台形(台形様)石器(第16図9・13・14)

9は台形石器であり、不定形剥片を折断した素材を用いる。素材剥片のバルブ側の折断面に浅く広めの剥離が連続して観察される。この剥離は表裏両方向から施されている。

13と14は石刃を素材とした台形石器であり、同一母岩(No.3)でかつ接合関係(No.3-2)を持つ。素材の石刃は、質のやや粗いチャートで、やや扁平に割れやすい石質を有する。これに複数回の折断が施され、台形石器の素材が得られている。いずれも、二次加工は急斜度のプランティングである。このプランティングは両者が分離される以前に一括におこなわれた可能性も指摘できる。母岩No.3には、他に10・11・12の3点から成る接合資料3-1があり、やはり石刃を三な



第9図 第II期の石器の分布（1） 主要な石器の分布



第10図 第II期の石器の分布（2）母岩No.3の分布

いし四分割した様子が窺える。また、44も風化が激しく剥離面が判然としないが、急斜度のブランディングを施した台形石器の可能性があり、上述した資料と同様に折断による素材獲得の可能性も指摘できる資料である。45～47はその同一母岩である可能性がある剥片類となる。

二次加工剥片・微細剥離剥片（第16図15・第17図29・第18図37）

15はやや節理の入るチャート製の厚手の剥片を素材とする二次加工剥片である。右側縁上半に細かな剥離痕が重なり、浅いノッチを形成している。あるいは抉入削器か。素材剥片の打面には、打面調整と思われる剥離痕も観察される。

29は縦長剥片ないし石刃と推定される素材の折断面から背面に向かって大小の平坦剥離が観察される。正面右側縁を刃部と想定すれば台形・台形様石器の可能性も指摘できる。素材には打面調整の可能性がある剥離痕が観察される。VII層上部～中部の出土。

37は良質のXⅠ群石材を用いた母岩No.17に含まれる。幅広の石刃の側縁に微細な剥離痕が連続して観察される。他に6点ある同一母岩資料はいずれも小形の剥片（第18図38～43）に限られる。

剥片（石刃）・石核類（第16～18図）

出土した剥片には、一定量の石刃が含まれる。ただし、これに対応する明確な石刃石核は見い出されない。チャート製では小形の縦長剥片・一般剥片に対応した石核（18・19）があり、ホルンフェルス製では一般剥片に対応した礫器状石核（23）が認められる。ただし19は質が粗いことから自然礫も可能性も考慮する必要がある。

剥片では、2点確認された黒曜石I群a類製の資料はいずれも極小サイズの剥片である。ホルンフェルスなどの石材で製作された石刃や縦長剥片（24～27・30～37）の製作技術上の特徴としては、頭部調整（作業面調整）が無いこと、打面調整もほとんど観察されず、無調整打面を基本とすることが注目される。また、折断によって分割されたと思しき資料が散見されることも特筆すべきである。

この他に報告書作成作業終盤に確認された母岩No.90の接合資料（No.90-1、流紋岩IV群）がある。実測図および観察所見の詳細は、第二分冊に掲載予定であるが、接合状態の写真のみ巻末図版16～67に示した。26点から構成されるが、やはり、小形の縦長剥片ないしそ他の一般剥片を狙った剥片剥離工程が窺える。

その他の石核としては礫面を残し、幅広・不定形剥片などの一般的剥片を生産したと思しき23、36などがみられる。

敲石（第18図48+49）

48+49は敲石の破片同士の接合資料No.114-1である。比較的、質の良い頁岩（Sh I）を素材とし、縁辺、端部、平坦面の中央の計三箇所に微細な敲打痕が観察される。

（4）小結

a 器種構成と剥片剥離技術

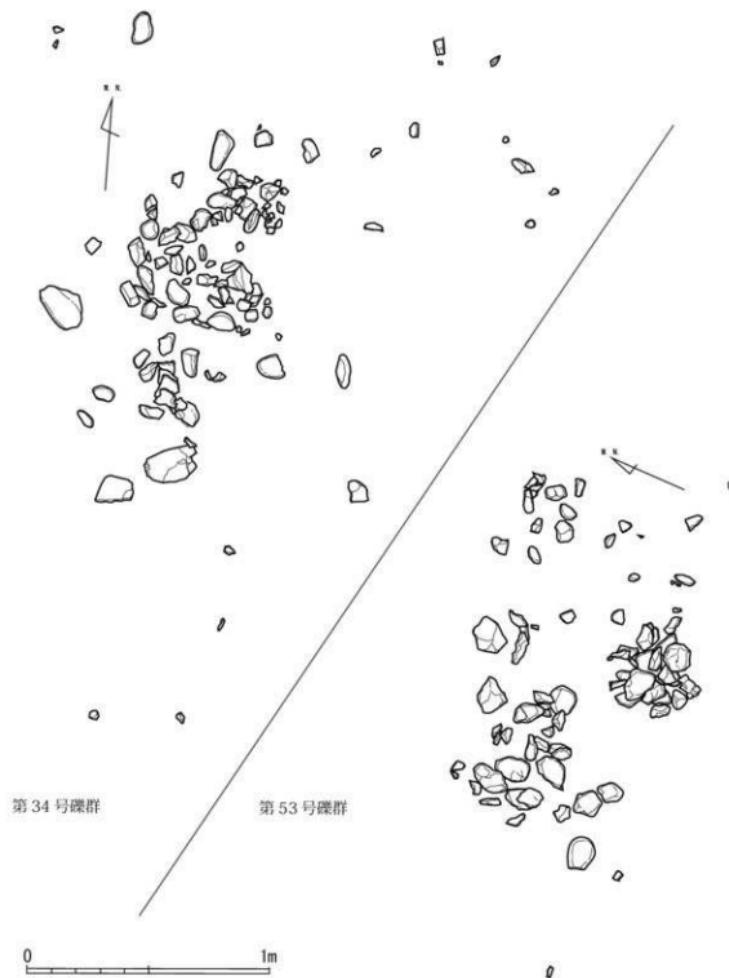
指標的な遺物としてナイフ形石器と台形（台形様石器）が挙げられる。特に台形石器に関しては、製作工程の一端を如実にあらわす好資料に恵まれた。鍵となるのは、石刃製作と折断加工である。これらの技術要素は、台形石器類の製作に適用されるだけでなく、より大形、幅広の縦長剥片・石刃にも観察され、この時期の特徴と捉えられる。一方では、貝殻状、幅広、不定形などの一般的剥片の製作も併行しておこなわれた様子も石核・剥片類から窺われる。

b 石材利用

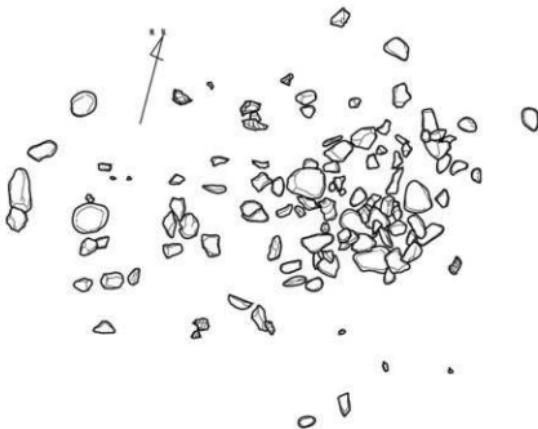
注目されるのは、桑ノ木津留産の可能性が高い黒曜石I群a類が少量ではあるが確認された点である。桑ノ木津留産黒曜石の採取活動は黒色帯下部の段階ですでに知られているが、本遺跡の資料もA T下位の黒曜石採取・利用に関わる活動を跡付ける一例として重要な事例となろう。量的には足下で採取可能なホルンフェルスが目立ち、他に産地が定かでない流紋岩、石材XⅠ群などが同等程度利用されている。チャートや瑪瑙などの石材は補完的な利用にとどまる。

c 行動

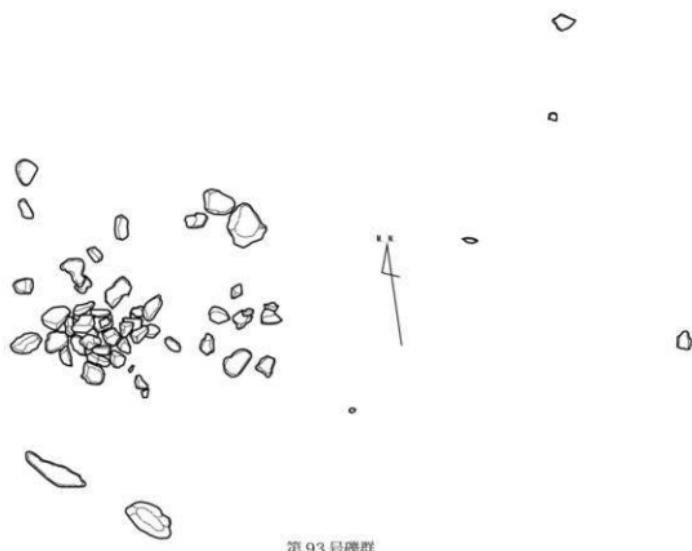
遺跡内に礫群が残され、かつこれに石器が重複して分布する事例から、期間は定かでないにせよ、



第11図 第II期の砾群(1) 第34・53号砾群 ($S = 1/20$)



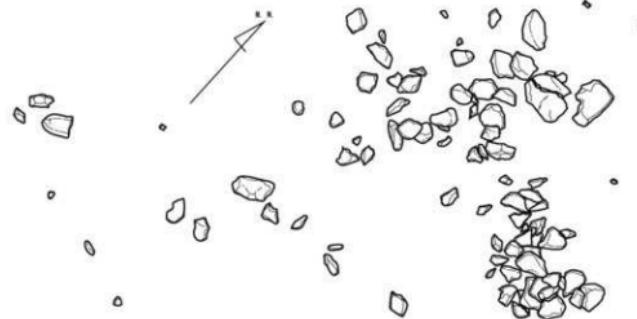
第 90 号砾群



第 93 号砾群

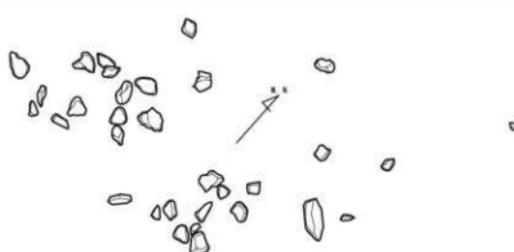
第 12 図 第 II 期の砾群 (2) 第 90・93 号砾群 ($S = 1/20$)

0



第 57 号礫群

8



第 54 号礫群



第 58 号礫群



第 13 図 第 II 期の礫群（3） 第 57・54・58 号礫群 ($S = 1 / 20$)

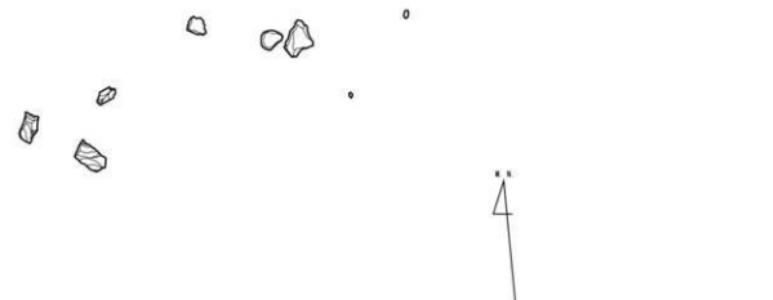


第 70 号 石群



第 14 図 第 II 期の石群 (4) 第 70 号 石群 ($S = 1 / 20$)

第 79 号砾群

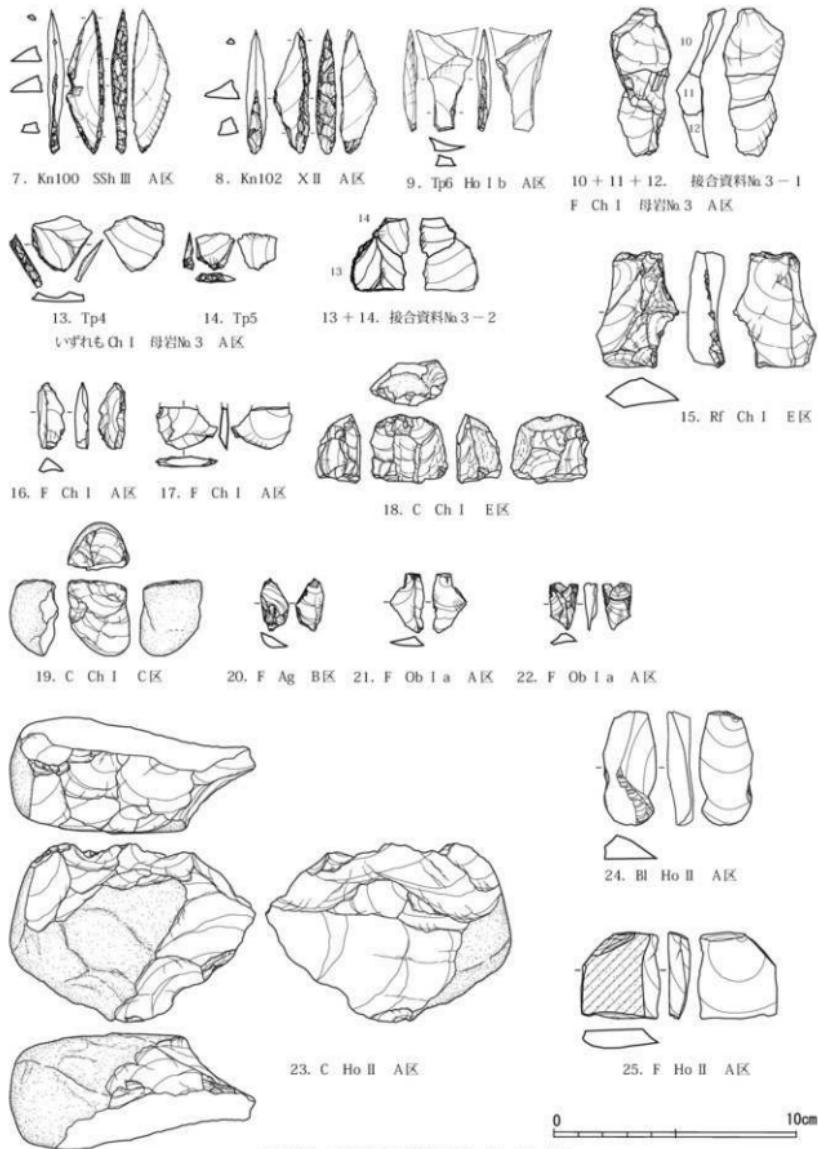


第 85 号砾群

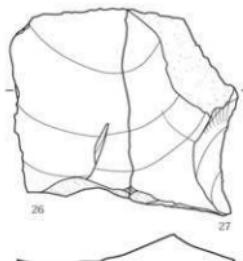


第 15 図 第 II 期の砾群 (5) 第 79・85 号砾群 ($S = 1 / 20$)

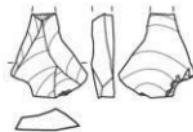
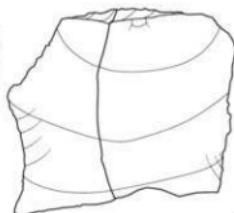




第16図 第II期の石器群(1) ($S = 1/2$)



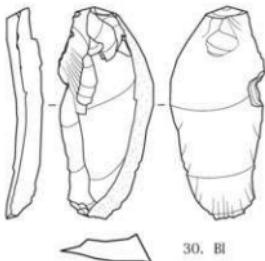
26 + 27. 母岩No.37 接合資料No.37-1 F Ho II A区



28. F Ho I b A区



29. RF SSh I C区



30. BI

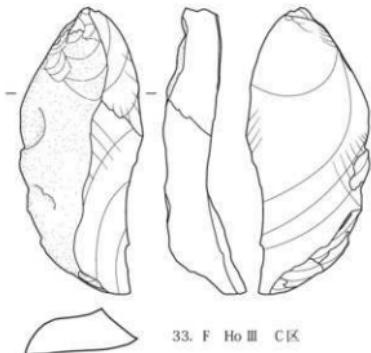


31. F



32. BI

30 ~ 32 はいずれも母岩No.18 非接合 X II A区



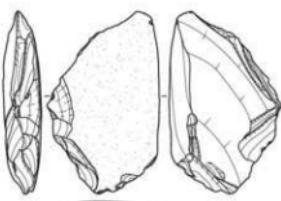
33. F Ho III C区



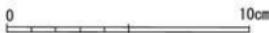
34. F Ho I a A区



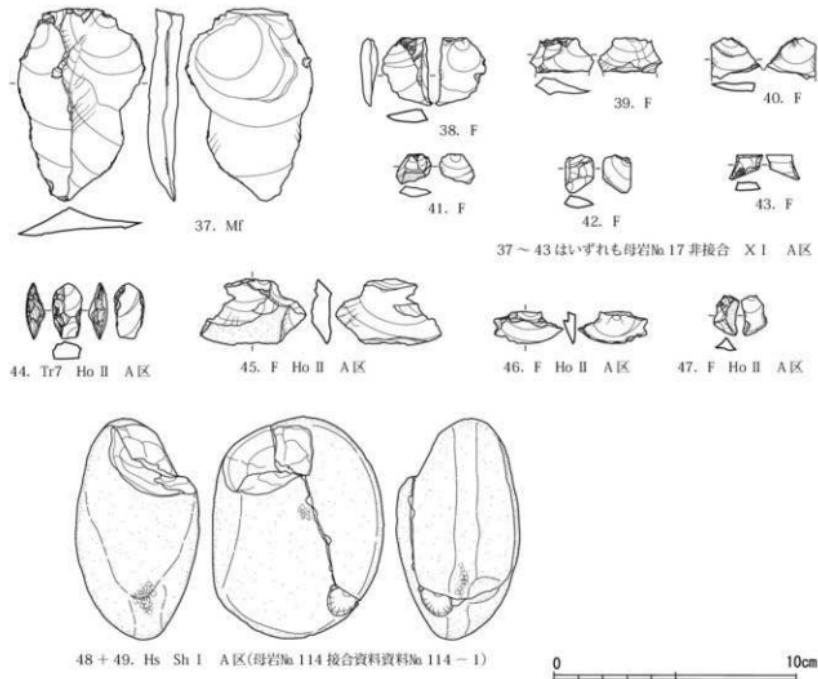
35. BI Ho I a A区



36. C Ho I b A区



第17図 第II期の石器群(2) (S = 1/2)



第18図 第二期の石器群（3）（S=1/2）

この場が生活空間として利用されたことは疑いない。石器製作も同一母岩資料の存在から、この場でおこなわれた機会があったことがわかる。チャート製の台形石器の製作もこの場でおこなわれたことを窺わせる一方、2点あるナイフ形石器については、単独母岩である可能性が高く、搬入などの行動を考慮する必要があるかもしれない。

d 資料の意義と派生する課題

本遺跡第II期、A T下位黒色帶中部に台形石器を作りうる石器群の存在が明確になった。そして、当該石器群の運用において、石刃製作と折断加工が多用される技術として採用されたこともまた、明確となった。石刃製作に焦点をあてた場合、頭部調整よりは打面調整、さらに打面を調整すること

なく剥片剥離を実施する傾向が強いことも、本石器群の特徴として付け加えられる。

一方で、2点のナイフ形石器については、形態上の類似性から第III期に帰属する可能性も残し、他遺跡の事例を併せた考察が必要となろう。また、これらの石器群とA-Fm・A-Otとの時間的関係も解明せねばならない課題として残された。

報告上の課題としては、各石器、礫群構成礫の観察所見・計測データの詳細および母岩・接合資料に關わるデータ、これを踏まえた遺構・遺物分布に關わるデータの提示を第二分冊において果たす予定である。

第7節 後期旧石器時代第Ⅲ期

(1) 概要

第VII層上部を中心に遺構・遺物が確認された。第Ⅲ期に該当する遺構には礫群があり、遺物としてはナイフ形石器、台形石器、彫器、二次加工剥片、石核・剥片類などがあり、注目すべき資料として磨製石斧の破片である可能性が考えられる研磨痕を有する石片が挙げられる。

(2) 遺構(第21~24図)

礫群が22基検出された。A区に14基、B・C区にそれぞれ4基ずつが確認されており、A区に集中する様相が窺える。

礫が稠密に分布するIa類は無く、Ib類がA区に2基、B・C両区に1基ずつあるほかは、全てII類である。

第133号礫群はAT直下にあたる第VI層下部~第VII層上部にかけて9個の礫が集まって検出された(第21図)。

第107号礫群は第VII層上部において、比較的大きなサイズの礫と微細礫を含む10個の礫が検出された(第21図)。比較的大きなサイズの礫が数個集まる様相は、A区第VI層下部~第VII層上部検出の第98号礫群(第23図)や第106号礫群(第24図)でも確認された。

概して、第Ⅲ期の礫群は先述した第Ⅱ期の礫群や後述する第Ⅳ期(AT直上)の礫群に比較して礫の個数も少なく、密集度も低い様相が看取された。

(3) 遺物(第25~28図)

ナイフ形石器(第25図50~63)

ナイフ形石器は計13点確認され、全点を掲載した。出土した調査区の内訳はA区7点、C区1点、E区5点となり、礫群が見出されなかったE区に一定量の分布があることは注目される。ただし、E区においては詳しい出土層位の情報を欠いたものもあり、また60・62のナイフ形石器II群a類はAT上位出土資料を形態的特徴からAT下位の資料と判断したもので、あるいは第Ⅳ期の可能性も指摘しうる資料である。

E区の資料も含め、ナイフ形石器の形態はII群a類が8点と多数を占め(50~52・58~62)、

このうち明確な石刃素材で切断を施す資料が5点認められた(51・52・58・60・61)。

III群b類(一侧縁加工)のナイフ形石器は3点確認することができた(53・54・63)。53・54は背面の構成にもボジ面を含み、素材剥片の獲得方法が注目される。いずれの資料も周辺で製作された痕跡は窺えず、搬入品である可能性が考えられる。

台形(台形様)石器(第25図64)

1点のみ確認された。64は良質のチャートを用いた小形品で、貝殻状剥片の末端に微弱な加工痕が観察される。偶発的な剥離痕または新鮮なものである可能性もあるが、一応抽出しておく。E区の第VII層出土であるが、詳細な出土層位は不明である。

彫器(第26図76)

1点のみ確認された。良質な石材を用いた石刃を素材に、バルブからの縦裂けを生じた折損面に打面から2回の樋状剥離が施されている。これも折損と同時に起きた剥離である可能性もあるが、一応彫器と認定しておく。

研磨痕有る剥片(第28図101)

B区北半における遺物・遺構の希薄な範囲において、単独で検出された。淡緑色の緑色岩質で、一面が研磨され、強い光沢を放つ石片である。線状痕も観察され、人為的な行為の結果と考えられる。一応、磨製ないし部分磨製石斧の刃部周辺の破片である可能性を考えておきたい。

二次加工剥片・剥片・石核類、接合資料(第25図65~第28図)

剥片剥離の技術的様相が追える資料としては、各種の剥片類およびそれを素材とした二次加工剥片、石核などがある。

剥片には各区とも石刃が目立ち、特にA・C・E区に多い。73のように端正な資料も認められる。顕著な打面調整は観察されないが、85には細かな頭部調整が施される。また、77のような稜付き石刃も認められ、簡素ではあるが石核調整技術の一端を窺わせる。背面末端に構成される礫面の存在から、目的剥片としては5cm程度のものを狙ったと考えられる。母岩No.22の非接合資料

2点(65・66)も小～中形の石刃を生産した残滓である可能性を指摘できる。

石核には後述の接合資料に含まれるもの他、71のような小形品も認められる。良質のチャート製で、両端および側縁にも細かな剥離痕が観察され、あるいは楔形石器と認定できるか。

■母岩No.6(珪質頁岩Ⅲ群)接合資料No.6-1(第27図89～93)

本資料は、やや幅広の縦長剥片を素材とし、当初はその末端部(89)にスクレイバーエッジの形成を意図したものと推定される。おそらくは、その途中で剥離事故が起き、剥片を二分する結果となった後、主にその折れ面を打面として小口から小形の縦長剥片(91)の獲得を目的とした剥離が数度おこなわれた(素材剥片の元の打面からも一部剥片剥離がおこなわれた)。しかし、ウーラバッセ(90)が発生した時点では、剥片剥離を中止したものと推定される。

こうした断面三角・矩形の縦長剥片の生産を目的とした剥片剥離技術は、終末期のナイフ形石器石器群(本遺跡第VI期)にみられるものと類似し注目される。

接合資料No.6-1は、A区C4-3グリッドに集中して分布するため、この場で剥片剥離がおこなわれた可能性が指摘できる。93は肉眼での類似性から同一母岩と判断したが、単独で30mほど離れて分布する。

■母岩No.11(成因不明岩石Ⅰ群):接合資料No.11-1(第27図94～96)

本資料は、2点から成る接合資料1組と剥片1点から構成される。接合資料No.11-1は、いずれも背面に礫面を配する幅広剥片で、元になる原石は、礫面が形成するカーブから判断して大きくとも洋梨大を越えないであろう。石材は成因不明ながら良質である。

■母岩No.19(成因不明岩石Ⅰ群)(第27図97～100)

本資料は接合資料は確認されないが小形の剥片4点からなる。

■母岩No.12(成因不明岩石Ⅰ群):接合資料No.12-1(第28図102～104)

幅広ないし不定形剥片から構成されるが、作業面調整(頭部調整)をおこなった痕跡が看取られ、技術的に注目される。接合資料No.12-1は幅広の縦長剥片を輪切りにするように折断した可能性がある。

■母岩No.28(珪質頁岩Ⅲ群)(第28図107)

単独母岩の石刃である。顕著な打面調整や作業面調整の痕跡は認められない。

■母岩No.14(成因不明岩石Ⅰ群)(第28図111～115)

母岩No.12と同様にやはり、作業面調整(頭部調整)の痕跡が観察される母岩資料である。110や113の存在から判断すると、他に石刃を生産していた可能性も指摘できる。115は剥片末端部の縁辺に二次加工痕が施されノッチ状になっている。

(4) 小結

a 器種構成と剥片剥離技術

指標的な遺物としてナイフ形石器が挙げられる。1点のみ認めた台形石器(台形様石器)には安定的な評価は与えにくい。ナイフ形石器はⅡ群a類が主体となる。これらの素材には石刃ないしそれに類する縦長剥片の生産が密接に結びつくが、対応する石刃・縦長剥片も同一層から出土しており、両者は技術的にはセットとして捉えられる。ただし、ナイフ形石器の同一母岩資料は明らかになっておらず、端正な石刃もまた単独母岩である場合が目立つ。石刃生産技術に関する興味深いのは接合資料No.6-1である。剥片素材石核から小形石刃を生産するこの種の技術がいかほどの普遍性を持つのか、その評価が重要である。

また、石刃・剥片に共通して、打面調整よりも作業面調整(頭部調整)を行使する機会が目立つことも技術的特徴のひとつとして挙げられよう。

器種構成上の特徴として、各調査区を通じて削器や插器といったスクレイバー類が無いことも挙げておきたい。母岩別資料の分析・認定を推し進めれば、あるいは評価が変わる可能性もあるが、現段階において明確に第Ⅲ期のスクレイバーと呼べる資料は確認できなかった。唯一それと評価できるのは、接合資料No.6-1を構成する二次加

工剥片（第27図89）のみである。他方、微細剥離剥片や二次加工剥片は一定量認められる。

特筆すべき遺物としては研磨痕を有する石片がある。これが磨製石斧の一部であるとすれば、黒色帶上部の資料としては九州島内に類例をみない。それだけに慎重な評価が求められる。

b 石材利用

石材利用上の特徴としては、珪質頁岩、流紋岩、成因不明の岩石などが量的に卓越し、チャートが少量補完的にに入る。71のチャート製石核（第26図）は楔形石器とも捉えうるが、チャート利用の在り方を示すものであろう。一方、第II期に認められた黒曜石の利用はこれまでの整理においては認定していない。全ての時期にいえることであるが、石材獲得の実際に迫るには、珪質頁岩や流紋岩、特にII群b類・III群としたグループの産状の解明が必須の課題として挙げられる。

c 行動

第II期と比較したとき、一見して明らかなのは、礫群の規模とパターンの異なりである。第III期の礫群は全体的に礫の数量が少くなり、また、密集度も低くなる。そして相対的に大形礫の遺存率が高くなっている。こうした在り方が、スクレイパー類を持たない器種構成とも関連して、この場の空間利用の問題に発展させられるか否かは、礫群の詳細な分析の進展にかかっている。

d 資料の意義と派生する課題

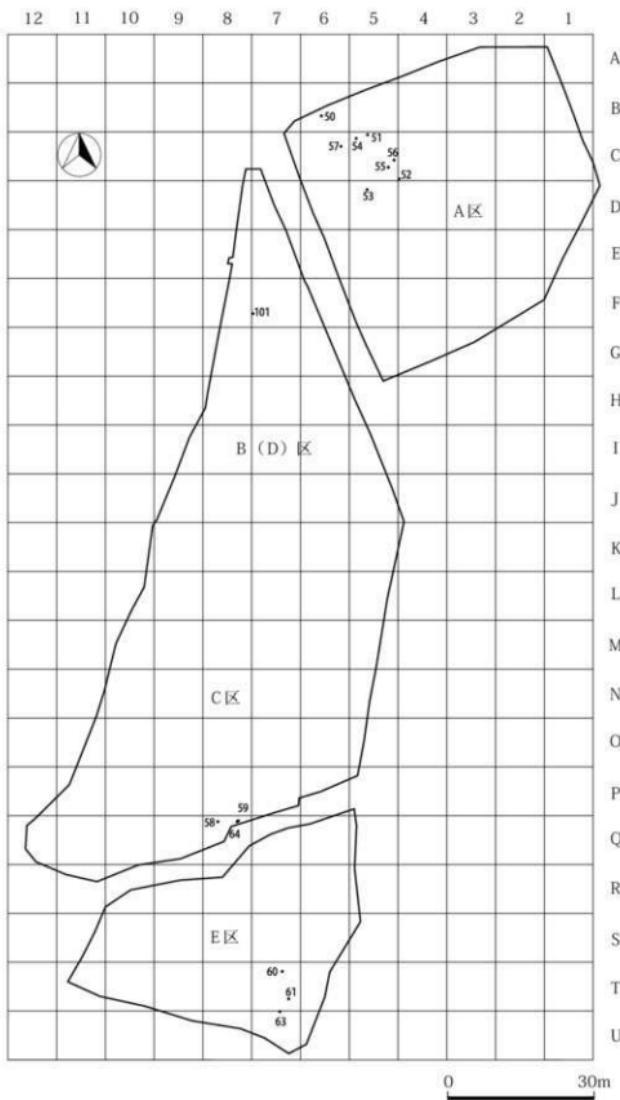
本遺跡第III期では、A T下位黒色帶上部の石器群において行使された石刃・縦長剥片生産技術の一端が明らかとなった。またそれに基づくナイフ形石器の在り方、形態組成の変異についても窺い知ることができる。

また、第II期と比較して礫群の様態にも違いがあることが明らかとなった。これが編年的な差異なのか、同時期の空間利用の違い、機能的な差異なのかは、今後他遺跡の事例も含めた検討が必要となる。

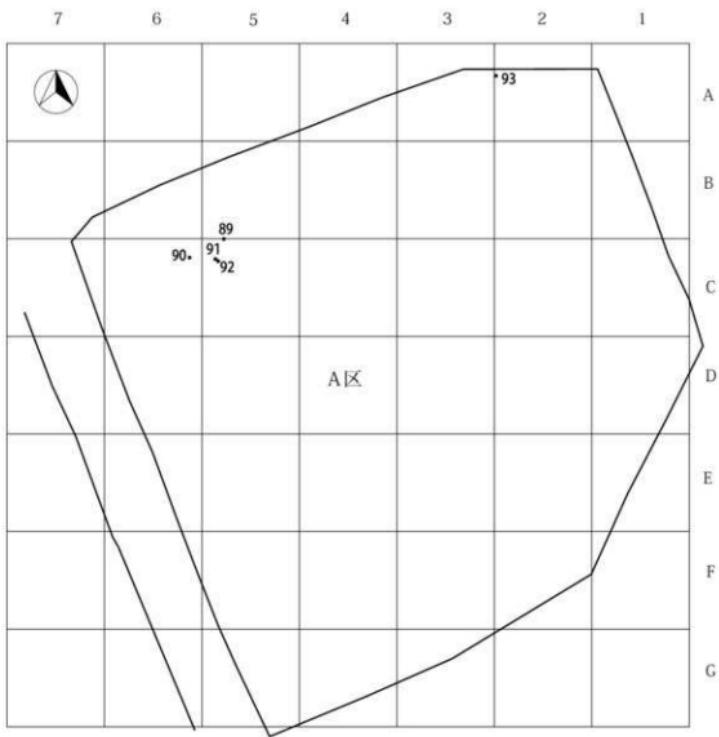
また、ナイフ形石器に関しては、他遺跡のほぼ同一層位出土の石器群の事例において、本遺跡第III期と比較して、より小形の一群が優勢となる場合も複数知られている。それらの石器群との関係

についても今後の課題として挙げたい。

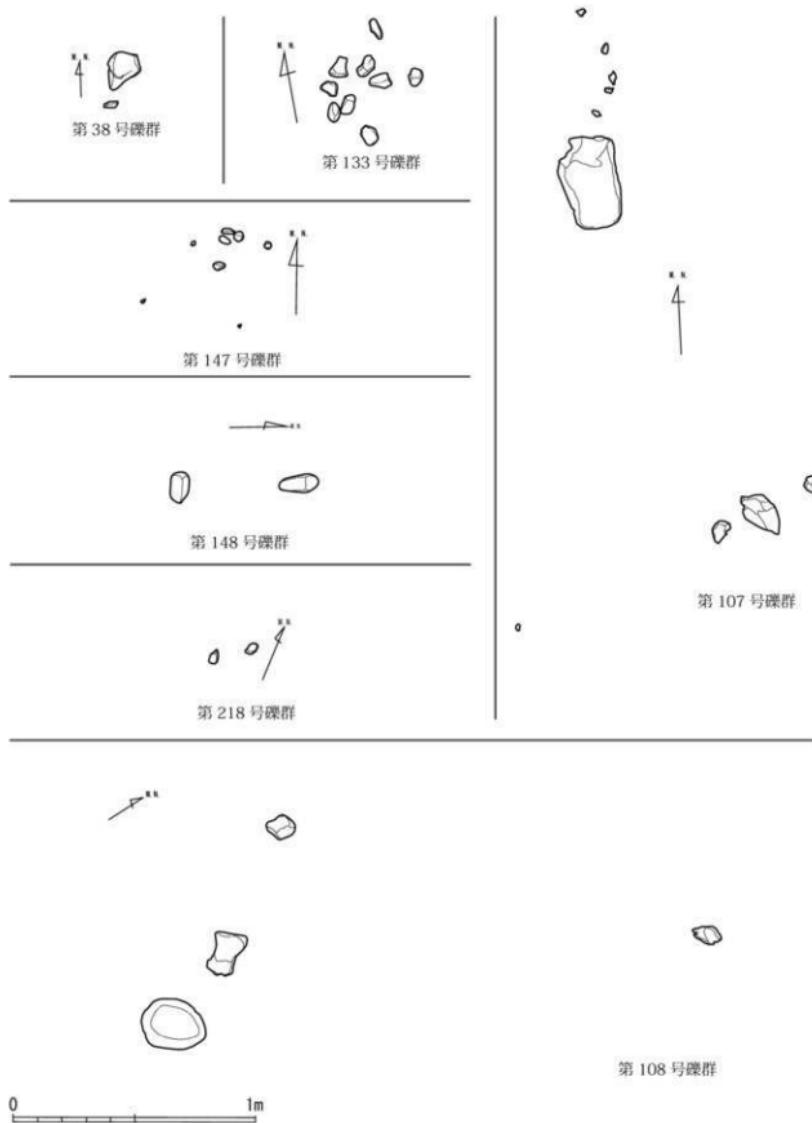
なお、今回図示していないが本時期の第37号礫群から採取された炭化物の放射性炭素年代測定では、未較正で $28,010 \pm 220$ BPという結果も出ている。これについては、第二分冊に再び触れたい。



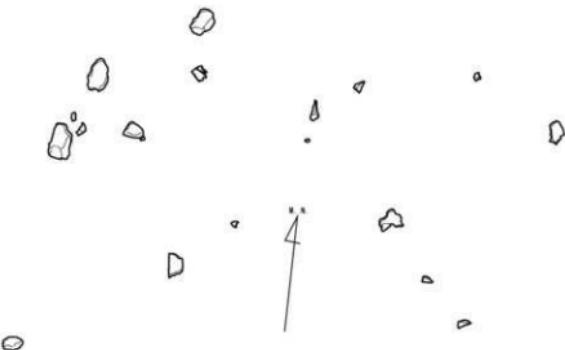
第19図 第III期の石器の分布（1） 主要な石器の分布 ($S = 1/1,000$)



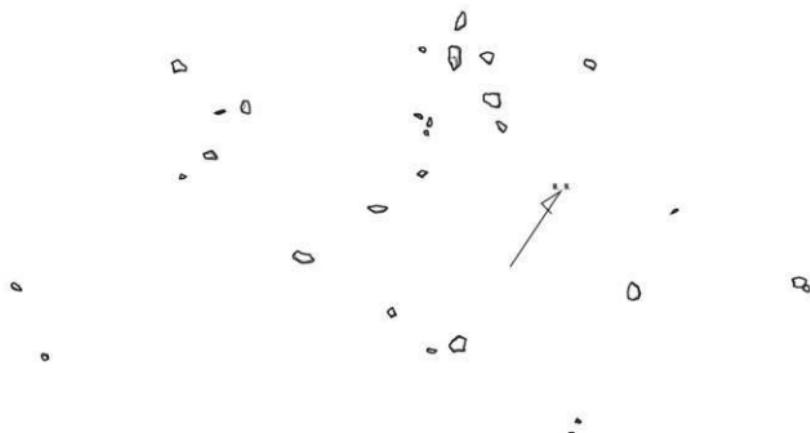
第20図 第III期の石器の分布（2）母岩No.6の分布



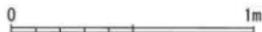
第21図 第III期の疊群(1) 第38・107・108・133・147・148・218号疊群 ($S = 1 / 20$)



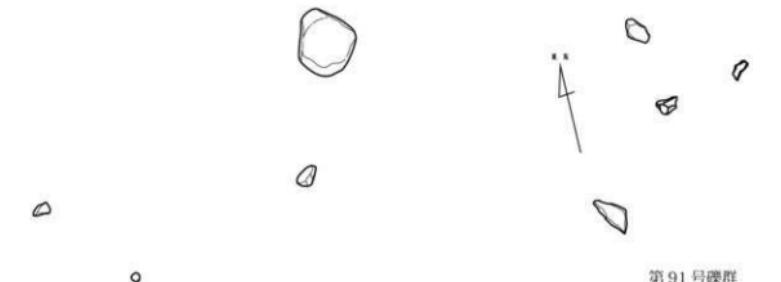
第40号砾群



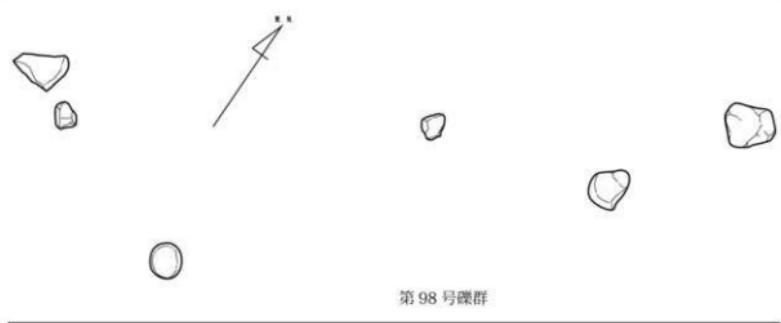
第51号砾群



第22図 第III期の砾群(2) 第40・51号砾群 (S=1/20)



第 91 号砾群



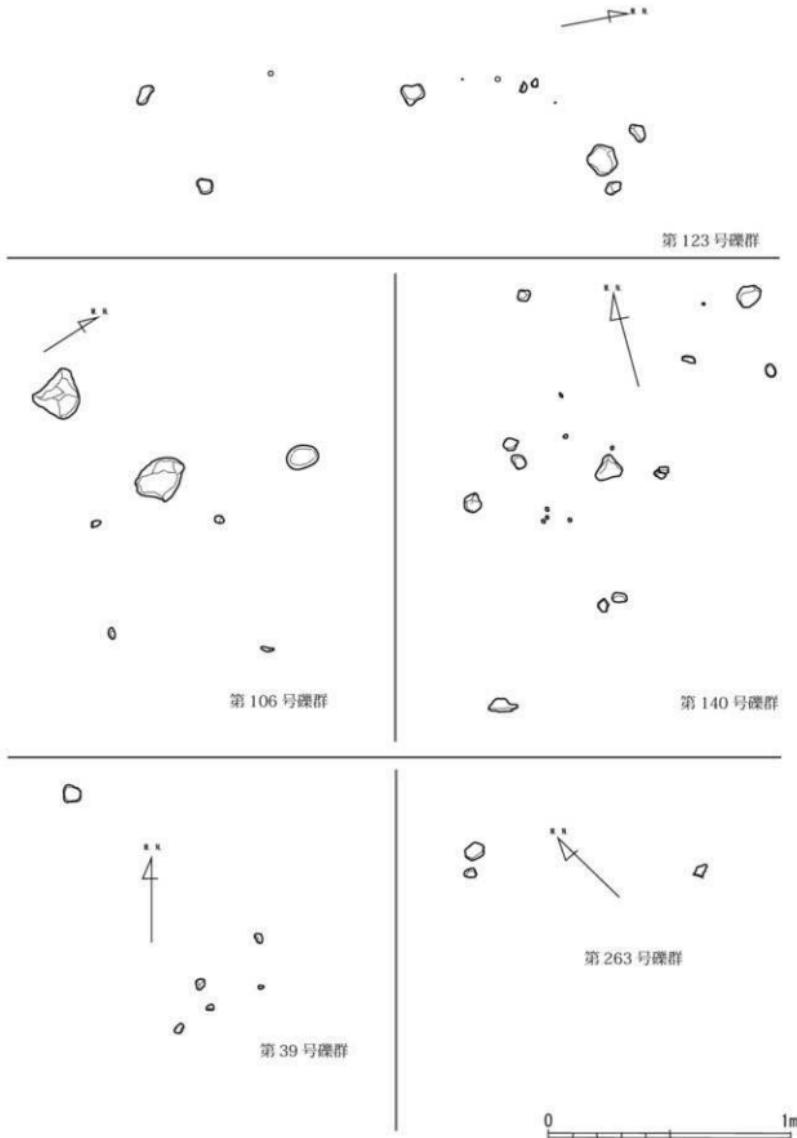
第 98 号砾群



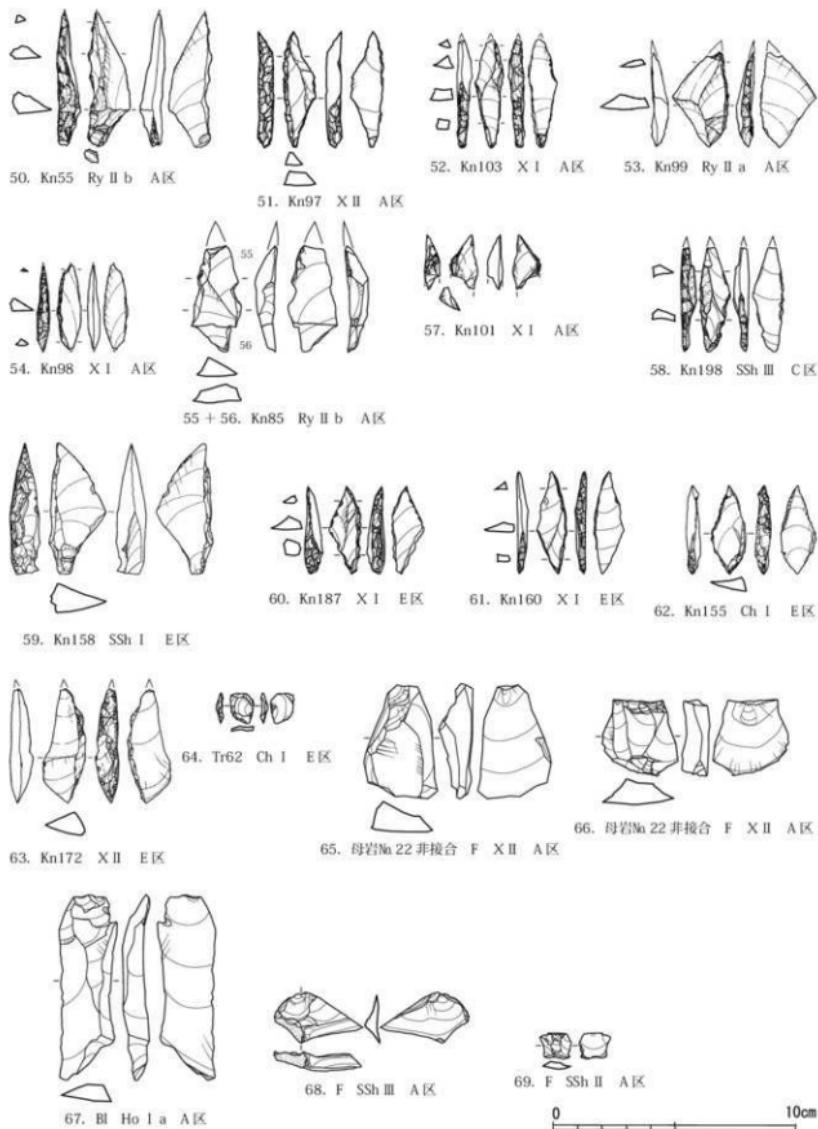
第 99 号砾群



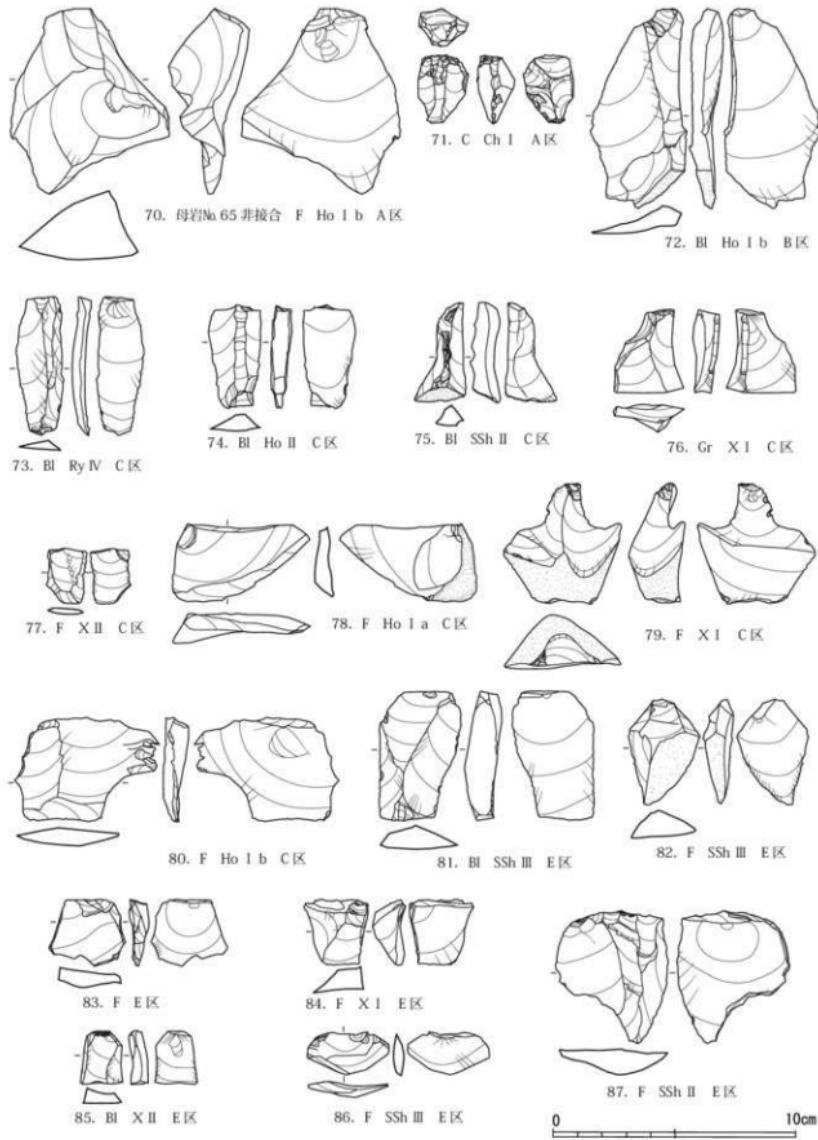
第 23 図 第 III 期の砾群 (3) 第 91・98・99 号砾群 ($S = 1 / 20$)



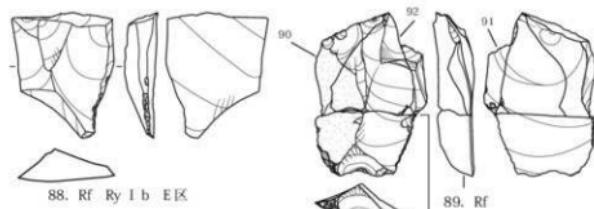
第 24 図 第 III 期の碟群 (4) 第 39・106・123・140 号碟群 ($S = 1/20$)



第25図 第III期の石器群（1）(S = 1 / 2)



第26図 第III期の石器群（2）(S=1/2)

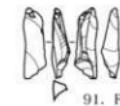


88. Rf Ry I b E区

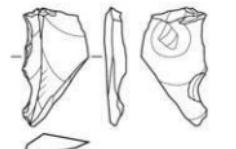
89 + 90 + 91 + 92. 母岩№ 6
接合資料№ 6 - 1
SSh III A区



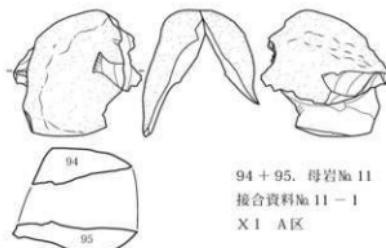
90. F



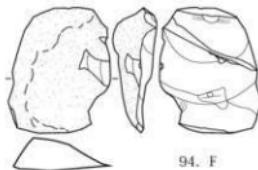
92. C



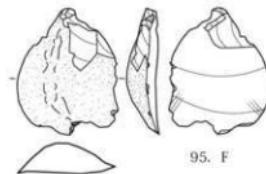
93. 母岩№ 6 非接合 F SSh III A区



94 + 95. 母岩№ 11
接合資料№ 11 - 1
X I A区



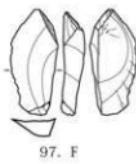
94. F



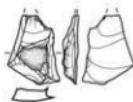
95. F



96. 母岩№ 11 非接合 F X I A区



97. F



98. F



99. F

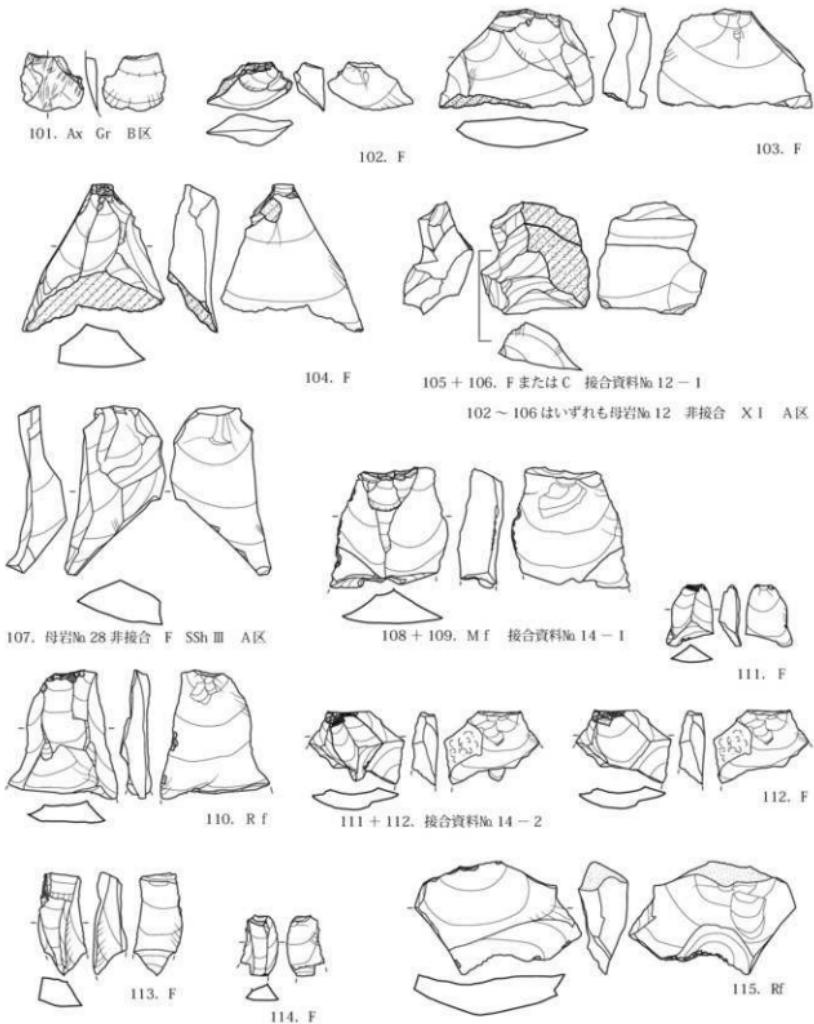


100. F

99 ~ 102 はいずれも母岩№ 19 非接合 SSh III A区



第27図 第III期の石器群(3) (S = 1 / 2)



第28図 第III期の石器群(4) ($S = 1/2$)

第8節 後期旧石器時代第IV期

(1) 概要

主に第V層(MB1)下部～第VI層(AT)直上にかけて遺構・遺物が確認された。第IV期に該当する遺構には礫群があり、第VI層直上において検出されたものが多い。主要な遺物としては、ナイフ形石器、台形石器、掻器、二次加工剥片、微細剥離剥片、石核、剥片類が挙げられる。

(2) 遺構

礫群が47期検出された。検出された調査区の内訳としては、A区から10基、B(D)区から10基、C区から22基、E区から5基となる。なお、礫群の分布については第二分冊に掲載するので、あわせて参照願いたい。

A区では礫が稠密に分布するIa類が目立ち、一方B・C・E区では、Ib類、IIa・b類が主体となる。

第18・19号礫群は隣接して検出された、調査の進行上、便宜的に分割して記録したが、第18号は、第19号と一連のもので、これに包摂されるよう。第19号礫群は典型的な礫群Ia類であり、直径2mほどの範囲に赤く焼けた礫が密集している(第30図・巻頭図版2-2)。検出層位は第VI層直上から第V層下部にかけてである。礫の数量は、第18号礫群が3点(同一固体の破損)、第19号礫群が265点を数え、合計は268点となる。第19号礫群のすぐ南側には、同一面から検出された第20号礫群も接しており(第30図)、その構成35点を加えると、総計303点が近接して分布することになる。

また、これらの礫は一様に分布するのではなく、いくつかの集中部と捉えられる箇所もみられる。第20号礫群や、第19号礫群東側の集中部などは、直径およそ60cmほどの範囲に礫が集中するよ様相がよく類似しており、これらが本来の単位をとどめる可能性も考えられよう。礫の遺存状況としては、比較的平らな礫が重なった部分が散見され、注目された。これは第20号礫群にも共通している。

他に特筆すべきものに、これらの礫群の範囲に重複して検出されたピット群が挙げられる。第

19号礫群では、4基のピットが検出され、このうちピット3は埋土が縄文時代早期以降のそれと類似していたため、後世の搅乱の可能性が高いと考えられた。他の3基については、埋土の母体が第V層と推定され、調査段階では、後期旧石器時代の遺構である可能性も残された。しかしながら、埋土中の炭化物2点、礫群表面の炭化物1点について、放射性炭素年代測定を実施した結果、いずれもBP8,000年代前半の値が得られた。この年代は、縄文時代早期の集石遺構や炉穴出土の炭化物の測定結果とほぼ一致する年代幅であり、したがって、礫群第19号に伴って検出されたピット群は縄文時代早期以降の所産である可能性が強まったのである。

ただし、後述する第27・29号礫群においては、やはりピットを作り、礫群表面の炭化物を放射性炭素年代測定にかけた結果、BP22,000年代という結果が得られており、AT直上の年代としては妥当と判断される。したがって、第19号に伴うピット群については、一応縄文時代早期のピット(搅乱)と評価しつつも、第20号の礫を除去した後に検出された遺構については、後期旧石器時代IV期の所産として理解しておきたい。

第27・29号礫群は、調査時の便宜上二つに分けて記録したが、遺構としては一連のものである。

第VI層直上から第V層下部にかけて155点の礫が大きく二つの集中部に分かれて分布する礫群Ia類である。礫群構成礫に混在して石核が1点認められた。礫の分布に重複して、大小規模のピット6基が認められたが、掘形のラインは不明瞭であった。ピットの埋土は基本的に第V層を母体にしている。

礫群表面から検出された炭化物を放射性炭素年代測定にかけた結果、 $22,370 \pm 120$ BP(未較正)という結果が得られている。

第30号礫群は、第V層下部から検出された礫群Ib類である。10点の構成礫からなる。調査区際での検出であったため、分布と構成礫数は更に伸びる可能性もある。

第181号礫群も、礫群Ia類とIb類の混合である(第32図)。89点の礫からなる。細かく

破碎した極小礫を一定量伴う。また、礫の集中域に接してナイフ形石器（第35図117）が共伴している。

276号礫群も礫群I a類とI b類の混合であり、133点の礫からなる（第33図）。やはり、礫の集中範囲からやや離れて微細剥離片が出土している（第35図135）。

第16・146号礫群は、比較的大形の礫を含む礫群II a類である（第32図）。前者は3点、後者は2点と少ない礫のみが分布する。いずれも第V層下部から第VI層直上において検出された。礫は破碎の度合いが低い。

（3）遺物（第35～60図）

ナイフ形石器（第35図116～129）

ナイフ形石器は、計17点確認され、うち14点を掲載している。出土した調査区の内訳は、A区1点、B（D）区2点、C区11点、E区3点となり、礫群の検出数と呼応するようにC区における出土が目立つ。

116は1点のみ出土したA区の資料である。素材剥片から判断すると、ナイフ形石器II群b類に該当する。

117は、流紋岩製のII群b類である。いわゆる狸谷型ナイフ形石器に該当する。第181号礫群に伴出して出土が確認された（第32図）。先端を欠損する。

118は、桑ノ木津留・上青木系と思しき黒曜石製のナイフ形石器II群a類であるが、非常な小形品である。器長21.3mmを測る。

119～125はC区から出土したナイフ形石器II群b類であり、いわゆる狸谷型ナイフ形石器の特徴によく合致する資料群である。素材剥片は幅広剥片や不定形剥片などの一般的剥片と推定され、それを横位または斜位に用いている。119や120、209など、断面形が分厚な資料も含む。

127・128はE区から出土した同種のナイフ形石器であり、129もおそらくナイフ形石器II群b類の上半部と推定される。121もその未成品と捉えられようか。

なお、121は第I層（縄文時代後期以降の遺物包含層）からの出土であるが、技術的特徴を検

討した結果、第IV期の石器群に含めるのが妥当と判断されたものである。同様に195は第VI層下部第V層直上からの出土であるが、第IV期の石器群に含めるのが妥当と判断した。未掲載のナイフ形石器2点についても、後世の遺構出土の資料を含んでいる。それ以外の資料については、122が第V層中部出土、128がE区の第V層出土で上・中・下部のいずれかの記録が無いのをぞき、全て第V層下部から第VI層直上にかけての出土である。使用された石材の傾向としては、珪質頁岩、流紋岩、成因不明の岩石が大多数を占め、黒曜石を用いた118は例外的な存在と位置付けられる。チャートや風化が激しいホルンフェルス類がナイフ形石器の素材として見出されない点は興味深い。分布の傾向としては、概ねナイフ形石器の形態と相関する様相が読み取れる（第29図）。特にC区南端部ではナイフ形石器II群b類（狸谷型ナイフ形石器）が集中して分布する。

台形石器（第35図133）

133は良質の流紋岩II群b類を用いた台形石器である。後述する第VI期の台形石器とは趣きを異にし、第IV期のナイフ形石器の集中部と出土地点が重なること、出土層位も第VI層(AT)直上であったことから、当該期の資料と判断した。貝殻状剥片を素材とし、その一方の側線にプランティングを施している。もう一方の側線は素材剥片の一次剥離面をそのまま残す。他に類例が無いため、あるいはナイフ形石器の未成品、二次加工剥片とするのが妥当かもしれない。

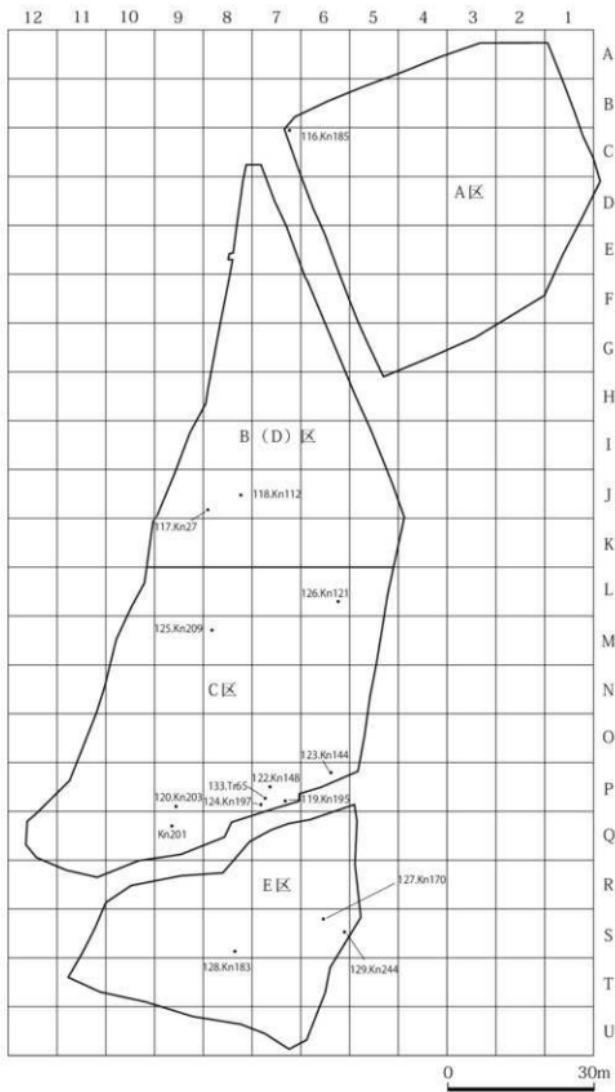
搔器（第35図136）

136は、成因不明ながら良質の石材を使用した搔器である。縦長剥片を使用し、その末端の刃面残存部に簡素なスクレイバー・エッジを設けている。また、正面右の側線にはやや不規則な剥離痕が観察され、使用痕である可能性も指摘できる。

なお、正面左に展開した面の観察からは、打面再生剥片を素材とした可能性も考えられる。

二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・石核類（第35図130～137、第36・37図、第38図150～152）

剥片剥離技術の様相が追える資料としては、各



第29図 第IV期の石器の分布 ナイフ形石器と台形石器 ($S = 1 / 1,000$)

種の剥片・二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・石核類が挙げられる。

剥片では、石刃と呼びうる 130 や 138・139 などが注目されるが、これらに明確に対応すると思しき石核は見出されない。138 と 139 は近接した位置から出土が確認されており、やや外観が異なるもののよく似た石質を備えることから、同一母岩である可能性が高い。ただし、後述のように打面は違え、剥離された機会は同一ではない。

138 は正面右の側縁に微細剥離痕が観察され、使用痕である可能性がある。139 は、主要剥離面の末端にわずかではあるが、二次的な剥離痕が観察され、一応二次加工剥片とした。いずれも打面調整は見出されず、138 は單一打面、139 は疊面打面からの剥離である。138 の頭部には作業面調整ともとれる剥離痕が若干認められる。また、138 の背面下端には被熱によるものかハジケが認められる。

石核には明確な石刃石核は見当たらず、幅広剥片・貝殻状剥片などの一般的剥片に対応する可能性が高い資料が多く出土した。

142 は背面が疊面で構成される大形の幅広剥片を素材としたものである。素材剥片背面の末端には比較的急斜度の剥離が複数入っており、それに微細剥離痕が加わることから、スクレイパーないし礫器に類するツールであった可能性も考えられる。素材剥片腹面側には末端側と側縁の一部から平坦な剥離痕が伸びており、小形の貝殻状剥片に対応するものと考えられる。これに類似した石核としては、144・148 などが挙げられる。

他方、直方体状の石核で複数回の打面転移をおこなう資料も多く認められた（146・147・149・150）。

打製石斧（第 38 図 153）

153 は打製石斧である。素材や整形技術の点では、第二分冊に報告予定の縄文後・晩期の打製石斧類（石鎌）と変わることろではなく、上層からの落ち込みなど混入の可能性が高い。しかし、混入である明確な証拠は調査時に確認できなかつたため、一応本節で扱った。

（4）小結

a 器種構成と剥片剥離技術

指標的な遺物としては、ナイフ形Ⅱ群 b 類についてまとまった量を確認することができた。これらのナイフ形石器は分布的に集中して出土する範囲が認められ、層位的に一定の安定性を備えている。ただし、同じナイフ形石器Ⅱ群 b 類のうちでも、形態には若干の変異が認められる。第 35 図 116 や 117 はその他の C 区を中心に出土した資料群とは分布的に懸隔がある。他方で、117 とⅡ群 a 類である 118 は近接した位置から出土しており、何らかの関係を想定させる。

これらのナイフ形石器の同一母岩資料、接合資料のさらなる探求は今後の課題でもあるが、対応すると思しき石核の存在は明らかとなった。一般的剥片の生産を目的とした石核類である。一方、石刃技法に関連する可能性がある資料も確認されたが、対応する石核は見出していない。スクレイバー類などについては、ややイレギュラーな形態の資料を少量確認するにとどまった。他遺跡の同一層位事例を参照する必要があろう。

b 行動

第Ⅳ期の大きな特徴のひとつとして、多く確認された疊群 I 類の存在がある。先行する第Ⅲ期と比べると、量的にはかなり増加したと評価できる。これらの疊群の存在は、この場が疊群を作う何らかの行動・行為にとって重要な位置付けにあつたことの証左であろう。それと反比例して石器の量はさほど多いわけではない。可能性としては上方拡散の結果、第Ⅷ期の所産として処理しているもの多いかと考える。これについてもさらに同一母岩資料・接合資料の探索が肝要となろう。

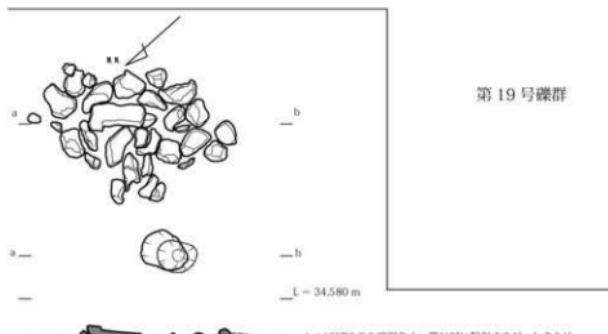
e 資料の意義と派生する課題

稜谷型ナイフ形石器のまとまった出土例は近年いくつかの遺跡において確認されているが、本遺跡もその一つとして加わることができた。また、疊群の在り方もナイフ形石器の共伴からこの時期（A T 直上石器群）の特徴として評価できよう。課題としては、編年的な評価が重要であり、特に剥片尖頭器を作う石器群との関係が注目される。

第18号礫群



第19号礫群



1: 10YR3/5 喬褐色土 第V層に類似するが、しまりは強い。直径 10 ~ 25mm の第VI層ブロックをわずかに含む。直径 1 ~ 3mm の炭化物粒をごくわずかに含む。

第20号礫群



第30図 第IV期の礫群 (1) 第18~20号礫群 ($S = 1/20$)



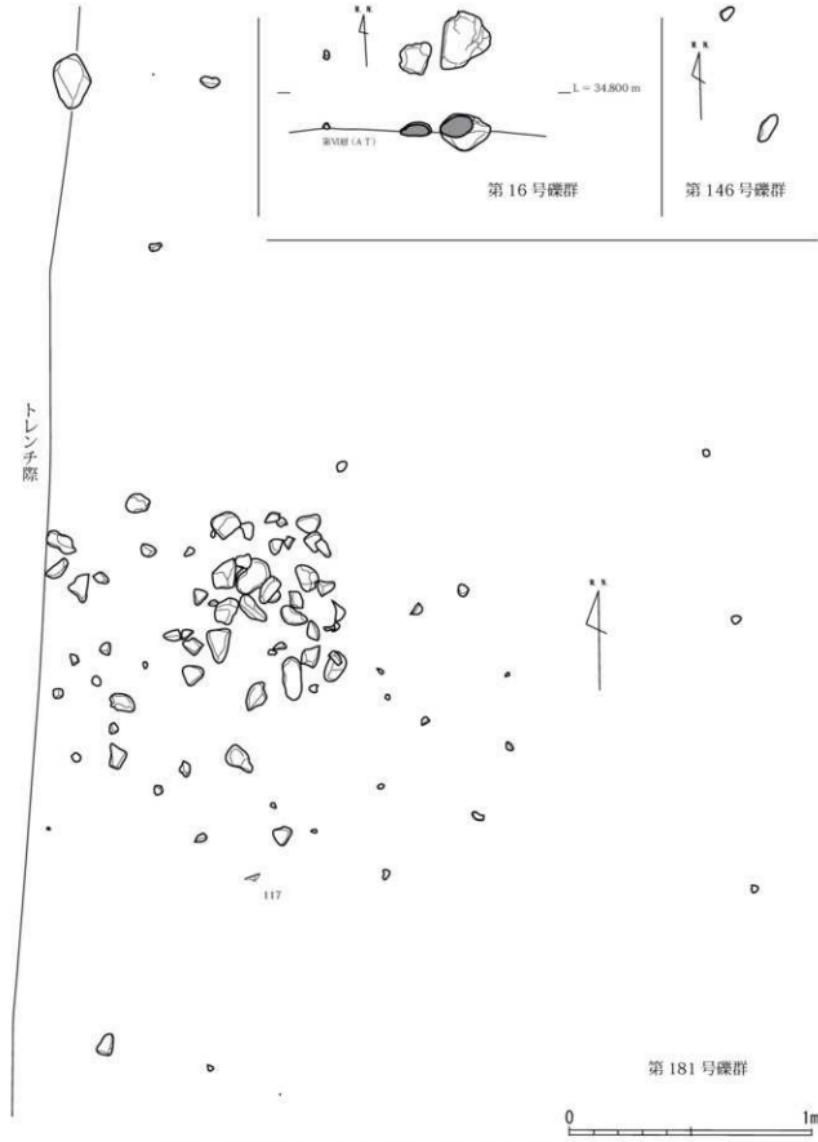
第27・29号礫群



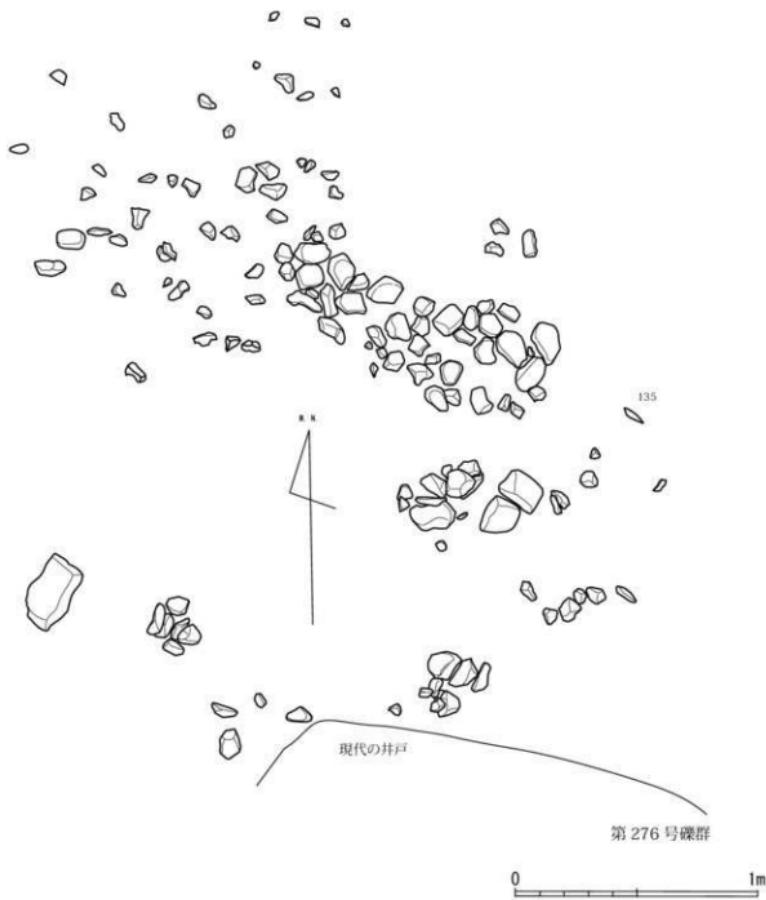
第30号礫群

0 1m

第31図 第IV期の礫群（2） 第27・29・30号礫群 (S = 1 / 20)



第 32 図 第 IV 期の碑群 (3) 第 16・146・181 号 碑群 ($S = 1/20$)



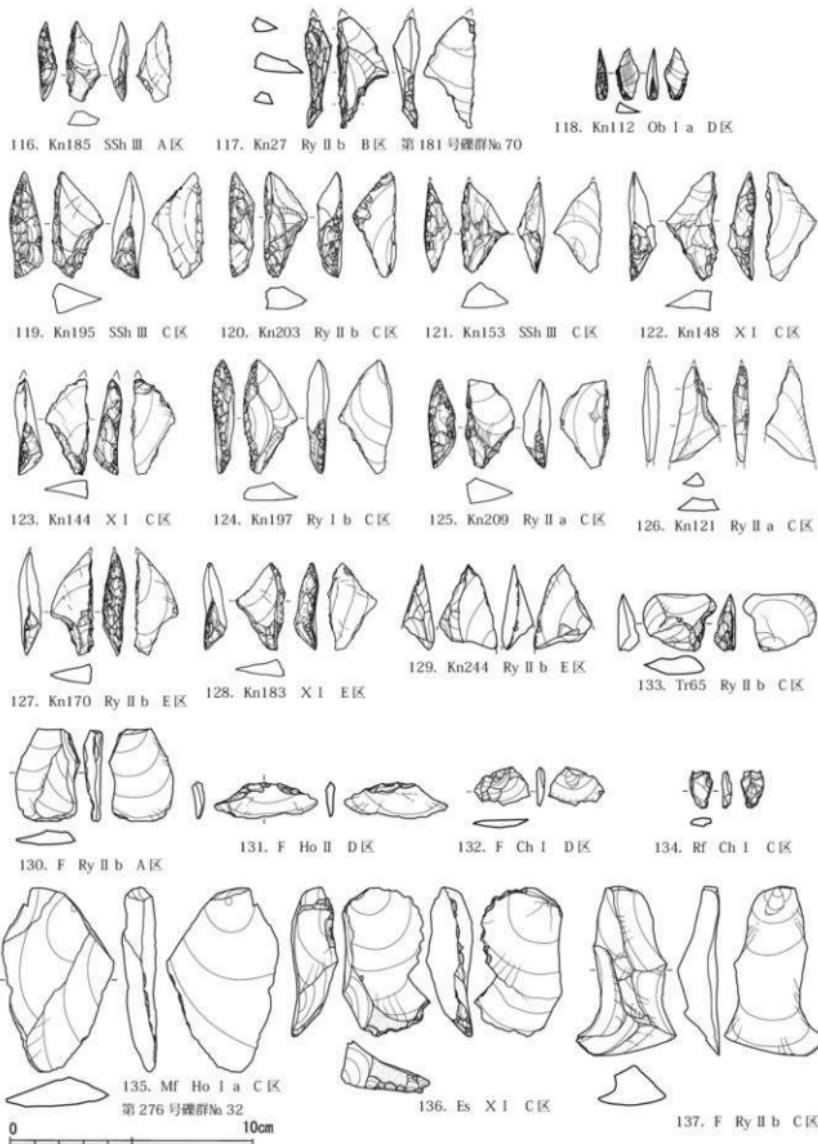
第33図 第IV期の磐群 (4) 第276号磐群 ($S = 1/20$)



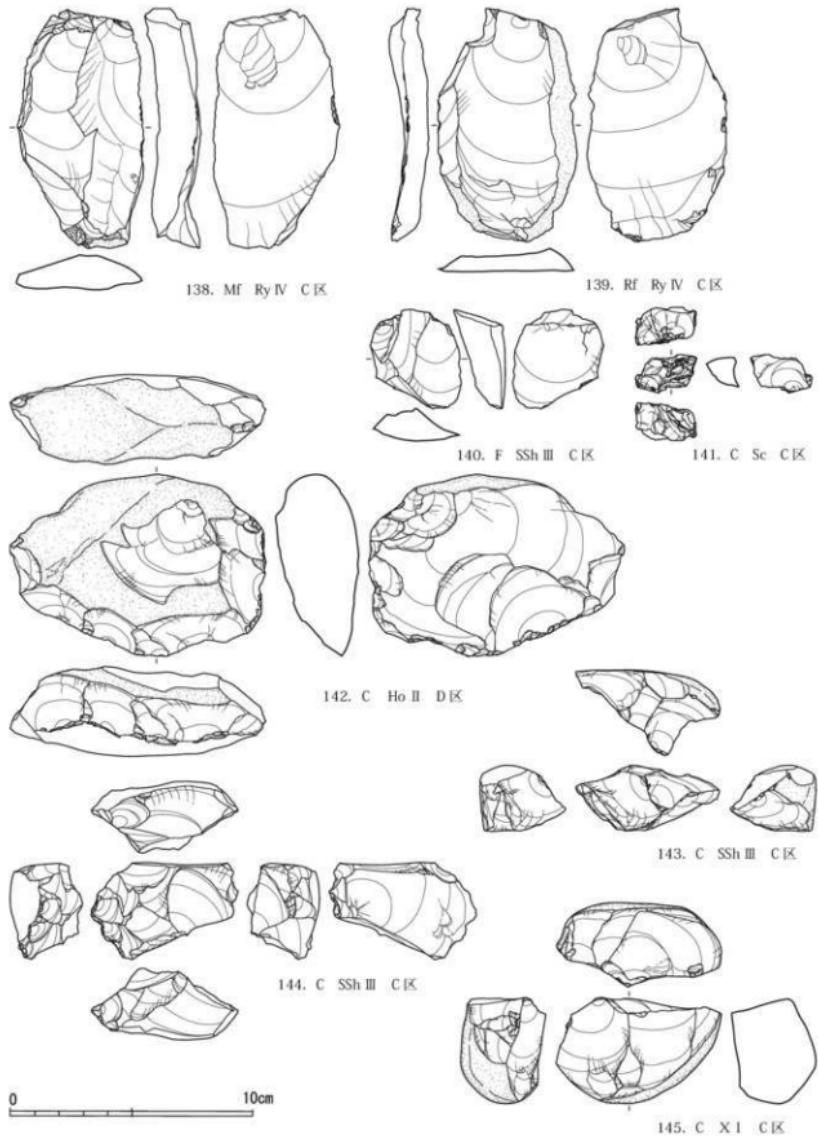
第185号砾群



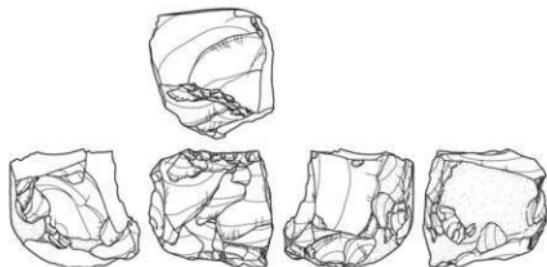
第34図 第IV期の砾群(5) 第185号砾群 ($S = 1/20$)



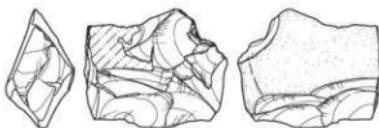
第35図 第IV期の石器群（1）(S=1/2)



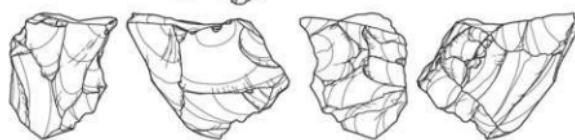
第36図 第IV期の石器群(2) ($S = 1/2$)



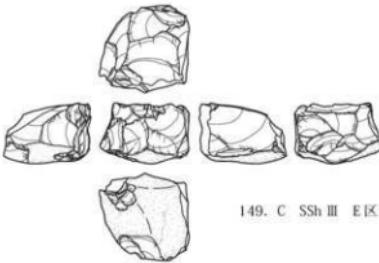
146. C XI C区



148. C SSh III E区



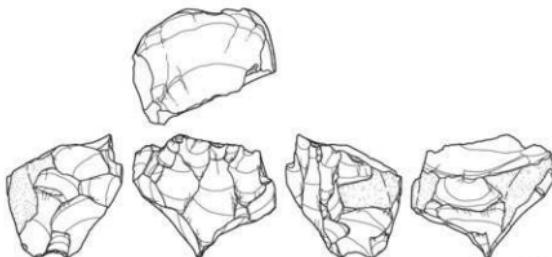
147. C SSh III C区



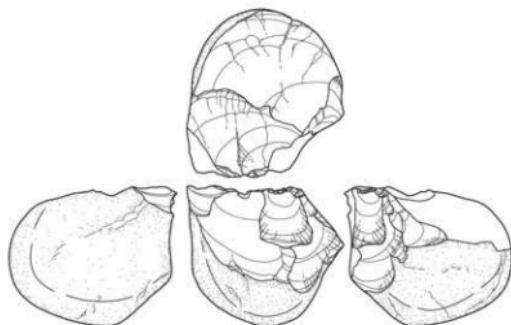
149. C SSh III E区



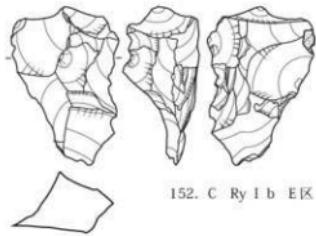
第37図 第IV期の石器群（3）(S = 1/2)



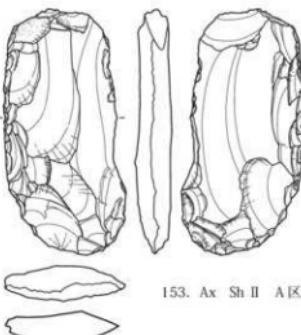
150. C SSh III E区



151. C XII E区



152. C Ry 1 b E区



153. Ax Sh II A区



第38図 第IV期の石器群(4) (S=1/2)

第9節 後期旧石器時代第V期

(1) 概要

主に第V層中部～第IV層下部にかけて遺構・遺物が確認された。第V期に該当する遺構には礫群があり、調査段階では、160以上の分布単位を確認した。本報告では明確なまとまりを持つ14基の礫群について報告をおこなう。

遺物としてはナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、搔器、削器、敲石、磨石、石核・剥片類などが認められる。また、V層下部～V層上部にかけて台形石器の出土もみられたが、形態的な齊一性を考慮した結果、IV b層以上からの下方拡散の可能性が高いと判断し、第10節の第VI期石器群に含めて報告することにした。無論、第V期石器群あるいは第IV期石器群に台形石器が伴うことは充分に考えられるが、他遺跡資料との比較検討を待ちたい。

(2) 遺構（第41～46図）

A～C区における礫群構成礫の分布上の特徴として、第II期や第IV期で確認されたような稠密な礫群の乏しさが目立つ。A区では第28号礫群がI a類であり、E区でも密な稠密なタイプの礫群が確認されたが、検出層位の記録ではA～Cと異なり、V層の細分層位が記録されていないため、第IV期・第VI期の礫群が混在する可能性がある。したがって当該期の特徴として普遍化するには難がある。

第28号礫群は、253点の礫からなり、直径1mほどの範囲に礫が集中する箇所が認められる（第41図）。縄文時代早期の集石遺構に切られており、本来の礫の量は現在残存しているよりも多かったものと推定される。また、調査区の範囲外に分布が広がる可能性も考えられる。

第7合礫群は、比較的完形に近い円礫8点から構成される小規模な礫群である。一方、第66号礫群はより小さなサイズの礫が狭い範囲にまとまっている（第42図）。

第2・3号礫群（第42図）と第25・141号礫群（第43図）は、礫同士が間隔をやや空けてまばらに分布する礫群I b類である。第183号礫群（第44図）も本来は礫群I b類もしくはI

a類であったと推定されるが、縄文時代後期以降の所産と推定されるビットによる搅乱を受けており、本来の分布をとどめていない。重要なのは、近接して3点のナイフ形石器（第49図183～185）が伴出していることで、同一平面からの出土が確認されている。本礫群は第V層中部からの検出であり、大形で基部裏面に平坦剥離を施すナイフ形石器の一組の本来の帰属層位を知るうえで貴重な資料と評価される。

第47・48号礫群（第44図）と、第50・103号礫群は比較的大形の礫から構成されるタイプである。

第4・9号礫群（第46図）はいずれもA区の第V層上部からの検出である。先述した第183号礫群が第V層中部からの検出であったように、第V層を調査中には、礫群の検出層位において、微妙な検出レベルの差が感じられた。この点を考慮するならば、本報告書において、第V期と一括している資料群は編年的な差異を内包している可能性にも留意する必要があろう。

礫群については、接合資料も数多く確認されたが、その詳細については第二分冊で触ることにしたい。

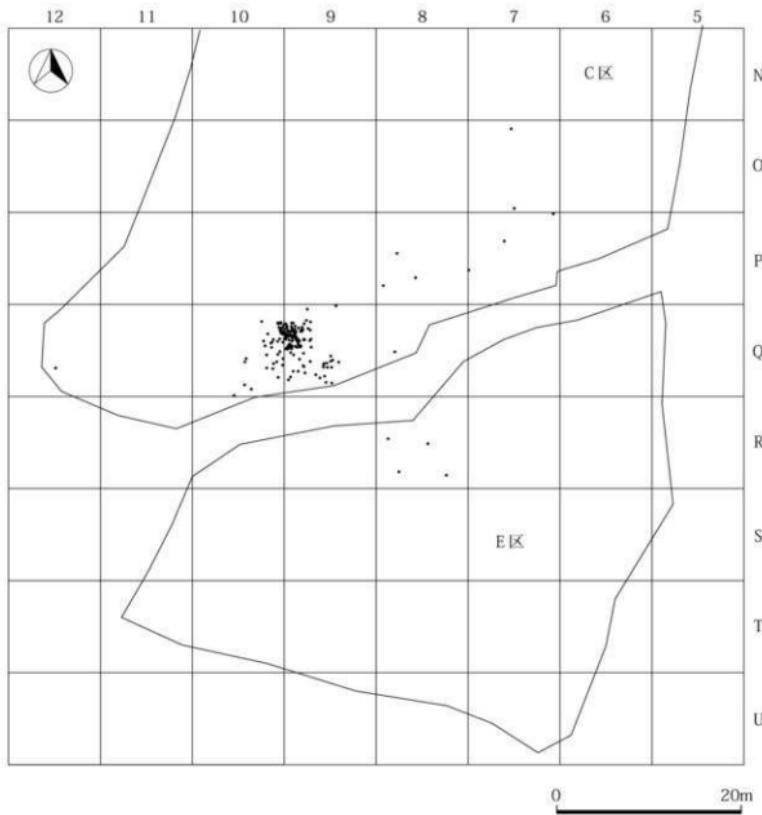
(3) 遺物

ナイフ形石器（第47図～第53図237～244、第62図340～345、第66図390・391、第67図405）

ナイフ形石器は後に接合することが判明した破片も1点と数えると、総計127点となった。うち99点を図示した。

指標的遺物としては、ナイフ形石器III群a類（国府型ナイフ形石器を含む有底剥片を素材としたナイフ形石器）、V群（類角錐状石器）がある。また、I群c類・II群a類の大形品も本期に特徴的なナイフ形石器として評価できよう。第V期の資料は本書で設定したナイフ形石器の類型化になじまないところも多い。分類体系の整備は今後の課題である。点数が多いため、以下、主要な類型について説明を加えたい。

II群b類（第47図156・167、第49図194・197、第51図217、第53図238）



第39図 第V期の石器の分布(1) 母岩No.43

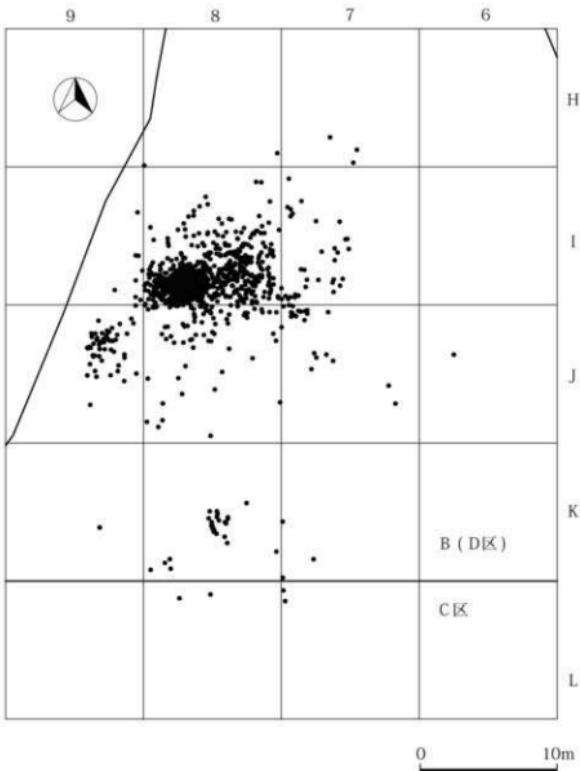
156は小形の二側縁加工ナイフ形石器である。正面左側縁はインバースリタッチである。この特徴を重視すると、第VI期に帰属する可能性も考えられる。

B (D) 区から出土した 167 は一応本類型に該当するが、基部付近の裏面に平坦剥離をいれる点が特徴的である。また、プランティングも大振りで背縁は鋸歯状を呈する。

C 区からも数点の資料が確認された。197 は著しく風化が進んだホルンフェルスを用いている

ため、剥離面が読みにくいが二側縁加工のナイフ形石器と考えられる。217 は不定形剥片を用いた二側縁加工ナイフ形石器である。技術的特長が第IV期の稜谷型ナイフ形石器と共通するが、基部の裏面に平坦剥離を入れる点から、第V期の所産と理解される。

III群 a 類 (第47図 154・155・159, 第49図 189~191・193, 第52図 234~236, 第53図 239・240, 第62図 340~345)



第40図 第V期の石器の分布(2) 母岩No. 63

A区からは典型的な国府型ナイフ形石器が2点出土した(154・155)。154は57.5mm、155は55.9mmの器長を測る。いずれも県北産と推定される流紋岩を用いる。両者が異なるのはプランディングの施され方である。154は最初に大きめのプランディングによって成形された後、さらに細かな調整剝離が背線に加えられている。これに対し、155ではほぼ、大きめのプランディングのみによって仕上げがおこなわれている。また、先端部付近には対向調整もみられる。これには、155の方が厚手の素材を用いているという事情も

関係しているかもしれない。159もA区から出土したナイフ形石器Ⅲ群a類である。154・155よりもより細身のシルエットを持つのは、二側線加工が施されていることも影響している。以上の3点はいずれも刃部の縁辺に大小の剥離痕が観察され、使用痕の可能性が考えられる。

C区からはA区に比較してやや小振りの資料が多く出土している(188～191・193)。188は折損した先端部を推定復元した場合、おおよそA区の154・155に届く器長と想定されるが、189～191・193はより細身で短身である。C区で

はこの他、後述する母岩No.43においても、ナイフ形石器Ⅲ群a類のまとまった出土が確認されている。

E区からも、ナイフ形石器Ⅲ群a類の出土が確認されている(234~236・239・240)。素材剥片が厚手であるためか、240をのぞく全ての資料に対向調整が観察される。234は二側縁加であり、235も基部に残る痕跡からその可能性が高いと判断される。

ナイフ形石器V群(第47図160+161~163・170、第48図171・177~179、第50図199~202、204・209+210、第51図219、第52図227+228~230、第53図243)

本類型は後述する角錐状石器と製作技術、形態が共通するグループである。160+161は大振りの一側縁加工で対向調整も認められる。背縁は鋸歯状を呈する。162は風化が激しく細かな剥離面が読みにくいが、160+161と類似した資料であろう。163も同様である。170はIIa類の大形品とも評価できる資料である。正面右側縁のプランティングには対向調整が認められ、やはりやや鋸歯状を呈する。171も風化が激しいが同様の資料であろう。177はナイフ形石器とすると刃部が礫面にあたるので、角錐状石器とも評価できる資料である。178は、二側縁に先端の部分加工が加わるナイフ形石器であるが、正面飛騨側縁の刃部の角度は急である。また、右側縁のプランティングでは先端部に対向調整が認められ、尖頭部を意識していると推定されることから、角錐状石器と同等の機能値を持つ尖頭形石器であろう。179は裏面の下半部全体に平坦剥離が及んでいる大形の一側縁加工ナイフ形石器である。199は正面右先端のわずかな部分を残し、器体上半部のほとんどを急斜度のプランティングで整形している。200~202は著しく風化の進行したホルンフェルスを用いた資料であり、外観もよく似ることから、同一母岩である可能性が高い。ただし、製作技術では、201には基部裏面平坦剥離が入るのに対し、他の2点には施されないなど、相違点も認められる。

204や209+210や第51図219も断面形の角度は角錐状石器と同等の資料である。

第52図227+228や230は基部裏面に施される平坦剥離の面積も広く、より角錐形を呈する。ナイフ形石器VI群(第53図244)

244は礫面を刃部に設定する黒曜石製の資料で、刃部の角度からすると台形石器に近い。用いられる黒曜石は西北九州産に類似し、石材の面でも注目される。

角錐状石器(第53図245~第54図266)

角錐状石器は、25点確認され、うち22点を掲載した。技術・形態的には多様なものを含む。

245は、横長剥片を素材とし、全周に鋸歯状剥離が入る。素材に横長剥片を使う点では、他に254・262が共通し、265もその可能性がある。一方、250は縦長剥片を縦位に用いており、腹面基部にはパルプが残る。

248は一応角錐状石器のカテゴリーに入れたが、他の資料と顔付きは異なる。正面右側縁は平坦に仕上げられており、両面加工がなされている。用いられる石材も西北九州産に類似する黒曜石で、この点でも興味深い。また、分布の点では後述する母岩No.63の分布範囲に比較的近いところで単独で出土している。層位的にも母岩No.63とほぼ同一面からの出土である。今後類例の増加を待ちたい。

259と260は使用石材の特徴が酷似し、基部側と上半部でもあり、当初は同一個体かと考えられたが、接合はしない。

このほか、実測図を掲載していない資料で、きた最大の器長を誇る資料は、第一分冊では写真のみ掲載している(221頁巻末図版19~77左上)。実測図の掲載は第二分冊で果たすことしたい。

尖頭器(第54図267)

267は尖頭器とした。製作技術では角錐状石器と共に多くのところが多く、裏面は全て平坦剥離で覆われている。

楔形石器(第55図275~277)

楔形石器はチャート製の資料が3点認められた。いずれも小形で、具体的な機能・用途は不明である。

搔器（第 56 図 285, 第 57 図 298 ~ 300）

搔器は石刃ないし縦長剥片の末端にスクレイバーエッジを形成する明確な I 群はみられない。わずかに 285 がその可能性を残すのみである。

298 は厚手の礫面を残す幅広剥片あるいは分割礫を用いて、ほぼ全周に刃部がめぐる大形の円形」搔器である。裏面の刃線には不規則な剥離痕が残され、一枚は器体奥まで伸びる剥離痕が観察される。この剥離痕は刃部を切っており、二次的に石核として利用したものか。であるとすれば、292 の石核のような役割が考えられよう。他は 300 も 298 と類似した素材選択で、削器とした 301 もこの点では共通する。299 は幅広剥片の末端に刃部を作出した資料である。

削器（第 55 図 273, 第 56 図 286 ~ 288, 第 57 図 301, 第 58 図 302 ~ 304）

搔器とはやや様相が異なり、削器類には石刃および縦長剥片がよく利用されている。286 は薄手のやや幅広い縦長剥片の両側縁に刃部が形成される。正面右側縁は主要剥離面側に向かって剥離痕が並ぶ。主要剥離面側に刃部を作出する資料は、288 も該当し、整った石刃が素材となっている。なお、288 にはタール状の付着物が擦掛けに観察され、着柄に関わるものか注目される（221 頁巻末図版 19 ~ 81 右端）。287 は側縁に刃部が形成されるが、その角度は搔器に近い。

302・304 も石刃に近い縦長剥片を素材とした資料である。302 の剥離はやや大振りで、あるいは角錐状石器ないしナイフ形石器 V 群の製作工程を示す資料かもしれない。

二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・石核類（第 55 図～第 60 図）

出土資料中には、274 など一定量石刃を含むが、明確な石刃石核（石核 I 群）は見出されない。縦長系の剥片に対応する石核としては、311 の船底状を呈する資料、313 などである。量的に目立つのは瀬戸内技法関連資料も含めた石核 II 群であり、III～V 群も組成に加わる。

II 群に該当する石核には、289, 309, 318 などがあり、後述する母岩 No. 43・63 では接合資料も多く得られている。289 は礫面の付着する分

割礫を素材とし、いくらかの打面調整を伴いつつ、剥片剥離が進行した最終形態と推定される。309 は厚手の剥片が素材と推定され、とりこうその背面を打面とし、バルブと末端の両方向から剥片剥離が進行している。素材剥片の腹面を底面として取り込もうとした結果と考えられる。現存する部分において打面調整は認められない。

292 は礫面を大きく残す剥片ないし分割礫を用いた資料で、求心状に剥片剥離をおこなったと理解されるが、やや細かな剥離痕が重なることからすると、礫器としての利用も考えられる。

石核 V 群（礫器状石核）は、少数認められる（315・317）

■母岩 No. 43 (珪質頁岩 II 群) : 接合資料 No. 43 - 1・2 (第 39 図・第 61 ~ 63 図)

同一母岩としてこれまでに 183 点を認定した。

その内訳はナイフ形石器 12 点（うち 6 点を掲載）、搔器が 5 点（うち 1 点は搔器／削器、本報告書では 2 点を掲載）、削器が 1 点、二次加工剥片が 11 点、微細剥離剥片も含めた剥片類が 137 点、石核および分割礫が 17 点となる。また、接合を試みた結果、11 組の接合資料が得られた（うち 2 組を掲載）。石材として使用された珪質頁岩 II 群は概ね良質である。

接合資料 No. 43 - 1 は、第 61・62 図に分割して掲載してあるが、これらは報告書作成終盤に接合することが判明したため、実測図の描き直しが不可能であったためである。御寛恕願いたい。巻末図版 20 - 25 には、両者が接合した状態を掲載してある（222 頁）。資料は、3 点の石核と、9 点の剥片、1 点の二次加工剥片からなる。

礫面を背面に配する大形剥片を素材として、底面を有する横長剥片を狙ったものと考えられる。335 は元の素材剥片のバルブを飛ばすように腹面側に向けた剥離がおこなわれている。礫面側に接合する 336 や 337 は打面形成ないし調整の意味を持つかもしれない。現段階までに接合関係が確認されなかった資料群においても、同様の石核が見出される（363・364）。このような横剥ぎの技術を使用する一方で、一般的剥片の生産もおこなわれている様子が他の資料から読み取れる。

365 や 366 は不定形剥片や幅広剥片といった一般的剥片に対応した石核と考えられるが、そうした素材を供給した先が、346 の二次加工剥片や、347 や 348 の搔器と把握することができる。

とはいっても、348 の搔器などは、かなりイレギュラーな形状の剥片を臨機的に利用した印象を受ける資料であり、母岩資料 No. 43 におこなわれた剥片剥離行為の第一義的な目的はやはり、横剥ぎの技術を用いたナイフ形石器の素材生産にあったものと思われる。340 ~ 345 はその一部であるが、未掲載の資料も含め、比較的小さなサイズの資料がまとまっている。第 47 図 154 や 155 といった単独母岩である可能性が高い資料と比べると、その差異が理解しやすい。おそらくは遺跡に残された以外のナイフ形石器も製作され、遺跡外へと搬出されているのであろう。

■母岩 No. 63 (珪質頁岩 III 群) : 接合資料 No. 63 - 15 (第 66 ~ 68 図)

同一母岩と考えられる資料の認定を進めたところ、現段階までに 1153 点の資料が確認された。認定の根拠として三点を挙げておく。第一に肉眼による観察において石材の特徴を比較的把握しやすいことが挙げられる。礫面のみからなる接合資料なので実測図は掲載しないが、223 頁巻末図版 21 - 87 に示した接合資料の礫面のカーブから判断すると、かなり大形の原石を用いたことも推定できる。第二に、分布のまとまりである。63 頁の第 40 図に示したように、およそ直径 30 m ほどの範囲に 1153 点の資料がまとまって分布している。I 8 グリッドを中心とした大きな分布と K 8 グリッドを中心とした小さな分布とに分かれている。第三に、生産される剥片の齊一性の高さである。第 67 図 407 ~ 第 68 図に示したのは、小形の有底剥片の一群である。掲載したのはごく一部に過ぎず、同一母岩資料と認定した剥片の大半がこの種の有底剥片である。

以上の理由によって、一応、現段階では 1153 点が全て同一母岩と捉えておく。

先述したように、多くの有底剥片が見出されるが、しかしその目的は明確ではない。母岩 No. 43 のように、ナイフ形石器の生産が候補として浮か

ぶが、母岩 No. 63 では、第 66 図 390 や 391 のナイフ形石器があり、これらの生産にも当然関係があったものと考えられる。

敲石・磨石 (第 69 図 466 ~ 468)

466 は敲石である。敲打痕はわずかに残されるのみである。467 と 468 は磨石の可能性がある資料である。467 は片面のみ平滑な面を持つ。

468 は側縁をのぞく表裏面がかなり平滑な状態になっている。自然礫の可能性も考えられるが、いずれにせよ何らかの目的があつて搬入したものであろう。

(4) 小結

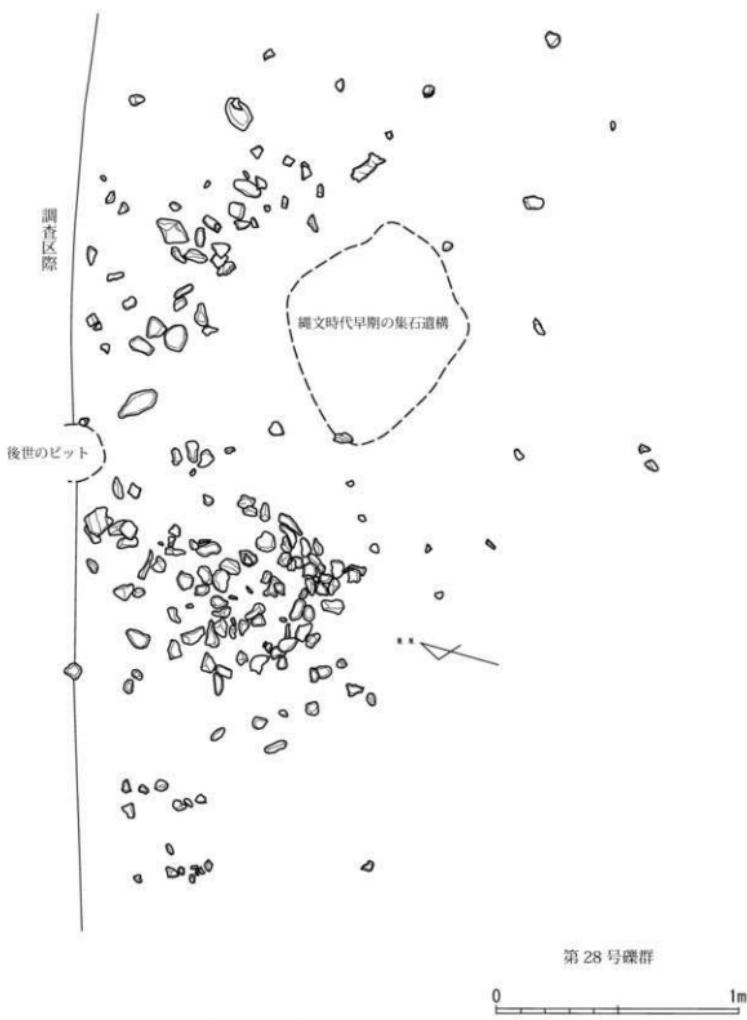
資料の意義と派生する課題

本期については、トゥールや母岩資料が豊富で、事実記載に合わせて、器種構成や剥片剥離技術、行動的側面について多く触れるところがあった。

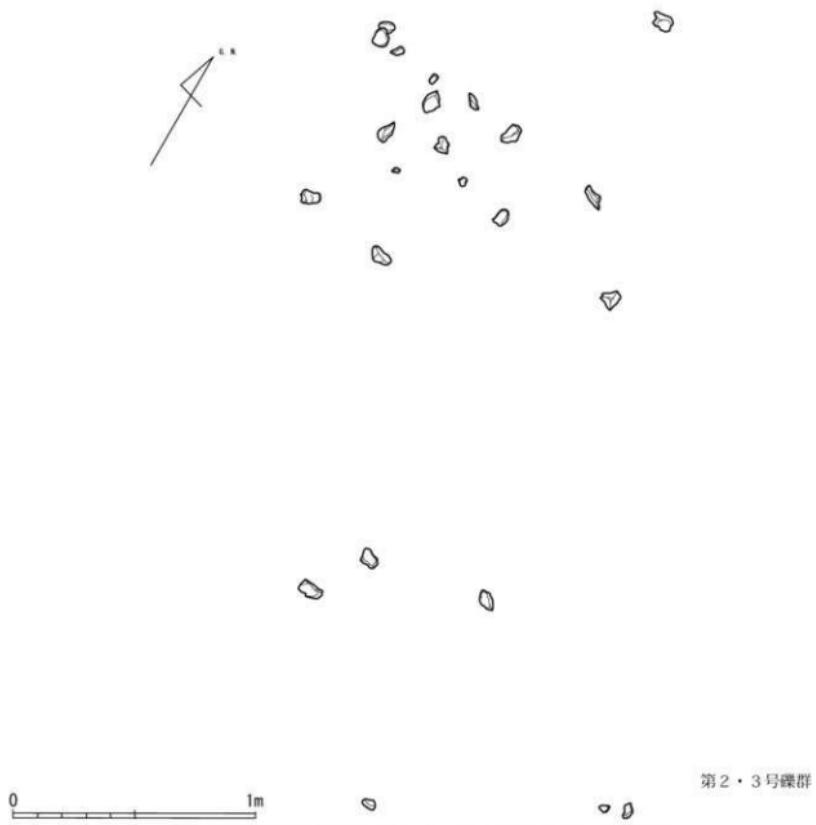
ここでは、資料の意義と残される課題についてのみ提示しておく。

第 V 期の石器群は、本遺跡の全時期を通してナイフ形石器や角錐状石器といった通常狩猟具と考えられる石器の出土点数が最多である。にもかかわらず、第 IV 期、第 VI 期の前後の時期を通して剥片尖頭器の出土が皆無であることは興味深い。また、ナイフ形石器の出土量と比較して真正の角錐状石器の出土量が少ない点も本遺跡の特色といえる。ナイフ形石器第 V 群 (類角錐状石器) が代替的な役割を果たしていることが予想されるが、角錐状石器を多く出土する他遺跡の存在もあり、これが遺跡の機能差であるのか、編年的な差であるのかが今後の課題の一つといえよう。

報告上の課題も多く残される。まず第一に母岩 No. 63 をはじめとした母岩資料および礫群の詳細なデータ提示が求められる。これについては第二分冊をはじめ、今後も追究・公表する機会を得たい。



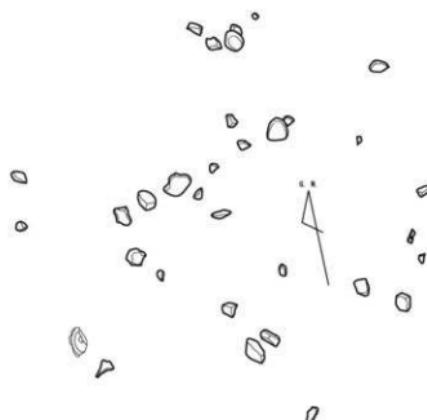
第 41 図 第 V 期の石群 (1) 第 28 号 石群 ($S = 1/20$)



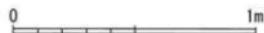
第42図 第V期の砾群(2) 第2・3・7・66号砾群 ($S = 1/20$)



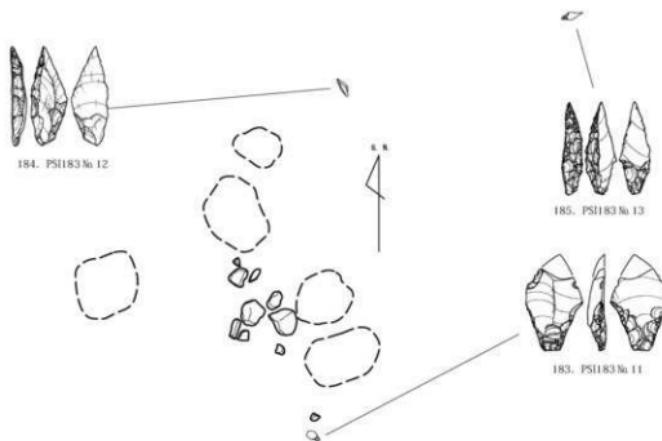
第 25 号 砥群



第 141 号 砥群



第 43 図 第 V 期の 砥群 (3) 第 25・141 号 砥群 ($S = 1/20$)

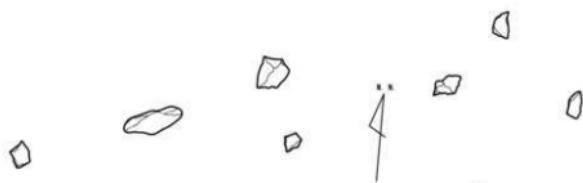


※点線の範囲内は後世のピット

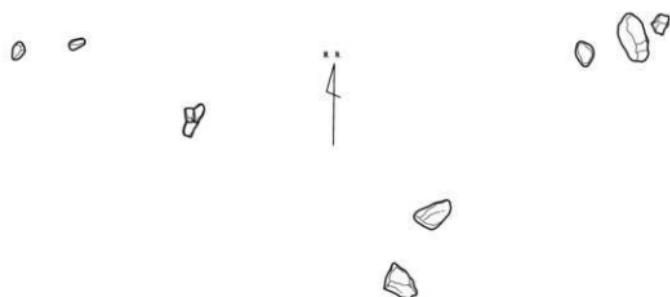
第183号砾群



第44図 第V期の砾群(4) 第47・48・183号砾群 ($S = 1/20$)



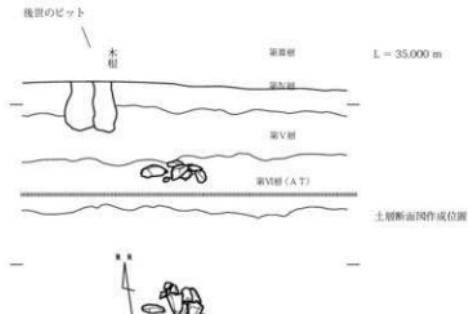
第 50 号 碓群



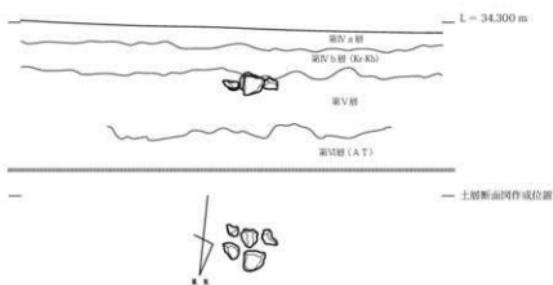
第 103 号 碓群



第 45 図 第 V 期の碓群 (5) 第 50・103 号 碓群 ($S = 1/20$)



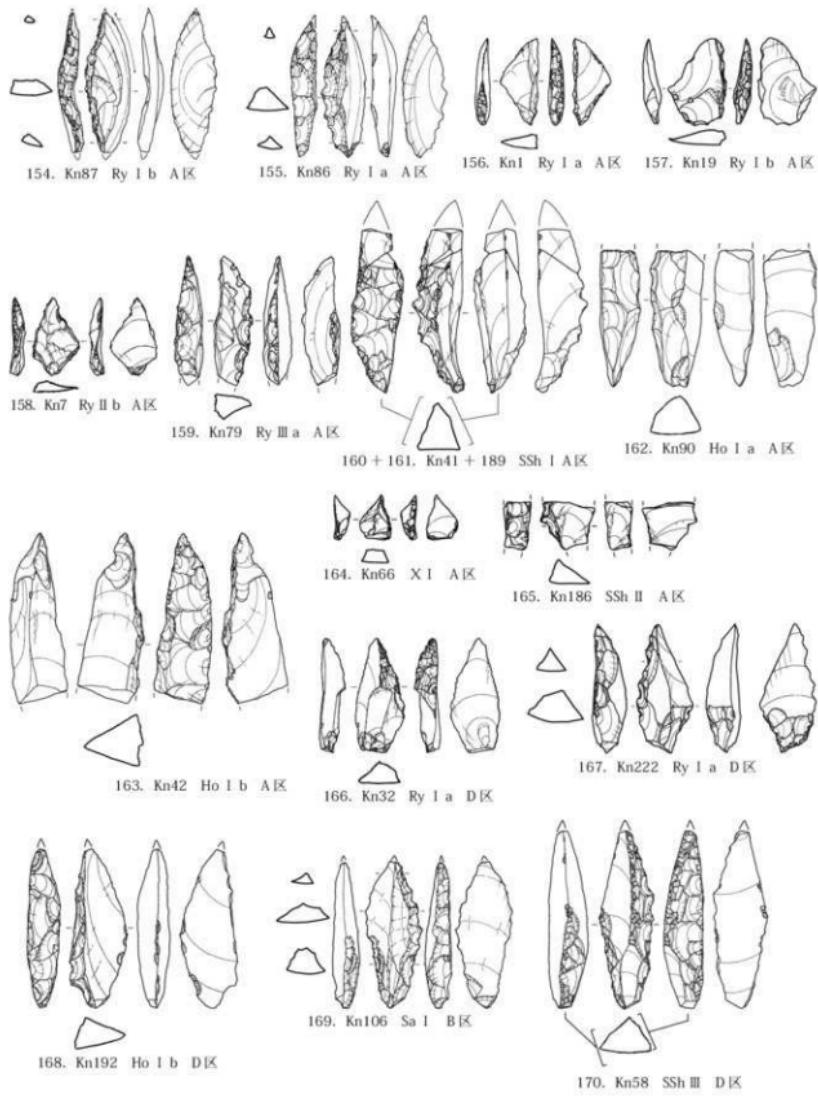
第4号礫群



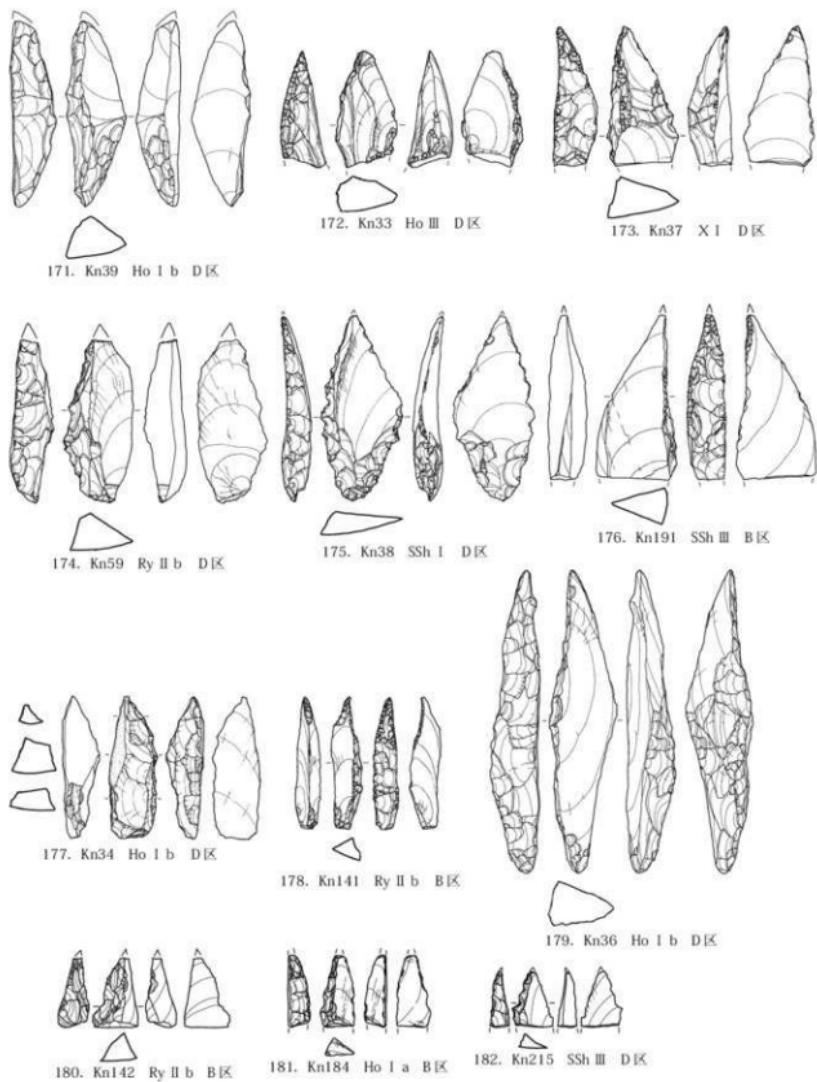
第9号礫群



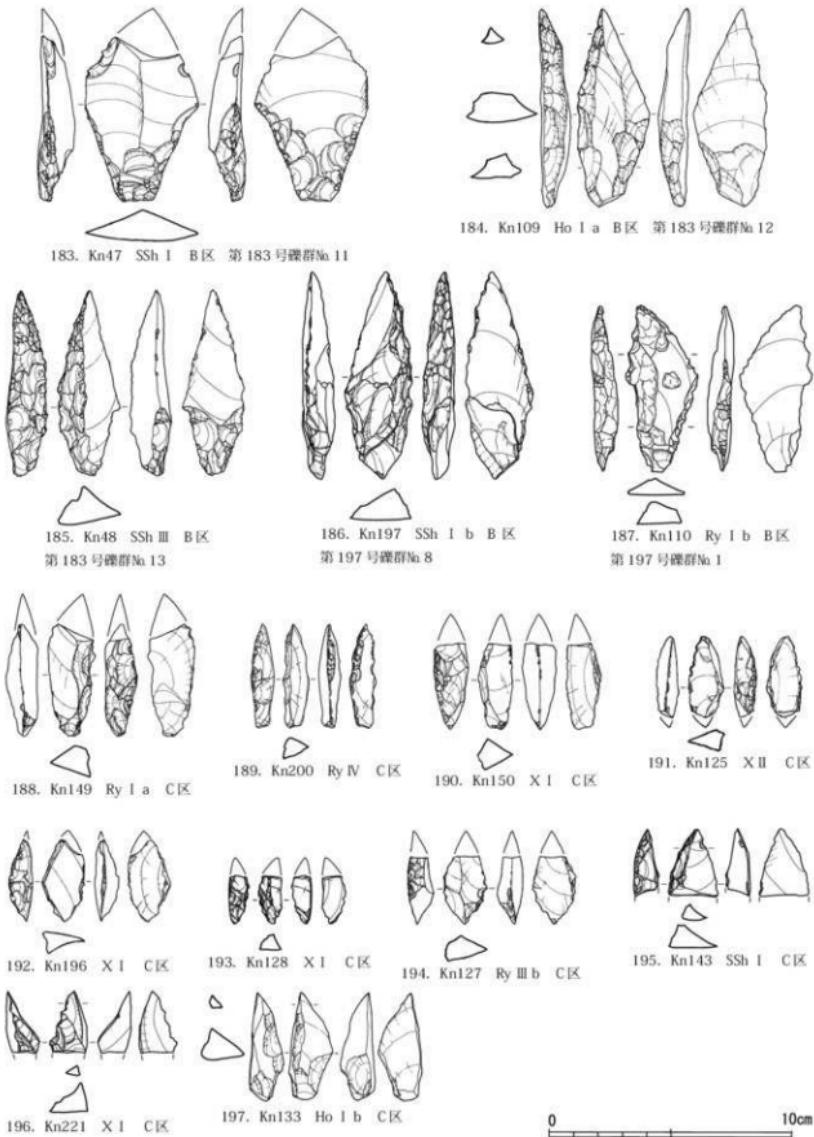
第46図 第V期の礫群 (6) 第4・9号礫群 (S=1/20)



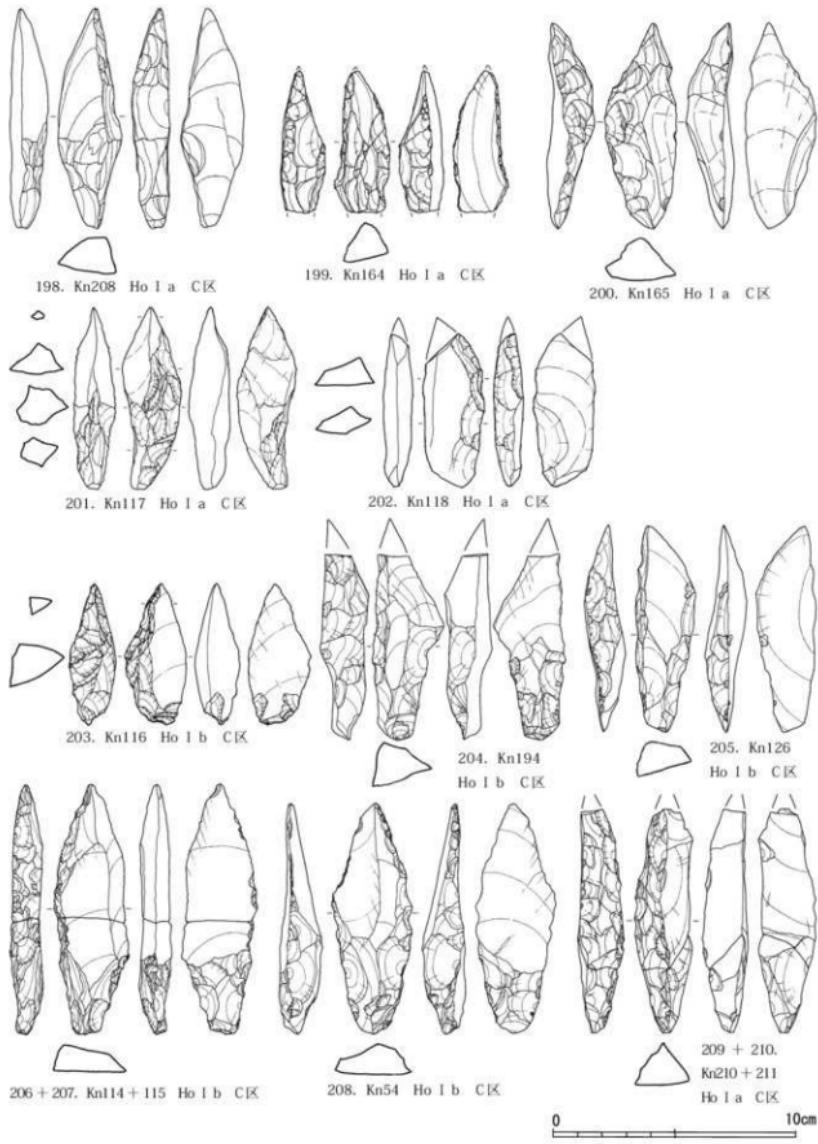
第47図 第V期の石器群（1）ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



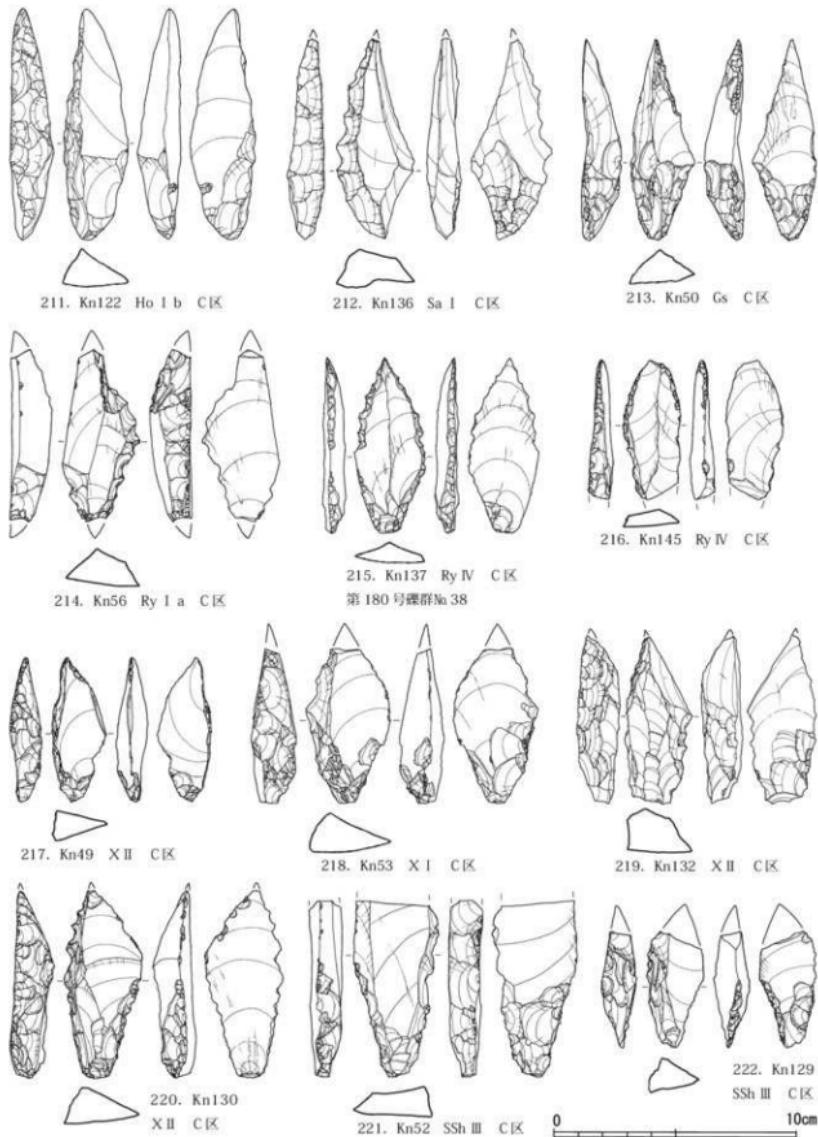
第48図 第V期の石器群(2) ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



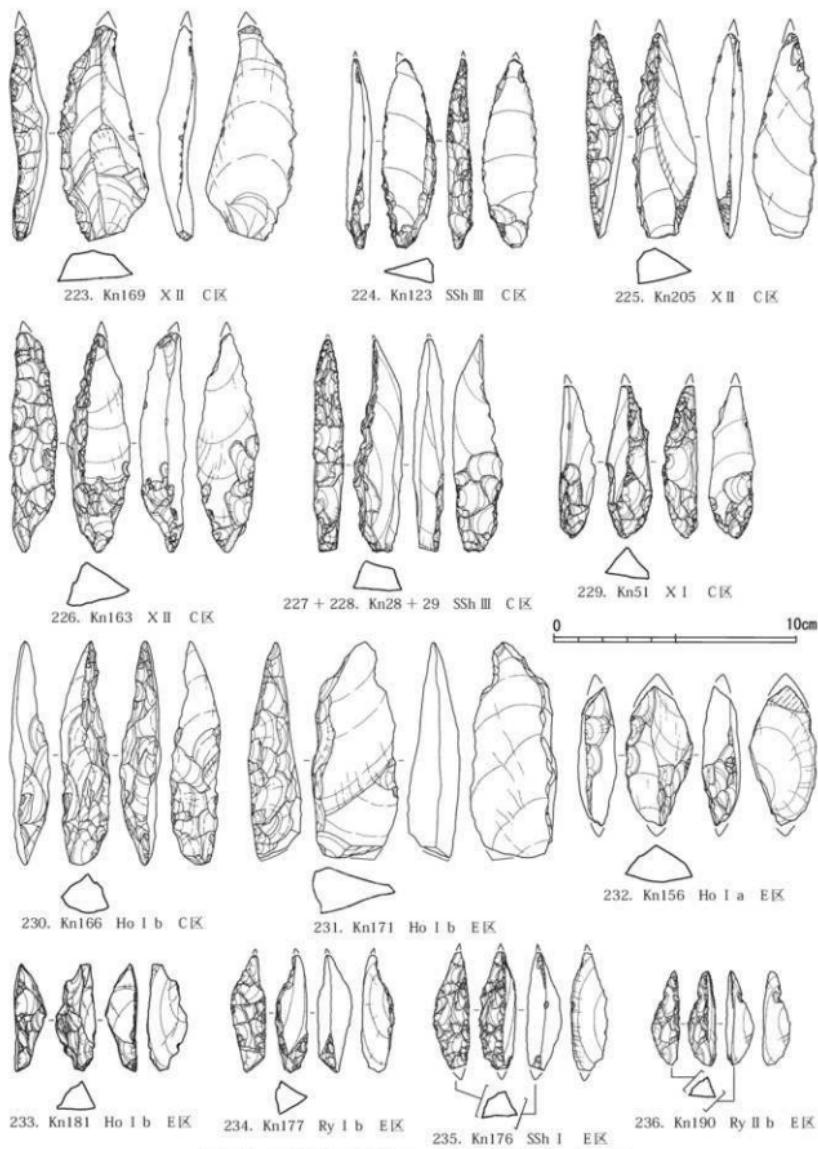
第49図 第V期の石器群（3）ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



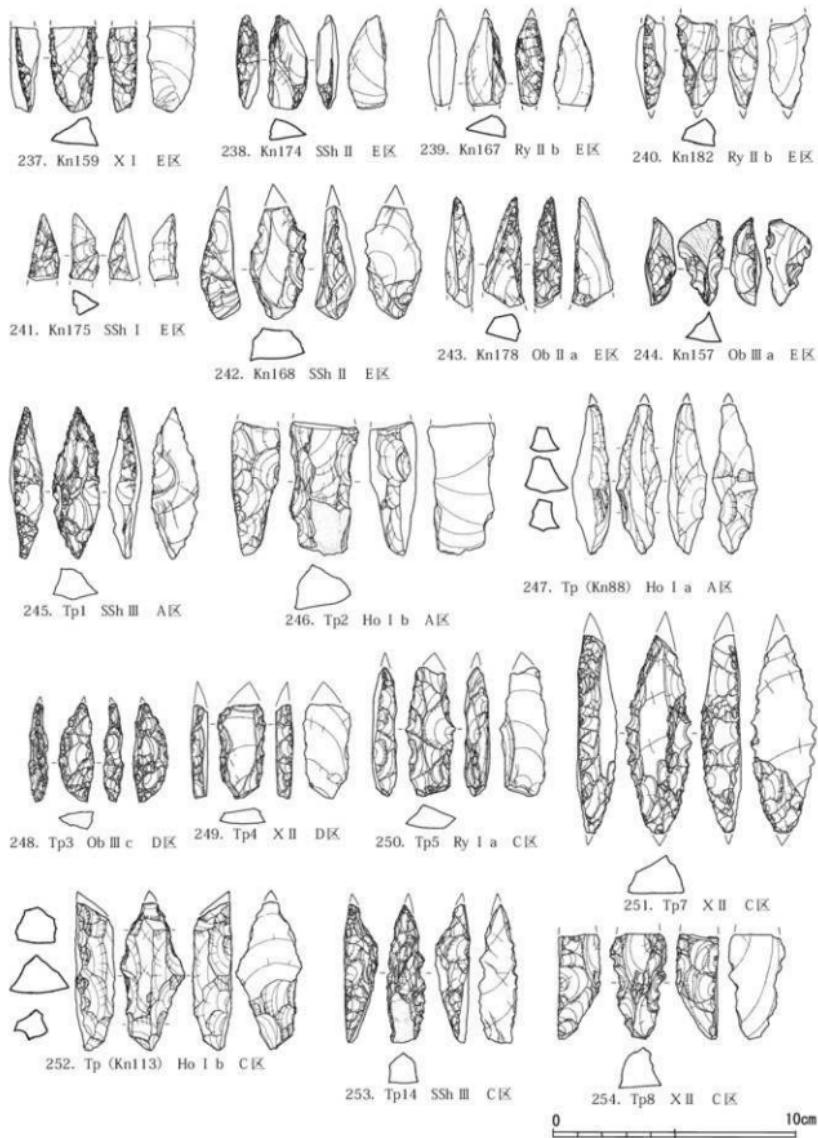
第50図 第Vの石器群(4) ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



第51図 第V期の石器群(5) ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



第52図 第V期の石器群(6) ナイフ形石器 ($S = 1/2$)



第53図 第V期の石器群（7）ナイフ形石器・角錐状石器 ($S = 1/2$)